

---

# 真・恋姫十無双～伝説を継ぐ物と愚者～

スペリオルス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫十無双〜伝説を継ぐ物と愚者〜

### 【Nコード】

N5111X

### 【作者名】

スペリオルス

### 【あらすじ】

馬鹿が馬鹿とであったせいで外史の一つが滅びる！？そこで偶然子供守つてなくなった男をその世界の抑止力として送り込まれた！  
！送り込まれた青年は登場人物の彼女達が消えるのを防ぐために、馬鹿の魔の手から守るために奔走する！！

## 登場人物紹介・設定（前書き）

まずは登場人物の細かい（？）設定です  
至らぬところも多いでしょうが  
楽しんでください！！

## 登場人物紹介・設定

姓：珀 名：武 字：麒麟 真名：龍鳳

イメージCV：森田成一（幼年時代は松岡由貴）

この物語の主人公。

とある事情により命を落とす。

本来は転生は出来ないらしいのだがとある馬鹿の性でその外史が滅びる事が発覚し、事情が事情なのと三国志関係の知識を持っていたため『恋姫』の世界に転生させられる。

性格は人当たりがよく敵を作りにくい。この世界に来る原因が原因なため阿呆とか頭がぶっ飛んでる奴が心底嫌い。

容姿は『BLEACH』の下睫がない志波海燕（分かりやすく言うと黒髪の黒崎一護）ただし髪型は藍染との最終決戦時のもの、身長は大体180cmぐらい（原作開始時）

滅びる要因を倒すために能力を貰っている。

詳細は

・『NARUTO』の『写輪眼』（万華鏡に開眼済み、かつ失明無し、須佐能乎はイタチと同じ）  
スサノオ

・『NARUTO』の全ての忍術& amp; 全ての忍具の口寄せ可能

・『BLEACH』の海燕の斬魄刀『ねじばな拵花』と一護の斬魄刀『ざんげつ斬月』

（一護の方は卍解も可能）

・『ONE PIECE』の『霸王色・武装色・見聞色の覇気』と  
身体成長

・三国志の時代でも使える現代の知識と自身や軍隊を鍛えるのに効果的な鍛錬方法に戦うのに必要な兵法と戦闘方法、完全瞬間記憶能力（本ならば一度読めば内容を全部覚えられる）

また名前の由来は中国で神聖とされ、東西南北中央の守護神・青竜、白虎、朱雀、玄武、麒麟に習って命名された

北郷一刀ほくこうかずと

もう1人の転生者。自身の欲望に忠実で可愛い女の子に眼がない。いわゆるチャラ男。前世では『恋姫』シリーズを全部プレイしていたためその流れでこの世界に転生する。その際にニコポ、ナデポといった能力を貰う。ただし主人公が転生したことで『恋姫』のメンバーには効かなくなっている

北郷刃也ほくこうや

本来北郷一刀になるはずだった青年。上記の馬鹿が『一刀に転生したい』と願ったためこうなった。性格は本来の一刀そのもの。ただし本編には登場しない。上記人物の回想だけでしか出番はないだろう

貂蝉

卑弥呼

于吉

左慈

外史の管理者達。

外史が滅びる要因を倒すために管理者勢は全員主人公の味方、と  
いうか管理者にも教えずに滅びの原因を送り込んだためどうにかそ  
の原因を倒そうと画策しているも、詳細がまだ分からないため目処  
が立っていない

登場人物紹介・設定（後書き）

10 / 17 一部変更

ぶるるーぐ(前書き)

作：まずはお前がどうしてこうなったかだ

龍：略仕方が『リリなの』の方と一緒にじゃないか

作：俺がすきなんだ、龍という字が

龍：おい

作：細かいのもこっちで書くんだよな

龍：前話の意味ねえ！！

ぶるるーぐ

Side 主人公

「「「「「どうもすまなかつた」「」「」

「いや、いきなり土下座されても…顔上げてどうしてこうなったのか簡潔で良いから説明してくれないか？」

「私は貂蟬よ」

「わしは卑弥呼じゃ」

「于吉と申します」

「左慈だ」

「あ、いやどうしてこうなったのかを説明して欲しいんだが…」

「うん、実はねーん」

- ・別の地球で一人の男性が死亡
- ・その原因は神様
- ・それ自体を誤魔化す為に別の世界に転生させる
- ・『真・恋姫+夢想』と呼ばれる世界だがそれは実際の世界として存在している
- ・その人間は実はマイナスエネルギーの塊でそれが原因でその世界（外史）が滅びようとしている
- ・それを防ぐために強力なプラスエネルギーを持つ人間を探していた
- ・そのとき調査に出ていたものが死に掛けたのを助けたのが俺

・というかわりに死んだらしく、さらに好都合なことに強力なブラスエネルギーを持っていたためその世界に行って欲しい

「ということか？」

「そうなのよ〜ん」

「引き受けてくれんかのう？」

「もちろんただとは言いませんよ」

「こちらで出来る限りのフォローと能力の贈与をしてやる」

「気前良いな…もしかして俺が死んだ原因の子があんたらと一緒に調査に出ていた奴とかいわないだろうな？」

「……じつはそのとおりです」「……」

「まあしっかり認めたから文句は言わないが…とりあえずはそいつの能力と特徴を教えて欲しいんだが」

「いいわよん」

んでその転生者の特徴だが

- ・本来その世界で『天の御遣い』となる予定の男に成り代わる
  - ・身体的特徴はなぜかメガネ付きのその男（おっさん）
  - ・能力として死の原因となった神からニコポ、ナデポの能力を得た
- （らしい）

「何で（らしい）ってつくんだよ」

「その神からの情報がまだ着てないからよん。今わかってるのは噂として聞いたものよん」

「た、大変です」

「む、台与ウチではないか」

「そんなに慌てて…いったいどうしたんですか？」

「そ、それが…」

「まさか俺達が新しく管理する外史に転生者を主人公（予定）として勝手に送り込んだ神が資格剥奪されて下界か外史に、しかもさっき行ったところに流れ込んだとか言うんじゃないだろうな？」

「あ、左慈さんの言ったとおりです!!」

「「「「「いやさ、マジぶざげんなよ、いったいどうしろと…」「」」」」

「しかもその神様は外史には関わるか関わらないか分からないそうで…それとこれが件の転生者の能力とかです」

台与から貰った紙に書かれていたことはさっき噂として聞いたものそのまま…これってどうなんだろう？

「まあこれで何とかなるわねん」

「むむ」

「彼を主人公、いえ最悪あたらな登場人物とすれば」

「奴の能力は無効化できるからな」

「あ、先ほどはありがとうございました」

「いえいえ…って何のんきに言っただお前！！謝罪はないのか！  
？俺を殺したことに對する謝罪はないのか！？」

「ア…あの…ごめんなさい」

「…謝ったからまあいい…が、今後は気をつけるようにな…正直二度とあつて欲しくないが」

「そこら辺はダイジョブよ〜ん」

「それでお前さんにはお前さんたちの世界では『恋姫+夢想』と呼ばれているゲームの世界に行ってもらおう」

「名前事態は知っている…でも俺原作知らないんだけど…知ってる  
といえば知っているが二次創作小説を読んだだけだぞ…三国志自体  
は正史と演技、ほぼ網羅してるけど…」

「それなら余計に大丈夫ですね」

「その世界はいわゆるその二次創作小説に当たるからな」

「でもな…」

「何が不安なんですか？」

「本来はゲームだから敵に突っ込んでつてもそう簡単に死んだりしないけど、俺にとつては『現実』だからな…うかつにそんなことか…最悪賊に襲われたらその性悪な転生者止める前に死ぬ」

「それも大丈夫よ」

「お前さんがそうならんよう力を与えることを許可されたからな」

「神様といつても件の用な低級から天照様や仏陀様のように超大物の方もいますからね」

「今回は特例ということで許していただいたんだ、本来は許されない転生をな」

「あ、やっぱりだめなんだ」

「転生は記憶をそのまま保持していることが多いですから…それでその世界の修正力が効かず滅茶苦茶になって世界そのものが滅びてしまった例もあったそうなので禁止したんです」

「それに人間の一生は実は多少決まってるね、それを書類とかで管理してるのよ」

「ってことは今回は決まっている書類を変な風にしちまってそいつが死亡、それで処罰を恐れて禁止された転生を行い、ばれて剥奪と追放、んで俺はお前らの仲間を偶然助けて死んで、都合が良かったから尻拭い…そいつあったら速攻ぶっ殺して良いか？」

「悪いがそれは出来ん…そいつの新しく決められた寿命は100年だからな」

「無駄に長い！！一体ドンだけ欲深なんだ！！」

「ですがその世界にいるのは約3年ぐらいなんですよ」

「俺の記憶だと三国志って50年以上の気がするんだが…」

「そうなつてないのが『外史』、お前達で言う『パラレルワールド平行世界』だな」

「納得…で、本格的にはどうするんだ？」

「そのこは黄巾の乱の中盤ぐらいに現れるわん」

「魏、呉、蜀もしくはほかの勢力のところに『天の御遣い』として降り立つな」

「そして自らの欲望…』その世界の有名武将全員をはべらせる』という願いをかなえようとするでしょう」

「お前はそれを阻止しつつ、そいつを元の世界に帰すために乱世を収束させれば良いのさ」

「まあ理解した…でも二次創作とかでの知識だけど蜀か呉に落ちたら最悪じゃないか？天然系が多いところとその血を入れようと積極的に迫ってくる連中のところだぞ」

「あ、それに関しても操作して良いと許可を貰いました」

「というか完全に世界が壊れるのを防がなきゃいけないんだから出るよな、そりゃ…まあこれで防ぎ方がはつきりしたな」

「そうね、最悪そいつが狙っている子を1人落としちゃえばその願いは叶わない」

「そして修正力によって半強制的にもこの世界に戻されるからな」

「ではよろし」「」「」「そのまえにやることがあるだろう」「」「」「」「  
そうでしたね」

「では能力を授けるぞ、希望があつたらいつてくれ」

「こんなところかな」

・『NARUTO』の『写輪眼』（万華鏡に開眼済み、かつ失明無し、須佐能乎はイタチと同じ）

・『NARUTO』の全ての忍術&amp;amp;全ての忍具の口寄せ可能

・『BLEACH』の海燕の斬魄刀『拵花』と一護の斬魄刀『斬月』

（一護の方は卍解も可能）

・『ONE PIECE』の『霸王色・武装色・見聞色の覇気』と  
身体成長

・三国志の時代でも使える現代の知識と自身や軍隊を鍛えるのに効果的な鍛錬方法に戦うのに必要な兵法と戦闘方法、完全瞬間記憶能力（本ならば一度読めば内容を全部覚えられる）

「この『万華鏡写輪眼』の能力は？」

「『天照』と『月詠』後『斬月』は虚化なしで」

「まあ『須佐能乎』<sup>スサノオ</sup>があるからいらんわな」

「ほかにはないんですか？」

「まあ文字は同じ漢字圏だし転生ってことは子供から始まるんだろ  
う？ だったらそれでおいおい覚えていけるしさ」

「真面目に考えてるんだな」

「ああ… あ、それで斬魄刀は適当な年齢になったらうまく手元に渡  
るよつに、忍具の方は…」

「こつちで口寄せできるように準備しとくわん」

「恐らく修正力で忍術は妖術の一種になっているでしょうが…」

「だが万人向けになつとるかもしれん、そこは期待じゃな」

「最悪偶然を装って閃く感じにしてあげますよ」

「助かる」

「最後に名前だな、お前ずつと『？』だったからな」

「いや最後にメタ発言すんなよ」

「そうだな… 中国だし… 天の御遣いに対抗… 決めた！！」

「どんな名前ですか？」

「姓を珀、名を武、字を麒麟とする――！」

「ん、良いわねん」

「だがまだ足りんぞ」

「真名がありませんからね」

「あ、そうか…んじゃあ真名は龍鳳とするよ」

「由来は何なんだ？」

「珀は白虎、武は玄武、龍は青竜、鳳は朱雀、麒麟はそのままだけ  
どね」

「ほんとセンス良いわねん」

「そうじゃな」

「どづいづことですか？」

「中国の守護獣達から取ったんですよ、恐らくその世界を守るとい  
う彼なりの意思表示でしょうね」

「ん？他にも何か混じったようだな」

「あ、あの転生者こんなことも望んでたのねん」

「何なんだ？」

「三国志の別の外史の『BB戦士 三国伝』というの設定が一部盛り込まれたようじゃ」

「これは…各国の代表者は昔の英傑の生まれ変わりという感じですね」

「これは大きな影響はないな…どうやら存在そのものが原因みたいだな」

「結構すごいことでもあるきがするがな…てかその武器を渡すのかこつなるんだろつな」

「そこら辺はおいおいって感じですね」

「ではもういいわねん」

「そうじゃな」

「ですね」

「ああ」

「行って来る」

「」「」「」「頑張つてこい…！」「」「」「」

「おげんきで〜！…！」

そして俺は光を潜り抜けて…

「おぎゃあ！！おぎゃあ！！」

赤ん坊となりました…てか意識が覚醒すんの3歳ぐらいって指定しときゃよかった後悔するのはまた後ほど

## ぶるるーぐ（後書き）

作：原作知らないってどうなんだろうな 割とマジで

龍：いいんじゃないか？一部そんな人いるし

作：というかちょっと無理栗っぽいのが…

龍：人は勧善懲悪のが好きだから何とかなんたる

作：そうでもないよ、俺アンチヒーロー物も好きだし

龍：なんで蜀ルートにしたんだよ

作：ああいう無垢な子ってなんかね

龍：納得…で、次回は？

作：一体何があった！？ってぐらい時間が飛ぶとだけ言わせて貰おう！…！！

龍：どこのぞの可変機乗りの似非侍かあ！！！！

## 第一話 今までとこれから（前書き）

作：今回から前書きがちょっと変わるぜ

龍：この作者のもうひとつの作品『魔法少女リリカルなのはStrikers 青年と魔導師の交わり』の主人公、赤青龍士だ

鳳：んで俺の名前表記は『鳳』になったのね：てかそっちみたいに原作キャラを…ってそれだと收拾つかなくなるか

龍：それに真名表記じゃないとかなり複雑になるしな

作：同姓の人って異常なほどいるからね

龍：そういえばBB戦士三国伝も使っただって？

鳳：無謀な気がする…

作：使うのは武器だけだから…曹操はちょっと難しいけど

龍：そこはお前の技量しだいだな

鳳：あまり期待できんがな

全：それでは本編をお楽しみください！！

## 第一話 今までとこれから

今現在俺は修行中です…中国の神聖なる山 泰山で

しかも師範は…

「ほらほらもっと早く動かんか!!」

「まだまだじゃぞ!!」

「早くしないと死にますよ」

「もっとときびきび動きやがれ!!」

と、管理者の皆さんに加えて

「この程度の風、なんともなかるうに…」

「こんな鉄、まったく硬くないだろう、もっと早く砕かんか」

「この程度の熱で根を上げないでくださいね」

「こんな水に押されるでないぞ」

「ふむ…だいぶマシになってきたが…まだまだだな」

四神の青竜様、白虎様、朱雀様、玄武様、そしてその方達を束ねる地位におられる麒麟様です

ってかたつた3歳ぐらいの子供になにやらせてんだろつと思つて  
ます

そしてどうしてこうなつたかというところ…あんまり思い出したくないけどこの荒行から逃げるために思い出してみますね

〈回想〉

俺は洛陽の商床の息子として生まれた…

ほとんど覚えていないが父親も母親もかつては宮廷に仕えていたらしく、家には（自衛のためかもしれないが）一通りの武器と兵法書がそろっていた

1歳に満たないうちから動き回り、なおかつ自分達もあまり読まない兵法書を嬉々として読んでいる子供…生前読んだ2次創作だと『神童だ！』とか『流石俺（私）の息子だ！』とかほめてるけど実際にそんなことはなかった

むしろ両親には気味悪がられ、徐々に徐々に距離をとられていつているのが子供ながらに（実際は大人に近いが）分かった…

そしてつい先日、俺が3歳になっていくばくか過ぎたある日…両親が長安に出店するといい、その視察に行くことになった…避けられてはいたがやはり家族、その旅で何とかできるかもしれないと思つていた俺だつたが…

現実八非情ダツタ

俺を眠り薬で眠らせた後、離縁するといつうまを残し、両親は俺

の元から、いや自分達のところから俺を追い出した

そして目覚めた俺は一番恐れていたことが現実になったことを知った…しかし不思議と恨みはなかった

離縁されたからそれまでの名前なんぞ使う気にならないし…ちなみにこれまでの名前は姓を『無』、名を『妙』、字を『息災』、真名は『大安』…商売魂たくましい感じだった…

恐らくこんな微妙な名前だった姓だろうな、恨み抱かなかったのは…てか誰だつて嫌じゃないか？『無』なんてなんかどっかの普通太守よりひどいめに

「誰が普通だーーーー！！！！！」

どれだけそれに劣等感を持ってるんだ…次元の壁を越えて突っ込まれたぞ

そして俺は子供だったがゆえに、しかも食料とかもたいしていつかほとんどなかった…が、運良く管理者達が助けに来てくれ、鍛え上げるとのことこうして泰山に来たのです

しかし泰山は神聖なる山…当然守護者がいると思っていたのですがまさか四神と麒麟様とは思いませんでしたよ

でも結構心が広い方達だった、かつ自分達が消滅すると聞き、俺がそれを防げる唯一の存在と聞くとまさかまさかの武器とかを与えてくれてかつ一緒に鍛えてくれることになり、冒頭へと戻るしだいです

回想終了

また台与たいよから新たに情報もたらされました

元々馬鹿神は部下へ書類仕事のほとんどを押し付けていたらしく、久しぶりにやったらそれが起きたとのこと、そしてそれを完全に誤魔化しかつ自分への恨みを消すためにさまざまな工作をこの世界とこの世界につながる未来にしていたことが判明しました

一つは既に判明しているように『殺してしまつた奴を北郷一刀として送る』でしたがそれ以外に結構出てきたのです

出てきたものをまとめると以下のようになりますね

- ・その恋姫の世界の女性陣は成長すると皆胸にふくらみがつく（そいつがそんな性癖だったため）
  - ・BB戦士三国伝の伝説の武器『龍帝剣りゅうていけん』や『虎錠刀こていとう』が存在する
  - ・気が『ドラゴンボール』や『ダイの大冒険』の使い方である
  - ・『NARUTO』におけるチャクラは内気、自然エネルギーは外気、これを五分五分にして体内で精錬することで仙人モードになれる
  - ・奴も斬魄刀を持っている、名は不明
  - ・虚化は不可能（これは俺にもありがたかった）
- といったことだ

ちなみにこの情報整理の結果、俺の修行の量が大量になったのは言うまでもない

第一話 今までとこれから（後書き）

作：こんなものかな

龍：短くないか？

鳳：いや、十分だと思う…これ以上だとまた成長後になるから

作：そ、次回はさらに飛びます飛びます

龍・鳳：微妙なネタばれしてんじゃねえ！！

## 第二話 成長と出会いと（前書き）

作：今回で幼少期編は終了です

龍：それでこの後は？

鳳：俺としては何人かともう面識と微妙で良いからフラグ立てておきたいな

龍：それが目的だもんな

作：まあ最低一人で良いんだけどな…今回原作キャラが出て来るんだがすごく意外な人物だ

龍：まあ俺のときも主人公出てこなかったし…

鳳：蜀 と言っているのにまさかの展開ですか？

作：あ、付け加えるが蜀 とは言ってるがほとんどオリジナル展開になるから

龍・鳳：撤回しろ、今すぐに！！

作：…というわけで本編始まります！！

龍・鳳：無視すんな！！！！

## 第二話 成長と出会いと

はい、無妙息災改めまして二話前で決めた名前を名乗ることになりました

姓を『珀』、名を『武』、字を『麒麟』、真名を『龍鳳』です

姓は白虎様から、名は玄武様から、字は麒麟様から、真名は青竜様と朱雀様からとったと言いましたら、愛い奴、といわれていろいろ貰いました…が、よくよく考えてみると黄巾党だろ…が董卓軍だろ…がんだろ…が一人で完全粉碎できそう…呂布も怖くない!!

ちなみに貰ったのは

青竜様 龍帝剣、真赤龍翔神刀、真青龍烈斬刀（この2本は併せるとさらに強力なものになるといわれた）

白虎様 虎錠刀二振り

朱雀様 炎骨刃、七星剣、天鳳星鳳剣、天鳳威天剣

玄武様 破塵戟、方天武戟、靈龜甲盾

麒麟様 宝扇剣、戦馬・赤兎馬、漢全土の詳細な地図

これらを頂いたときの白虎様に向けた全員の視線がすさまじかった、それでもものすごく居心地悪そうにしていたとだけ言っておく

俺はまったく持って不満がないんだけどね

「お前さんはこれでとりあえず修行は終わった」

「しかしまだ慣れていないものがある」

「本当の戦闘だろ」

「よく分かっているじゃないですか」

「それで台与から情報が入っている」

「はい、泰山からかなり離れてますがそこに大勢の賊がいまして、その近くの邑を狙っているそうです」

「その討伐か…人の死 殺すことには慣れていないからいい結果が出せるとは思わないがな」

「むしろなれないで欲しいわん」

「慣れてただ殺すだけになったらそれは人ではなくなることと同義じゃからな」

「その通りです」

「それじゃ行って来い」

「近くまでは私が送ってあげます」

そうして俺は台与に送られてその賊の根城の近くに来た…ここで台与とは別れ俺は一人でそこに向かう…前に外気を取り込んで仙人モードを発動させて人数とどこにいるのかを確認する

「ちっ…賊どもはどうやら今から邑に行くようだな…赤兎馬、行けるか？」

俺が尋ねると当然だとばかりに頷く赤兎…ちなみにこの赤兎は三国伝に出てきたのだから、この機械がほとんどないこの世界では本当に珍しいというか…存在していることすらおかしいかもしれない…そして騎乗部分は触ると鉄ではなく外は革、中は綿となっていてとても座り心地はよさそうだった

が、こんなことを考えている場合ではない…なにせ俺達の到着が遅れて賊に襲われたなんて落ちになったら師匠達からどんな御仕置が下されるか分かったものではない

という感じで俺は赤兎をバイク形態にして猛スピードで走らせる  
殆ど赤兎に任せればいいため俺は仙人モードを維持しておく…これで賊徒どもの前に出ることが容易になる…さらに簡単にで良いから攻撃が即座に出来るような状態にする

そうして俺は何とか賊が邑に入る前に賊と接触することが出来た…

「てめえ…何モンだ？」

「ただのガキなのに何しようとしてんだ？」

「俺達をてめえ一人でとめるつもりか？」

「その通りだ」

「はっ…そんななりでかよ…無謀って言葉、知ってるか？僕？」

今の俺の格好は『BLEACH』の檜佐木修平の姿に黒鉄製の手甲・足甲を両方とも肘・膝当りまでつけて（足の方は服の下に隠れている）、腰には斬魄刀を二本（内側が斬月で外側が掬花）さしている

「お前達を倒す前に聞きたい…なぜこんなことをする？」

『はあっ！？』

「税が高いからか？それならなぜまず最初にそこに税を納めるところに直訴しない？なぜ最初からあきらめる？悪銭身付かず、そんなことで得たとしても必ず失うぞ」

「馬鹿じゃなねえの？んなもん決まってるだろうが！！」

「俺達は自分達の欲望がみたせればそれでいいんだよ！！」

「飯は奪う！！女は抱く！！当たり前的事だろうが！！」

『ぎゃははははははっ！！！！』

「（やはりこういふ類はこんな考えを持ったものばかりか…）そうかなら…死ねっ！！」

そういつと共に俺は掬花を引き抜いて赤兎を駆り、賊の間を駆け抜けていく…その間に何度も首を狙って刀を振り、絶命させていく

そのときの感触ははっきりと俺の腕に伝わってくる…気持ち悪い

ことこの上ない…

それに賊は走り出すなんて思ってなかったらしく、何人かはひき殺しただろう…俺は赤兎から降りてそのまま賊に向かっていき、剣術を気術を併用して次々と命を奪って行く…

頭を拳で碎き、刀で咽を、腹を、顔を割き、足で潰していく…

十分か、二十分か…時間の感覚すら分からなかったが気が付いたら賊を殲滅していた…

それを見た俺は…吐いた…ものすごく気持ち悪くなり、感触を思い出し、吐き続け、少し落ち着き始めたところで赤兎が頬をなめてくれた…

それで少し落ち着いた俺は近くに賊の根城があることを思い出し、そこを急襲した…そこには殆ど人がいなかったため先ほどより楽で、死臭に多少慣れたとはいえやはりきつかった…そして少しそこを探索したらやはりというか女性の姿も合った…が、見るも無残な姿だった…

体に精液が付いていないところは無く、目は虚ろで生きているのか死んでいないかも分からなかったが…先ほどの賊の言葉からそこに入り呼吸しているか耳を傾けると…思ったとおり息をしていなかった…だがここで見つけたのも何かの縁、埋葬されないよりは良いだろうと思ひ賊徒の骸を気で完全に燃烧して消し去り、女性の体は極力きれいな布で包んで根城で賊が使っていただろう寝具(?)みたいなものの上に積んで赤兎と一緒に運ぶことにした

その付近に川が流れていることを思い出し、そこで俺は返り血を、

彼女達の体の汚れを落としてその近くの邑に向かった

どうやらそこは先ほどの賊に以前襲われ、さらにこの近くの権力者が無能かつ自身快樂至上主義者なのかいまだに復興がままならぬ状態でもあったようだ。そしてそこで俺は近くの大人に何かを頼み込んでいる少女を見つけ、近づいて話を聞くことにした

「お願いします！！お母さんを助けるために手を貸してください！！」

「何でだよ！！死に行くようなもんじゃねえか！！」

「ちゃんと策がありますから、お願いします！！」

見たところ少女は六歳前後、彼女の両親はよき人であったのだろう。俺はその人達に近づいた

「どうしたんですか？」

「あなたは？」

「ん、ああ、この近くで賊が出ていると聞いてね、師匠に言われて討伐してきたところだ」

「お前みたいな子だ」その根城にも行っただんですか！？

俺がそう言い、大人が否定しようとした直後、少女がものすごく食いついてきた。先ほどのことからどうやら彼女の母親は奴らに攫われ、そこから取り返すのを手伝ってもらおうとしていたということか

「坊主、その賊ってのはこの近くの洞窟を根城にしている連中か？」

「ええ、先ほど底に残っていた連中も全員始末しました…ただ首な  
んか持ち歩く趣味は無いので全部消しましてしまいましたけど」

「根城に行ったのなら、私に良く似た大人の人を見ませんでしたか  
!？」

「……………」

「ま、まさか……………」

俺の沈黙に最悪の状況を想定したのであろう少女は少しずつ後退し  
て行く…大人の方もなんとなく察したようだ…

俺が赤兎に引っぱてる物の所に行くと言った少女も付いてくる…女性の  
人数は五人、その人たちの顔を一人一人ゆつくりと見せて行き…最  
後の一人を見せると…

「お…おか、あ、さん……………」

少女の目からは涙が零れ落ち、その子の頬をぬらす…それ俺も大  
人も何も言うことは出来ない…特に俺はだ…もう少し討伐に出るの  
が早かったら、根城のところに一気に行っていたら、そんな思いが胸  
中を渦巻く…

「お母さん……………あああああ……………」

少女の慟哭が小さな邑の入り口に響き渡る…

このとき、俺は決意した…こんなことが…なくなる世界にすると…元々の目的とも多少は合致するとかそんなのは関係ない

俺自身の思いで、俺自身の力で、この大陸を平和へと導きたい  
や、平和にしてみせようとする誓った

何者でもない、ただ俺の魂に!!!

## 第二話 成長と出会いと（後書き）

龍：最後に出てきたのって誰だよ？

作：毒舌子

鳳：まさかの導入編で原ブレ！？

作：それとこの作品ですが、本文中ではローマ数字やカタカナは基本仕様しません

鳳：麒麟様のルビは？

作：ただのミスだ！！

龍・鳳：さっさと直せ！！！！

作：そして原ブレとさっき鳳が言ったけど実際にあんまり変化はないよ

龍：そうなのか？

鳳：原作の性格のようになるのは変わらんないんだね

作：そこは世界の修正力という名のご都合主義さ（もっとも毒吐かれる男はこの世界では一人しかいないが）

鳳：んで、今後はどうなるんだ？

作：まずこの後と数人との会合を経て黄巾の乱へと行く

龍：呉とか魏の面子が出てくるのか

鳳：いや案外オリジナルが大量に出てくるかもしれんぞ

作：そこはお楽しみということだ

全：次回をお楽しみに！！！！

### 第三話 別れと集う仲間達（前書き）

作：今回からオリキャラが登場するんだぜい

鳳：フリーの武官文官いるからな

龍：魏・呉・蜀・その他陣営からか？

作：その分け方は『三国無双』だよ…一応最終所属とかから言っと魏から三人、呉から一人、蜀から二人って感じかな

鳳：流石人材王国の魏…引き抜かれる数も多い

龍：史実や演技から恋姫の世界に選択されなかった奴らから選ぶか…なんで姜維は孔明の後釜なのにはぶられたんだろ…敵顔はいるのに

作：敵顔と黄忠は蜀の老将コンビとして有名だからじゃない？

鳳：他にはぶられと言つと司馬懿に張？、徐庶、徐晃、凌統とかもいるな

龍：元々三国志全員を出そうと考えること事態が無謀だからな…曹家と劉家と孫家だけで150人超えるんだぜ

作：1世紀前後続く物語だからね〜真面目に考えると頭痛くなるね

鳳：それだけ歴史の重みがあるということだ

龍：戦国時代も似たようなもんだけどね

全：それでは本編をお楽しみください！！

### 第三話 別れと集う仲間達

Side 龍鳳

前回から早六年、俺は今義勇軍を率いて各地を転戦している…

まず俺はあの直後だが俺はあの邑の人たちから感謝された

自分達を虎視眈々と狙っていた賊を殲滅した、それだけだったが感謝されるのは俺も嬉しかった…何せ人殺しで喜ばれたからだ…あしなきやいけなかったことだとも割り切ってはいるけどな

その後は母親を殺された女の子と一緒に洛陽まで旅をした…これは彼女の身寄りがもういなくなったこと、俺が母親を 死んでしまっただとは言え 助けてくれたことから一緒に行きたいといったからで、その邑の人たちも温かく送り出してくれた

そこで名前を聞いた時、顔には出なかった(と思うが)俺は心底びっくりした…なにせ『王佐の才』と呼ばれる『荀?文若』だったからだ…

そして俺は彼女の真名『桂花<sup>けいふあ</sup>』を預かり、俺も真名を預け、俺は彼女から『兄上』と呼ばれるようになった

その後旅の途中で賊に襲われている桃色の髪の子を助けたのだがその子がなんと『劉備玄德』と分かったときももうびっくりしたね…

目的地が一緒だったこともあって仲良く進んで行き、洛陽に着いても目的が一緒だったこともあってその後真名を互いに交換、桂花

に続き『桃香』を預かった

ちなみに目的は『盧植』と呼ばれる方のもとで勉学に励むことであり、俺は優秀だったのか一年半で『もはや教えることなし』とまで言われたが、他の子達に教えるのが楽しかったので結局三年ほど厄介になっていた…

無論それだけ長い時間一緒だったので別れの際、桂花も桃香もすぐく号泣された…が、俺がいずれ世が乱世になったとき将として一旗あげるからそのときにまた会えると告げたら、「絶対に会いに行きます！！そして仲間にしてもらいます！！」と言われ、後ろにいた先生と公孫？（真名『白蓮』も交換している）には苦笑いされた

その後先生に紹介された荊州新野にある司馬徽 通称水鏡先生のところへ赴いた…そこで後に有名になる諸葛亮孔明、鳳統士元、徐庶元直、司馬懿仲達とであった

歴史では司馬懿はこの出身ではないがこの世界ではこれが正常なのだろう…

ここでは半年ほどで学ぶことがなくなってしまうたがやはり（次世代？とはいえ）稀代の軍師達との意見交換は面白かったが、最初は俺が下だったのに気がついたら逆転していたため、真名の交換もすることになり、孔明は『朱里』、士元は『雛里』、元直は『明里』、仲達は『陽里』と呼ぶようになった

それから二年程してここを出て行くことを決定付けた理由は漢王朝に対する叛乱が徐々に徐々に大きくなってきたからだ…桂花や先ほど名を上げた四人 彼女達も戦乱で親を亡くし、水鏡先生が面倒を見ていたとのこと のような子を一人でも多くなくす為に行くこと

告げると全員が付いて行きたいと申し出てきた

しかし水鏡先生から許可が出たのは明里と陽里のみだった。それ  
もそうだとは思う、なにせ明里と陽里は年齢も俺に近いし、覚えて  
いることも朱里と雛里よりも多い、それに多少は武が出来るためだ  
。軍師とはいえど多少は自衛のための武が出来るのはいいと教えた  
が。幼いからだと思魔化した朱里も雛里もあまり才能はなかった  
（むしろ伯連並みにあった明里と陽里に驚嘆したものだ）。が、気  
に關しては多少才能があつたため近年知られ始めていた氣を使つた  
術を教えることにした。なお明里と陽里はこれに關しては朱里と雛  
里に劣つていたのを知り、ちよつと落ち込んでいたが、俺の説明を  
受けて納得してくれたようで安心した

とはいつても氣にも適正があり、朱里は『炎』と『土』、雛里は  
『風』と『水』だった。ちなみに明里は『雷』、陽里は『炎』だつ  
た。また、適正があつても使いこなせなくては意味がないため、発  
動などを補助する道具として朱里には『扇』を、雛里には『杖』を、  
明里には『劍』を、陽里には『手甲』をそれぞれ専用のものを作り  
上げた

ただし、命名したり渡したりするのを俺は水鏡先生に頼んだ、恥  
ずかしいからではなくその方がいいかと思つたからだ、彼女達も  
俺からだと言喜乱舞して俺からの忠告や使い方もろくすっぽ聞か  
ない感じがしたからだ

無論、桂花や桃香にも得物は与えている。桂花には『風土氣札』  
というものを、桃香には『龍帝劍』を。『風土氣札』は氣の適正で  
ある『風』と『土』の発動を補助する札で、どちらかと言えば防御  
用のだ、桂花は武の才能が全くなかつたからな。桃香の『龍帝劍』  
は言わずもがな、と言つ奴だ

ただ彼女達には俺の手から渡している…でも俺から渡されたとき喜びすぎて使い方とかをちゃんと聞こうとしなかったためO・H A・N A・S H Iをする羽目になったのが今回のにも関わっているのは察してくれ

### 閑話休題

そんなこんなで俺と明里と陽里はこの国を安寧にする為の旅に出た。明里と陽里の武器は出立する日に水鏡先生が手渡していた。明里のほうは『雷光』、陽里のほうは『炎破』と名づけられた

その後は近くの邑や村に町を賊から守り、その周辺で知名度を上げて兵を募りつつ、また知名度を上げていくという時間はかかるが堅実な方法をとっていった

中には二百人とかもあつたが明里・陽里の策に俺の武力で蹴散らして残党を兵達で潰す、という一人が強い軍にありがち(?)な方法をとっていった

おかげで今荊州内では州牧である劉表よりも人気があるためか、妨害も多くなってきたりしてしまっているのも否めないが…しかし評価を公平にしてくれる人も多く、名乗りの機会と思ひ参加してくれる武人も多い

その仲間を紹介しよう…

・一人目 姓を『張』、名を『?』、字を『雋<sup>けん</sup>又』、真名を『優<sup>やん</sup>優』  
と言い、武器は鉄鉤だ。

・二人目 姓を『徐』、名を『晃』、字を『公明』、真名を『清<sup>しん</sup>』  
と言い、武器は大斧だ。

・三人目 姓を『凌』、名を『統』、字を『公績』、真名を『双花』  
と言い、武器は三節昆だ。  
・四人目 姓を『姜』、名を『維』、字を『伯約』、真名を『彩燐』  
といい、武器は三尖槍だ。

お分かりだと思うが全員女性で彼女達は武官だ…ちなみに流石に文官は危険だからか仕官してくることはない…どこか拠点が欲しいと思っっているのは俺だけではなく軍師二人も思っている

そして俺は元々情報戦が主の現代から転生したため情報の精度と量を重要視している…そのため自分達に忠誠を誓う隠密みたいなのを探しているのだが…

「そんなの居る訳ないじゃないですか」

「だよな…」

「でも情報は大事ですよね」

「気がついたらこの叛乱が終わってたなんてこともありえますからね」

「そうなるとこれまでやってきたことが全部無駄…そんなの耐えられないよ…」

「そうだよね、主、どうしM」申し上げます!!」「何?」

「例の巾を纏った一団を発見しました!!しかも今までと違ってかなり統率が取れてます!!」

「もしかしたらこの集団の首領格もしくはそれに順ずる人の軍でしゆね…かんじやいまひた」

「それなら今までより精巧な策を立てないといけまえんね…わらひもかんじやいまひた」

「どうします？主」

「彩燐、斥候を出せ。五人一組を五組だ。その後、戦闘準備だ。各員に武器と鎧の状態を点検させておけ」

「……………御意……………」

「それと明里、陽里、今回の連中を束ねている奴だが、恐らく連中と俺達の考えは似ている…適度に弱らせて捕まえてこの義勇軍に組み込みたい」

「わかりました」

「お任せ下さい」

さて、黄巾党が本格化してきたな…この国を平和にするために、頑張りますか！！

### 第三話 別れと集う仲間達（後書き）

作：まさかの台詞がたったの15行

鳳：俺もたった三回しかないし

龍：でも殆どお前の心象だったじゃないか

作：長々と書くと飽きられるかなと簡潔にまとめすぎたよな

鳳：彼女達サイドでいつか書けよ

龍：つか書かなかつたら吹き飛ばすからな

作：あ、ちゃんと書くよ…番外編やるのも決めてるし

鳳：まずは桂花と桃香だよな？

龍：後今回出てきたオリジナルキャラの徐庶、司馬懿、徐晃、凌統、張？、姜維の紹介もちゃんと作れよ

作：分かってる、まずこの戦いの続きを書いて、その後紹介、んで番外編行って原作突入かな

鳳：原作まで後4話か…

龍：そういえばどうやって入ったのかもあるのか？

作：それは紹介のところで、イメージは他のアニメとかから持って

くる

鳳：キャラクター創造能力皆無だもんな

龍：俺の作り方も半分モニタージュだし

作：うるさい

鳳：そういえば孫策とかはいつ出てくんの？

龍：曹操もな…

作：黄巾から反董卓の間にいる動きがあるから、そのときにも出てくる期待してくれ

龍・鳳：いやでも駄作者だからなあ……

作：言いたいほうだな…泣くぞてめえら

#### 第四話 結成！―珀武義勇軍！―（前書き）

作：今回戦闘描写うまく書けてるかな？

鳳：それは最後まで読んでもらわないと分からんだろう

龍：頭の中ではうまく浮かんでも描写することが出来ないとか

作：龍、当り…いわゆる説明しながら動作することは出来ないんだ

鳳：どういうことだ？

龍：右見るのと同時に左見るって事だ

作：両手で別々のもの書くとかできないからな

鳳・龍：えっ！？出来ないのか！？

作：お前らみたいな空想の存在と一緒にすんなー！！

鳳・龍：一番言っちゃいけねえことさらっと言っな、駄作者ー！！

## 第四話 結成！！珀武義勇軍！！

Side 龍鳳

「全員、集まったな…陽里、明里、状況は？」

「今黄巾軍は六里（一里＝五百m、なので三km）離れた位置に魚輪の陣で展開しています」

「斥候が向こうの斥候を確認したとも報告がありましたので戦端が開かれるのも時間の問題かと」

「一気に突っ込んで殲滅しちゃえば？こっちの方が数は多いんだし」

「そうですね、苦しんでいる民を守り、勇気付けるための私達義勇軍です。あんなのに手間取ったと知られたら今までにつかんだ民の心は離れてしまいます」

「ちょっと、相手は今までのと違って統率が取れてるのよ、簡単にはいかないわよ」

「そうですね、少数精鋭の可能性もありますから、ここは慎重に行きませんと」

「でもそんなちんたらしてたら他のところに逃げられるわよ」

「それはない、俺たちはこの周辺では有名だからな、逃げても追われると分かっているから恐らくあそこに居るのだろう」

「それで、策があるのですが…」

「どんなのなんだ？」

「まず向こうに書状を送って、話し合いがしたいと」

「……はいつ!?!」「」「」

「私達の推察だとあれは恐らく官軍崩れです、なのであそこまで統率が取れているのかと」

「なので向こうの大將にこちらがどんな理由で戦っているのかを説明します」

「なるほどな、それでその巾をしているほかの連中は賊だからそのままだと討伐される、しかしこちらにつけばかつての官位以上のものがもらえる可能性がある、そういえばこちらに引き込める可能性はあるな」

「でもそれが失敗したらどうすんだよ!! 龍鳳様が危険じゃないか!?!」

「……いや、それはない(です)」「」「」

「なんでそんなことはつきり言えるんですか!?!」

「……龍鳳様は一人で五万人は殺せるから」「」「」

「五万は無理だ」

「で、ですよ」「一人だと出来ても三万位だな」…どこの天下無双ですか!！」

「まあ官軍がそこを離れるのは何かしら理由があるから、そこを聞いてその場で説得する」

「無計画にもほどがあります!！」

「無計画にもなるさ、軍と言っても補給隊か、諜報隊か、戦闘専門隊かとかでいろいろ変わるんだからな」

「では…」

「あいつらに文を送り、対話と言う手段をとる。その後の対応だが使者が怪我ないし死んで戻ってきた場合は即時殲滅、対話に応じてその場で切りかかった場合も同様、対話に応じて決戦の場合は降伏するように動け、最高の場合は対話後降伏だな」

「ですが最後だと人心が離れませんか？」

「その場合は賊を改心させて受け入れる仁徳の軍という名が付く可能性もありますから…」

「まあ俺のことを知っている人たちからすればそう思ってもらえるだろうな…俺は文をしたためる、陽里、明里、双花、優優、清、彩燐、全員で相談して使者の選別を頼む、終わったら呼ぶから」

「…御意!！」

その後俺がしたためた文の内容は

『我々は貴官らと争う気はない。まず貴官らと話し合いがしたい。返答はこの文にしたためて使者に持たせてくれればよい』  
簡単に書くところという感じた。

使者を出して四半刻（一刻＝二時間、つまり四半刻は三十分）もせずに返答が帰ってきた。その答えは『応じる』というもの、俺は全軍を鶴翼に展開して、右翼に明里と優々、左翼に双花と陽里、中央は俺と清、彩燐にして二人を伴い両軍の中央まで来る

それに応じるように向こうの軍の大將と副將らしき人物がこちらに近づいてくる。

俺は清と彩燐には武器を持たせているが俺自身は何も持っていない、こちらから話し合いを持ちかけたのに武器持ってちゃ逆上して襲い掛かれる可能性が残ってるからな

「話し合いに応じてもらえてありがたい、俺がこの義勇軍を率いている珀麒麟、後ろに居るのは姜維と徐晃という」

「俺がこの軍の大將の周倉、こっちは廖化だ」

俺は内心驚嘆していた、なにせ周倉も廖化も関羽の部下で忠誠心の高い勇将だったからだ、だが同時に歓喜していた。この二人は戦力になることも相対している軍を見れば一目瞭然だしな

「俺達に何か聞きたいことでもあるのか？」

「ああ、どうしてそんなのをかぶってるんだ？」

「これは天和ちゃん、知和ちゃん、人和ちゃんの追っかけである証

さ

「誰だ？すまないが荊州の外の情報があまり耳に入ってなくてね、出来れば教えて欲しい」

「彼女達は本名を張角、張梁、張宝といってな、知る人が少なくなつてきている旅芸人なんだ」

その情報を聞いた瞬間俺はここ最近の動きを理解した、恐らく彼女達の追っかけに彼女達が「大陸が欲しい」などといったんだろう、それを過大、もしくは都合よく理解した連中が暴走を始めた、と言うところか

「お前達がいろいろなところを襲っているのは彼女達の願いだからか？」

俺は会えて核心に触れる、もしくは怒らせるようなことを聞いて反応を見てみると

「そつだ、彼女達が『大陸が欲しい』って言ったからな…だが、俺たちは別だ」

「そつか、他の連中と同じように扱われるから、そついつのから自分の身を守るために、つまり自衛のために軍としての形になっていると言つことか」

「ああ、てかあんたすげえな」

「陣とかを見れば分かる、それに斥候を出していることもわかった、だから俺は話し合いと言つ甘い手段をとつたのさ」

「俺達にあんたの軍に加わってたのか？」

「ああ、無論、それにあたって追っかけを止めるとは言いほしないさ」

「「!？」」

「彼女達もこんな事態になるなんて思っても見なかっただろう、しかしもはや彼女達の力では、内側から止めることは出来なくなっている。ならば外側から武力を持って暴走している奴を討って止めるしかもはや手段はない」

「「……………」」

「お前達は違うだろうが他の連中は次々と村や町を襲う賊徒になっている。人間は一部がそうであれば全体がそうだと思ってしまう。そしてその流れはもはや止めることは出来ない、流れ始めた川は海に流れ着くまでとまることはない」

「「……………」」

「俺はそれを止めたい、そのためには力が必要だ、そしてお前達はその力を持っている、頼む、彼らを、そしてお前達が追っかけている彼女達を救うために力を貸して欲しい」

そう言つて俺は周倉、廖化に頭を下げる、これが俺の見せられる精一杯の誠意だ

「俺達は降伏しても追っかけていいのか？」

「かまわない、ただ黄巾それを着けるのは彼女達が歌っている場にとどめることと、いずれ彼女達を討てという勅命がきたとき、俺達が彼女達を保護するのに協力して貰うこと、それぐらいさ」

「…わかった」

「大将!？」

「俺たちも官軍や町とかから嫌われて困っていたところだ、だったらあんたらに協力したほうがよさそうだ」

「その判断をしてくれて感謝する。それと、あまり直接戦闘能力が全員低そうだが…」

「ああ、あいつらは官軍でも捨て駒として使われた連中なんだ」

「「「!?!?」」」

「たしか命がけで情報を持ってきたのに罵倒されたり、でこつなったって連中だったな…」

「こちらとしては渡りに船な話だ、実はそうというのが欲しいと常々思っていたところなんだ」

「そうなのかい？」

「ああ、詳しい話をしよう、彩燐、清、両翼に連絡して彼らを受け入れ準備、その後全員集合するように」

「御意！！」

「では行こうか、周倉、廖化」

「ああ」

その後は全員集合して周倉、廖化の今後を本人たちを交えて協議した結果、俺達の軍の隠密として使うことが決まった

彼らの役割は漢全土の情報収集だ。どこがどうなっているのか、というのを集めてきてもらう。俺たちは彼らが集めた情報から今後の方針などが決まる、さらにどんなに些細な情報でも構わないし、裏切らないと言っことを告げると降伏した彼ら全員が俺に臣下の礼をとった

その後、彼らの活躍により黄巾党本隊、つまり張角たちの居場所が分かるのだが…そこまでたどり着くのは少し、先の話である

#### 第四話 結成！―珀武義勇軍！―（後書き）

作：あるえ？

鳳：戦闘どころか話し合いだけで終わってんじゃないか！！

龍：まあ演技でもこうだったし、別にいいんじゃない？

作：今後彼らはちょいちょい登場します、というか半分キーキャラになるかも

鳳：確かに出番はあるな、本隊殲滅の時とか後は…反董卓のときも活躍できるな

龍：その後も敵の力をそぐのにつかえるし、敵国がどういう状況か聞くのにも使えるな

作：ちなみに暗殺系では使いません、彼らの誇りを汚したくないので

鳳：今回はオリジナルキャラを全員紹介

龍：作者の頭せいで一部そのままだが気にしないでくれ

## オリジナルキャラクター設定

姓名：徐庶

字：元直

真名：明里めいり

イメージとしては『魔法少女リリカルなのはvivid』時のキャラ。CVは原作と同じ。

衣装も色合いが白・ピンクの部分が藍色に、黒の部分が白になっている。

立場は軍事向き軍師で戦場での作戦の立案・指示が主な役目。

性格は朱里・雛里の中間ぐらいだが、緊張すると噛んだり、「わわわ」と言ったりする等の共通点がある。

得物は『雷光』と言っ剣。これは龍鳳がつくり、水鏡先生が名前を与えたもの。この時代に一般的な直刀の両刃剣。刃の根元に虎を模した模様があり、その中心に黄色い宝玉がある。これが明里の得意資質である『雷』の気変換を補助する。

朱里が『臥龍』、雛里が『鳳雛』と呼ばれたように『虎子』と呼ばれた。

姓名：司馬懿

字：仲達

真名：陽里じやうり

イメージとしては『魔法少女リリカルなのはvivid』時のルーテシア。CVは原作と同じ。

衣装のイメージは朱里の服の色合い反転版。

立場は陣を張っている時の守備隊長（？）及び拠点防衛時の作戦立案及び指揮の軍師。

性格は冷静沈着だが想定外の事態になると明里達同様噛んだり「

ふわわ」と言ったりする。

得物は『炎破』と言う手甲。これも龍鳳がつくり、水鏡先生が名前を与えたもの。この時代には無い黒鉄製の手甲。手の甲の部分に亀を模した模様があり、その中心に赤い宝玉がある。これが陽里の得意資質である『炎』の気変換を補助する。

朱里が『臥龍』、雛里が『鳳雛』と呼ばれたように『未武』と呼ばれた。

姓名：姜維

字：伯約

真名：彩燐さいりん

イメージは無双6の衣装のまま女体化で、性格とかも変わりなし。変更点はCVのみ。

得物は『昂龍顎閃』コウリユウガクセン。無双4のユニーク武器のままです。

槍の名手・天水出身と言ったことから珀武義勇軍の騎馬隊を率いている。

姓名：張?

字：雋けん

真名：優優ゆうゆう

イメージは姜維と同様。

得物は『龍鱗絶骸爪』リウリンゼツガイソウ。こちらは無双6の武器です。

兵の統率がつまいので歩兵隊を率いることが多い。

姓名：徐晃

字：公明

真名：清せい

イメージは姜維・張?と同様。

得物は『獸王牙断』。こちらは無双6のDLC武器です。

常に冷静に戦況を見るので他の3人の後詰になることが多い。

姓名：凌統

字：公績

真名：双花そつひあ

イメージは姜維・張？・徐晃と同様。

得物は『三節毘』。これは無双5の武器です。（武器名なかったorz）

徐晃と張？の中間ぐらいに位置するので槍隊、盾隊を指揮することが多い。

姓名：周倉

字：なし

真名：陰いん

イメージは『NARUTO』のはたけカカシ（写輪眼移植前）。

CVも同様

得物は『短刀』。銘はないがいくら切っても刃こぼれがないらしく、かなりの業物。近づかなければ相手に致命傷を与えないのでかなりの使い手であることが分かる。

珀武義勇軍の諜報隊の隊長。張角達の追っかけを止めなくてもよく救ってもらえると言う事、正確な情報を集めて渡せば報酬がもらえる、裏切りがないと言うことから軍門に下った。

彼らの隊は全員元官軍の諜報隊だったためその能力は他のとこと比較すると遥かに高い

姓名：廖化

字：元儉

真名：影かげ

イメージは周倉同様『NARUTO』のうちはイタチ。CVも同様  
得物は『鋼糸』。慣れていない者が使うと逆に自らの身を痛めつ  
ける上級武器。なのでかなりの達人と言ったことが分かる。

姓名：裴元紹はいげんしやう

字：なし

真名：翳そく

イメージは『BLEACH』の市丸ギン。CVも同様だが、口調  
は標準語

得物は『暗器』。クナイや棒手裏剣などを使う。急所に当たれば  
一撃相手を殺せるが扱いが難しいので熟練者向け。

総じて彼らは武器の扱いが得手。相手を一撃で仕留める手に長け  
ている。実力としては夏侯惇や関羽に勝るとも劣らない

## オリジナルキャラクター設定（後書き）

質問や感想待ってます!!!

幕間一 桂花の物語（前書き）

作：幕間、まずは桂花から

鳳：ここでは戦闘ちゃんとおるよな！？

龍：どうだろうな…

作：粉碎！玉砕！！大喝采！！なんて落ちはどうだ？

鳳・龍：ダメに決まってるだろ！！

## 幕間一 桂花の物語

Side 桂花

私は兄上 珀武麒麟、真名を龍鳳 の役に立てるような立派な軍師になるために日々勉強中です

まずはこうなつた経緯から言いますね

兄上と初めて会つたのは私の出身の邑が賊に襲われて2週間もした位でした…私はお母さんを賊に攫われてしまい、何とか助けてもらおうと知つた限りのことから策をひねりだして、大人の人たちに協力してもらおうと思いましたが取り付く島もありませんでした…

それでまた襲つてくると言うことが伝わってきましたが一向に賊は来ませんでした…

その代わりに現れたのが兄上でした

兄上は機械からくりのような馬に乗り、何かを引かせていました

賊は兄上がやつつけたこと、そしてその根城に居た人達も倒してそこに囚われてた人たちの事を聞きたくてこの邑にきたと言うことが分かりました、そして…

私の大好きなお母さんがもう帰らぬ人になつていると言うことも

…

最初は兄上の事を物凄く憎く思いました…なぜお母さんをもつと

早く助けに来てくれなかったのか、どうして一番最初に襲われる前に来てくれなかったのか、どうして、どうして、どうして…

兄上も私がそう思っているのを悟ったのか私に話しかけてくることはありませんでした… 邑の長や大人の方達と話し合っつて病を蔓延させないために殺された人達を燃やして骨だけにして埋葬することを提案し、長達もそれに賛同してました

なので遺体は一箇所に集められ、兄上が気による炎を作り出してこの時「火遁・豪火球の術！」と叫んでた 兄上が連れてきてくれた人達、私のお母さん含めて皆燃やされました

皆厳肅とした空気の中、突然兄上が歌いだしました…

その歌はとても悲しく、切なく…しかし死んでしまった人達を慈しみ、次世での生がちゃんと謳歌できるようにも言っている様な歌でした

後々それは『梁父吟』、鎮魂歌だと言うことを教えてもらった

その後兄上は邑の復興を精力的に手伝ってくれてました。私より少ししか大きくないのに、大人以上の知識を持っていて、大人以上の力を持っているのに、それを誇ったり、自慢したりしない…

それを見ていて私が兄上を恨む気持ちはどんどん薄れていった… 寧ろ恨んでいた自分を恥ずかしく思った…特にあの日の事は忘れられない…

ある日の夜、私は寝付けなくて危険だと思ったが外をちよつと歩いてみることにしたら、兄上がどこかにむかっているのを見た…何

しに行くのか興味を持った私はこっそり後をつけていった

兄上が向かった場所は墓地、そこで見たのはこの間の賊で亡くなった人達全員に花と杯を手向けて、一人一人に 聞こえているいないに関わらず 謝罪の言葉を、涙と共にかけていた

それを見て私は分かった、本当に悲しんでいるのは兄上なのだと、一番気に病んでいるのは兄上なのだと言うことを……

それから私は積極的に兄上に話しかけるようになった。最初は驚かれたがすぐに打ち解けて、いろいろなことを話し合って、そこから私は兄上と呼び始めた

そして一ヶ月位、ついに兄上が旅立つ時が来た…皆すごく悲しそうな顔をしていた…だって私達を救っているいろいろ教えてくれたのだから…

すると長が私に何か差し出してきた…それは旅立ちの荷物…

実は兄上が私の境遇を聞き、こっそり長に頼んで連れて行きたいといっていたらしい…

もう私には身寄りがなく、また考えが大人びていたからちよつと孤立しがちだったからすぐに行くことを決めた…でも邑の皆の顔、すこしにやにやしてたな…私、そんなに嬉しそうな顔をしてたかな？

それで兄上に連れられて私は洛陽へと向かった。途中で賊に襲われかけた女の人を兄上が腰に下げた刀で全員倒した後、自己紹介をしあい、そこで劉備玄德と知り、助けてもらったお礼に真名を預かったのので以後『桃香』と呼ぶ、目的地が一緒だったので共に向か

った。

着くと兄上は私塾を探し始めた。なんでもそこは宮廷に使える方が経営しているらしく、高度な学問が学べそうだからだそうだ…

私は何日もかかると思ったがその日のうちに見つかり、兄上が頼み込んで私達二人とも勉学を教えていただけることになった。そしてそこには来るまで一緒だった劉備もいたので割りとすぐになじめ、家とかもなかったので下宿させてもらう代わりに家事とかを手伝う事になったけど…

そこでは文武両方教えてもらった、ただ兄上は武のほうは実力が高かったためすぐに終わり、もっぱら私達を盧植先生の変わりに鍛えてくださった…私はあまり才能がないとはつきり言われてしまい、桃香はちょっと見所があったのか良く面倒を見ていた

文のほうも兄上はたった一年で先生に『教えることなし』とまで言われたが、何か納得がいかなかったらしく、先生の変わりに私達に教えたりもしていた

それから半年ほどしたら兄上は先生に伴われて宮中に行くことになった。何でも先生が兄上のことを言ったら皇子達の教師役に現皇帝、霊帝様から勅命で決まったらしい

なので兄上と合える時間は減ったが兄上はちゃんと実力を伸ばすと褒めてくれるし、時々だが御褒美として一緒に町に出かけたりしてくれる。私も桃香もそれを知っているから兄上がいないとはいえないちゃんと頑張り、皆とも仲良くした

兄上はしばらく週に二〜三回だったがその回数はずいぶん増えて

いき、一年ほどしたらほぼ毎日のように宮中に言っているほどだった

でも兄上自身はあんまりよく思っていなかったらしく、この間は「十常侍本当に鬱陶しいな…俺を権力争いに巻き込みやがって…何進の如郎も…俺を怒らせたことを後悔させてやる」とか言っていたから…あ、だから最近目に見えてあいつらの動き悪くなってるのか、流石兄上です

それからさらに半年後、兄上は荊州新野の先生の知人である司馬徽先生の『水鏡女学院』に行くことになりました。

なんでも最近物騒になってきたのと兄上のことを心配した先生が司馬徽先生にしばらく預かってもらえないか頼んだそうです

それが了承され、兄上が旅立つ前日、私は桃香と一緒に兄上に呼ばれました

「二人とも、すまないな、急に呼び出して」

「いえ」

「大丈夫です」

「そうか…早速だが本題に入る。実はお前達にこれを渡そうと思っ  
てな」

そういつと兄上は金色の刃の部分に龍が彫ってある剣と、なにやら呪符をとりだしました

「この剣は桃香、君にだ。何度かお前との手合わせの時にこの剣を

使ったのは、覚えているな」

「はい」

「この剣はお前との時だけ、淡く光を放っていた…それから俺はこの剣はお前に使ってもらいたいと思っっている、そう感じた。だから、この剣を、『龍帝剣』をお前に渡す」

そうして兄上が桃香に剣を渡すと、その剣は光って消えてしまった

「き、消えちゃった…」

「だが恐らく、お前の元に渡っている。お前が『真の正義』に目覚めた時、あの剣は再びお前の前に現れるだろう…そしてお前に力を貸してくれるだろう」

「わかりました、ありがとうございます…」

「次は桂花」

「はい…」

「武はあまりよくなかったが、気の扱いがうまかった。だからこれを作ったんだ」

「これは…」

「気には種類があり人によって適正が違うというのは教えたよな？」

「はい」

「これは桂花の特性である『土』・『水』を使う時に補助をしたり、気を込めておけばすぐに発動できるものだ。攻撃用のも防御用のもあるし、何度でも使えるから困らないはずだ」

「ありがとうございます」

「さて、俺は明日には洛陽を出立する。お前達も早く寝るんだ」

そのことを聞いて私は悲しくなった：隣にいる桃香も同じような表情だろう：意を決したのも多分一緒だ、なにせ

「じゃあ今日、一緒に寝てもいいですか!？」

同時に言ったことに私達は顔を見合わせ、兄上は『仲がいいな』と笑っていた

でもちゃんと一緒に寝てくださった。兄上は私達の頭をなでながら眠りに着かれ、私と桃香も兄上の体温を感じてぐっすりと眠った

その翌日、門のところには私と桃香と先生、それに公孫讚 真名を白連 さんが一緒に兄上の見送りに着ていた

「では先生、行きます」

「気をつけるんだよ」

「兄上、おげんぎで」

「から、だにぎを、つげでね」

「桃香、桂花泣くなよ…笑顔で見送ろうって言ってたじゃないか」

「「らっでえ」「」

「大丈夫、また必ず会えるさ…それまでに今よりもっと成長していることを期待しているよ」

「「はい」「」

「これから先、世は恐らく乱れる。その時俺は俺の正義と理想と勇気と魂を持ってそれを正そうと思う。しかしそれは俺一人では無理だ、だから「絶対に会いに行きます！！そして仲間にしてもらいます！！」「そうか、その時を楽しみにしているよ」

「「はい！！」「」

「では先生、お世話になりました。桂花のことを頼みます」

「ええ」

「じゃ、先生、みんな、またな！！」

そう言って兄上は去り、その後私は勉学を桃香達と重ねて今は袁紹という人に仕えて兄上の言っていた国の力の源である民達を救うための建策を何度もしているのだが

「派手じゃない、却下よ」

という感じです…兄上ー！！早く名を上げてくださーい！！

幕間一 桂花の物語（後書き）

作：これは前話と大体同時期ですね

鳳：しかし劉備の出番なくなるんじゃないか？

龍：劉備は他の小説だとアンチされることが多いからな、その対策シーンが多くなるんだろうな

作：うん、甘ちゃんからだいが変わるよ、桂花のほうももつちよつと書きたかったけど時期の関係上ちよつと省いた

鳳：男嫌いは？

龍：ここでなりそうだな

作：まあ幕間後の本編をお楽しみについて事で

## 幕間二 桃香の話(前書き)

作：俺頑張った!!

鳳：昨日は設定、今日は幕間二本か

龍：俺のほうも更新してくれえええええ!!

作：最近機嫌悪いのかPCがデータの入ったHDD読み込んでくれないんだ

鳳：うわ

龍：(隅っこのほうにの字を書いていじけている)

作：まあ何とか頑張るから、本編のほうもよろしく!!

## 幕間二 桃香の話

Side 桃香

私は姓を劉、名を備、字を玄德、真名を桃香って言います

ちよつと前まで洛陽に行つてたんですけど、その時の事をお話しますね

到着前からひどい目にあつたんですよ、賊に襲われちゃって…

必死に逃げただけで捕まっちゃうのも時間の問題になった時、  
機械からくりのような馬に乗った一人の男の子が馬から下りて私を追つかけてた賊を倒してくれたんです

その時に『雷遁・千鳥!!』とか『風遁・大玉螺旋丸!!』とか聞こえましたら賊が一気に吹っ飛んじやったりしてましたね…

助けてもらったお礼を言うと男の子は「当然の事」と言いました…

どういふことが聞くと「困っている人を助けるのに理由は要らない」だそうで…すごく驚きました。だって最近では助けてもらうと恩赦と称して大量のお金を貰っていく人が多いですから

そしてさっきの馬が近くに来るとその馬から小さい女の子が「兄上、ご無事ですか」と言つて男の子と私の近くまでやってきました

そこで自己紹介を済ませて私が洛陽に行こうとすると珀武さんと荀?ちゃんも同じ方向に足を向けました…実は同じところを目指して

いたとわかって私達は洛陽まで一緒に旅をしました。そこでも何度か助けてもらったので、いい人達と分かったから私の真名を預けると、不公平だから、と龍鳳と桂花という真名を預けてくれました

やっぱりいい人達だと思いました

着いたら別れて私はお母さんから言われた私塾に紹介状を持って行きました、そこで下宿させてもらいながら勉強させてもらうことになりました

そしてその日のうちにまた新しく門下生が出来たと盧植先生が連れてきたのは龍鳳さんと桂花ちゃんでした。ここまで目的が一緒だったと知ると何か運命的なものを感じちゃいますね

龍鳳さんはすごく物分りが良くて先生が教えてくれたことはその日のうちに理解して自分のものにしちゃってます…私は半分も理解できませんでしたから、すごく羨ましかったです

どうして出来るのか聞いたらずは一度自分で本を読んで分からないところを纏める 予習ということを教えてもらい、先生が教えてくれたことを忘れないように竹巻や本自体に書き込む 復習という物を教えてもらったら、どんどん理解できるようになりました

それから半年ぐらいしたある日、急にこんなことを聞かれたんです

「桃香、この先もし乱世になったら、君はどうしたい？」

「へ？」

「もしもの話だ。俺と会った時のように賊が多くなって、世が乱れ

「たら君はどうしたい？」

「…人が笑えなくなるのはいやだから、皆が笑える世界を作りたい  
！」

「そうか…甘いな」

「何で！？龍鳳さんだっていやでしょ！！！」

「確かにいやだが…笑うものがいれば泣くものがあると言うことだ」

「どづいうこと？」

「皆って言うのは賊も含めているんだろう？」

「当然だよ！！あの人達だって生きてるんだもん！！！」

「だがあいつらが笑えば他のたくさんの人が泣くぞ、村や町に住む  
たくさんの人が」

「！！！」

「皆笑い会える世界は確かにいいさ、すごくいい理想さ…でも、現  
実はそう簡単にはいかない」

「……………」

「賊が笑えば弱い民が泣き、弱い民を笑わせれば賊が泣く、『皆  
つてのは無理だろ」

「……でもその人達は自分の欲望で動いてるんでしょ？」

「そういう奴が多いが中には太守とかがめっちゃめっちゃ税を搾り取るからその日々を暮らすためやむを得ず賊として暮らしている奴もいる、そいつらからすれば悪人は誰だろうな？」

「……正義って……」

「正義か……俺からすればそんなものはないな」

「……」

「法が正義と言う奴もいるが今その法のせいで苦しんでいる人が多い……お前にとっての正義は……なんだ？」

「……そんなの、分かんないよ……」

「今すぐ見つけるとは言わんさ……それにちょっとお前の考えを聞きたかっただけだから……」

「私の考えって間違ってますか？」

「間違っちゃいないさ、ただ今の世の中、話し合いじゃ済まずに戦いになることもある、あつたときのように。時としては力を振るう必要もある、これを覚えておいてくれ」

それでこのときのお話は終わったけど、お説教とかそういうのじやなくてまるで諭すようなものだったなあ……もしかして私に何か望んでるのかな……なんて思ったりしました

ちなみに数年後、この考えだ当っていたのだが桃香は覚えてません、天然ですからby作者

何か変な感じしたけど、とにかくそれから盧植先生に学問を、龍鳳さんに武術を教わっていきながら、あの日龍鳳さんに言われたことについていろいろ考えて、時々先生や桂花ちゃん、同郷でここへの紹介状をくれた伯珪ちゃんに聞いたりした

それから一年ぐらいしたら、盧植先生に軍を率いて賊を討伐せよって命令が来て、先生は龍鳳さんを連れて行こうとしたが龍鳳さんは私や桂花ちゃん、伯珪ちゃんも連れて行った

そこで見たのは『本当の戦場』だった

先生や龍鳳さん指揮する兵士さんたちが賊を攻撃していく…賊のほうもやられてばかりじゃなく、反撃してきてこっちの兵士さんの命を奪っていく…

物凄い気持ち悪いにおいがして私も伯珪ちゃんも桂花ちゃんも胃の中のものを吐き出す

その間に龍鳳さんは周りの兵士に私達を守るよう指示したのか私達の周りには兵士さんしかいなくて、龍鳳さんは戦場のほうに馬を駆って突っ込んでいった…

終わったその日のうちに洛陽に帰らず、近くの場所で野営することになり、私たち三人は一緒の天幕にいた

「今日の…どう思った?」

「どつて？」

「どつてあたし達をこんなとこにあいつは連れてきたんだろうな？」

「私は軍師を目指してる、だから戦場と言うのはこういふのだから多分教えておきたかったからだと思うわ。あんたは親の後ついで太守になるだろうからそれで戦場にでる、その時じゃ遅いだろうと思つてたぶん兄上は参加させたのよ」

「そついわれるとあたしや文若が呼ばれたのは分かるよ、でも桃香はどうしてなんだい？」

「どつてのことですか？」

「こいつの家は筵売りだから……まあ姓聞けば分かるように恐らく漢王朝に連なる一族何だろうな、でもこんなとこにたつ必要があるのかい？」

「それは「あるぞ」兄上！」

「麒麟、どつてつもりだ？」

「桃香には前に聞いたが、お前達はもし乱世になったらどつするつもりだ？」

「そんなの、その原因になつてゐる奴を倒すに決まつてるじゃないか」

「ではその後、太守とかになつてゐた場合、その賊を理由に他候か

「ら攻められた場合は？」

「迎撃するに決まってる！！！」

「桂花は？」

「私も伯珪さんと同じ考えです」

「桃香は？」

「……………」

「桃香？」

「桃香さんは優しいですから私達みたいな考え方は出来ないんですよ、多分賊の時点で話し合って解決しようとするはずですよ」

「だが賊は聞く耳持たずに襲ってくるぞ、今回の戦闘で降伏すれば命だけは助けてやると言ったのに襲い掛かってきた…無論、ただの無駄な努力さ…まともな訓練をしたことないやつらが訓練を受けた正規兵に勝てるわけがない」

「そうですね…」

「俺達のは戦前の行動は慈悲って奴だ、優しさなんてものじゃない…戦いにおいて優しさは甘さと殆ど一緒さ…相手を傷つけたくないと言う志は立派だがそんなのじゃ戦いには勝てん」

「言いたいことはわかるけどさ…でも」

「桃香さんは必ず相手は自分の言うことを聞いてくれると信じきってしまっています」

「!?!」

「そうだな、でも今回のでわかっただろう、話し合いが通じない相手がいると言うことと、そういう輩は力で制圧、もしくは殲滅するしかない」と

「うん…」

「まあ今日は慣れないものの連発で疲れただろう、少し休め…皆な」

「はい(おう)」

「……はい」

その後も私は私なりにいろいろ考えた…力は確かに必要と言うことは分かったけど、やっぱり、それにずっと頼るのはダメだとしてか  
思えなかった…

私はそう決意して、龍鳳さんのところに向かった

「桃香です、少しいいですか？」

「ああ、少し待ってくれ」

その時龍鳳さんは何かしてみたいだけ私には見られたくないのか、何かを片付ける音がした

「すまないな、入ってくれ」

「お邪魔します」

龍鳳さんがお茶を入れてくれて、一息ついたところで

「こんな時間にどうしたんだ？」

「私は…ちょっと前に龍鳳さんに聞かれた時からずっと考えてました」

「……」

「それで、この間の戦を見て時には力が必要だと言うことも思い知りました」

「それで？」

「私は……力は相手によっては使い分けるべきものじゃないかと思いました」

「理由は？」

「賊のように…自分の欲望のままに暴れる人達には暴力のような力を、そうしなくては生きられない人達には制圧する力を、と言う風にです」

「まあ、悪くはない、だが「はい、私の理想との矛盾も理解しました」…そうか」

「私や龍鳳さんは民が、農民が田畑を耕して出来た食物や、職人さんが作った服や竹管のおかげでこうして暮らせています、そんな人たちの笑顔を守りたい、それが私の戦う理由です」

「他人を傷つけてもか？」

「その傷つけた人以上の人を笑顔にして見せます!!」

「ほう…そこまで言うか…桃香」

「はい」

「俺の思い描く世界も似たようなものだ…二度と理不尽な暴力に泣かされるものがない世界、それが俺の望む世界さ」

「確かに、似てますね」

「最初の理想だと俺とお前ではいざと言う時戦う意思があるかないかと言う明確な差があったが、今はない」

「そうですね…」

「桃香」

「はい…」

「互いに、頑張ろうな」

「はい…」

「ああそれと」

「何ですか？」

「上に立つものが低い武では説得力が欠ける可能性もある、だから明日からもつと武術のほうはしごくからな、覚悟しておけよ」

「えええええつ！！！！」

「それと…いつまで聞き耳たててんだ？伯珪、桂花」

「あっちゃー、ばれてたのか」

「だから止めましようと言いましたのに…兄上、すいません」

「伯珪、お前も桃香と同じぐらいしごくから、覚悟しておけよ」

「あたしだけかよ！！妹だからって鼻厘すんなよ！！」

「お前は謝らず反省の色も見せなかったが、桂花は見せた。後桂花は妹じゃない、字で書くなら義妹だ」

「「えええええ！！！！」」

「兄上と私の顔は似てないじゃないですか」

「父親似と母親似かと思ったんだよ！！」

「というか夜にうるさいぞ、他の奴に迷惑だらうが」

「……もしかして兄上と男女の関係になりたいんですか？」

「「なあっ……！」」

その瞬間私と伯珪ちゃんの顔は真っ赤になった…龍鳳さんも顔を真っ赤にしている

「あ…やぶさかじゃないけど…もう数年後で良いか？流石に今すぐは……」

龍鳳さんはちょっと思考が変な方向にいつちゃってましたね、でもすぐに直って私も伯珪ちゃんも桂花ちゃんも自分の部屋に戻りました…最後に

「兄上は渡しませんよ」

といわれてまた顔を赤くしちゃったけどね

それからはずっと鍛えてもらって、途中で宮中にいつちゃったけど、それでも鍛えるのはやめなかった…伯珪ちゃんとはその最中に龍鳳さんと桂花ちゃんと一緒に真名を交換したよ

だって私のことも意識してくれてるってことはわかったから…好きな人の側に居たいって思ってるのは桂花ちゃんだけじゃないから…

龍鳳さんはそれからしばらくしていなくなっちゃったけど、私は自分を高めるのをやめなかった、私の理想のために、龍鳳さんの側に居るために…

私も龍鳳さんが居なくなっって三年ほどしたら故郷に戻ってお母さ

んの仕事、筵売りを手伝いに戻ったけど、それでもちゃんと鍛錬は続けました

そして最近では賊が本当に多くなってきました…

作物が実らず、病もはやってるのに役人達は自分の事ばかりで民たちのことを気にかけもしない…私はお母さんの仕事を手伝ってさらに分かったことがある…それは…私も民の一員だということだ

守る人も、守られる人も、傷つける人も、傷つく人も皆同じ民…

だから私は守る人になりたい、今を生きる人を傷つけてでも…私の子供が、そんな思いをしなくて済むように…

それから最近、管轄って言う占い師さんの予言があちこちでうわさになってる

内容は『一筋の流星と共に一人の男が現れる。そのもの、大陸の争いを鎮める天の御遣いなり』っていうものなんですけど、ちょっと胡散臭いというか

正直に言つとそんなのに頼らず、自分たちの力だけでやるべきだと私は思う

だってこの国は私たちの国なんだから!!

## 幕間二 桃香の話（後書き）

作：なんか長さが桂花よりも遙かに長い

鳳：てかこの作品中最長の長さじゃないか？

龍：ここで分かったのは龍鳳と桂花と桃香と白蓮は互いに思いあっているってところか

作：そして劉備はちょっと強かになりました

鳳：てか俺の考え方って…

龍：この時代には珍しい感じだよな

作：二十一世紀とかの知識がありますからね、妊娠や出産の適年齢を知ってるからああいう態度だったんです

龍：納得

鳳：この時代ってリアル14歳の母連発なんだよな

作：産めよ増やせよ、それにいつ死ぬか分からなかったからね

鳳：そうだな

龍：いつ死ぬかわかんないのはいつの時代も一緒だとは思っがな

作：それを言っちゃダメだよ

鳳：次回から原作開始か

龍：こつち展開速いから羨ましいな

作：いや、マジすまん

第五話 大掛かりな戦と…あるえ？（前書き）

作：今回からまた章が変わります

鳳：黄巾討伐編か

龍：誰が出て来るんだ？

作：とりあえず董卓軍、曹操軍、孫策軍とは会わせてから、本隊討伐に行く

鳳：孫堅はやっぱり…

龍：案外な落ちにいくかもしれないから静観しようぜ

作：そこところは期待していて欲しいな

鳳：まあ期待してやるか、アリの心臓分位は

龍：ノミより大きいな

作：ちつちえ事に変わりねえよちくせう…

## 第五話 大掛かりな戦と…あるえ？

Side 龍鳳

今俺は…

「風遁・螺旋手裏剣！！」

「ギャアアアアツ！！！！」

「……………ふっ！！」

「ピャアアアアアツ！！！！」

「火炎連拳！！」

「ぐふう！！」

偶然、官軍と思しき連中が三万の黄巾党と戦っているという情報を得たので数は少ないが援軍として駆けつけたのだ。

ちなみに官軍は約二万…俺たちの四千五百が加わってもまだ数の差が大きいため、明里、彩燐、双花、優優の四人に三千を伏兵として伏せさせ、残りの俺、陽里、清の三人と千五百で一番戦闘が激しいところに突撃して、俺と陽里、そしてそこで暴れてた奴の攻撃で少々数を

「これで一万ぐらい減ったのです！！」

「そんなにか？というかあいつら距離とってないか？」

「広く認知されてても使い手が極少数の『変気』を使って、しかも百人近くを一発で吹っ飛ばしたのを見たら距離とりましゅよ…啾んじゃった」

「……………強い？」

「強いと思うぞ、とにかくこいつらをどうにかしようぜ」

「ん」

「では「赤髪、お前さんは中央、その緑髪と清はその補佐、陽里、お前は半数率いて左側、俺は残ってる右側を」…ねねの台詞をとるなです…！」

「いく」

「了解ですよ…」

「分かりました」

「…いくぞ…！」

まあその後は蹂躪に近かったな、何せ赤髪の子は一振りで十人近く吹っ飛ばすし、清もその半数は一撃でやる。陽里の方も数が少なく、人が本能的に恐れることの多い『炎』をがんがんぶつ放すから逃げても仕留められ、俺は全身に雷をまとして方天武戟ほうてんぶげきの突きでなぎ払っていく…何人吹っ飛んでるのか全く気にしなかったが、後から兵に「出番がなかった」といわれた…恐らく賊の左翼の連中は全

員俺一人でふっ飛ばしたんだろう…

そして撤退しても伏せさせておいた俺の仲間が次々と襲い掛かる…しかも明里が俺と同じような状態になって、だ…ちょっと賊に同情したのは内緒だ…

まあそんなこんなで三万いた賊は全滅、こっちの被害はなぜか人と頭をぶつけたのが数人と、矢傷を負ったのが居る位だ…後官軍のほうは知らん、興味もないからな

んで、全員の状態を聞いてよさそうなので引き払おうとしたら、さっきの子達がこっちに向かってきた

「ちょっと待つのです!!」

「どうした?」

「あなたがこの軍の大将ですか?」

「ああ…俺の名は姓を珀、名を武、字を麒麟という」

「恋は…呂布……奉先」

「ねねは陳宮公大と言つのです」

「で、何用かな?」

「一緒に…来る」

「今回の討伐で助けてもらったから私達が仕えている君主に会って

欲しいのです!!」

「構わないが…全員連れてっていいのか？」

「大丈夫」

「そのくらい余裕なのです!!」

「そうか、なら同行させてもらおう」

そうして俺たちは進発し、洛陽に来た

「呂布と陳宮が仕えてるのってやっぱり何進大將軍か？」

「違う」

「会えば分かるのです、もう早馬を出して知らせてあるので入るのにも問題はないのです」

「ありがたい」

そうして俺達は宮中近くの城と思しきところに来た…ここから先は将だけと言われ、兵達は向こうの案内の人に頼んで調練場の一角に待機させてもらい、俺、明里、陽里、優優、清、双花、彩燐の七人は玉座の間へ呂布、陳宮の案内で向かい、その主と今対面している

「お初にお目にかかります。私は珀武麒麟と申します」

「初めまして、私は董卓仲穎と申します」

「僕は賈馮文和よ」

「うちは張遼文遠や」

「華雄という」

「徐庶元直といいましゅ！…わわわ、噛んじゃいまひた」

「司馬懿仲達といいまひゅ！…ふわわ、わらひも噛んじゃいまひた」

「張？雋乂です」

「徐晃公明といいます」

「凌統公績と申します」

「姜維伯約です、私は董卓様達のことを知っていましたが」

「天水出身なのですか？」

「はい」

「そうですねか…それとれ…呂布さんと陳宮さんを助けていただいてありがとうございます」

「いや、俺達の助けは要らなかつたかもしれないな…一人で十人も打つ飛ばす将軍がいたんだからな」

「当然なのです！！恋殿こそ天下無双なのです！！」

「（フルフル）（俺を指して）…強い」

「な、何ですとー！ー！！」

「ほんまかいな？」

「（コク）」

「そうは見えないが」

「……………（力を抑えてそう見せてるだけだよ）……………」

「なら手合わせしてみればいいんじゃない？」

「……………それだ！ー！！」

「……………（無謀だと思っな）……………」

「俺は構わないが…相手は誰だ？」

「……………呂布殿です（うちや）（私だ）！！」

「……………何だ（や）と（ですと）……………」

「そうね…れ…呂布はもう実力を知ってるみたいだか「別に構わないぜ」「えっ？」

「全員まとめてでもいい、部隊での調練の時にやってるから…六対一で」

「うそ!?!」

「……………やってます、そして私達は片膝つかせるどころか一撃与えたこともないです」「……………」

「そうなんですか!?!」

「ああ、一回俺以外対隊全員つてやったけどそれでも一撃ももらわず、肩で息もせず、全員強力な一撃を叩き込んでやったな…心理的外傷にもなってるぞ、そこで震えてるし」

「……………あ……………」

「……………(がたがたぶるぶる)……………」

「い、一体何を……………」

「<sup>ゆえ</sup>月、気にしないであげよう…それに手合せ見ればいいでしょ」

「そつだな」

「ならば調練場に行くのです!?!それで、その鼻っ柱をへし折ってやるのです!?!」

「逆にへし折られると思うな」

そんなこんな言い合いながら調練場に…そこには俺達の隊員もいたが、事情を聞くと離れて他のところに被害(?)というか巻き添えにならないよう遠くに避難し、それから呂布、張遼、華雄の三人

が各々の武器を持ってあらわれる

「ずいぶん調子にのっとる見たいやな」

「貴様のような奴が戦場では最初に死ぬぞ」

「あの…龍h…珀麒麟様の事洛陽にいるのに聞いたことないのですか？」

「「え？」」

「珀麒麟様は数年前まで洛陽にいて盧植さんの下で武官としても働いていたのですが…」

「詠ちゃん、聞いたことある？」

「聞いたことないよ、そもそももう盧植さんは故郷の幽州に帰っちゃってるし…ううゝ何進大將軍とかじゃないと分からないよ…」

「そろそろ始めるべきでは？」

「そ、そうね…では…始め！！」

その声とともに三人同時に突っ込んでくる…こういうときは連携を取って波状に攻撃してくるべきだろう…特に先頭で突っ込んできている華雄…こいつ猪か？いや、猪よりむごいな、アレは意外と動きがいいから…如何しようかな…

「死ねえええええつ！！！」

おい…こいつにはちよつとO・SHI・O・KIが必要みたいだな…手合せだつて言っただろ…殺したら君主たる董卓だけじゃなく他の武将にも迷惑かかるだろ…第一悪評がすごいぞ、実力を測る手合せで仕官してきた武将を屠る将がいるってね

「まあ死ぬ気はないし自分の実力を過大評価をしている気もないが…お前さんには負けん」

「ほざけええ!!」

俺は上段から振り下ろしてきた大斧（後から聞いたが金剛爆斧こんごうばくふというらしい）を手甲で軽くないなし柄の上に飛び乗ると

華「!?!」

華雄が驚き、元々あった隙がさらに大きくなる…無論その隙を逃がすのは三流以下、俺は顔面に膝蹴りを叩き込み、背後に回りこんで後頭部と肺に同時に一撃を叩き込み、さらに置き土産として蹴りも呉れてやり、見学者勢の近くの壁と仲良しこよしにしてやった

これを見て呂布と張遼は連携して攻めて来る。張遼が連続で攻撃して注意を引き、死角から呂布が攻撃してくるが俺は張遼の武器（これも後から聞いたが飛龍偃月刀ひりゅうえんげつとうというらしい）の柄をつかんで刃の部分を呂布の武器（こいつも後から聞いたが方天画戟ほうてんがげきというらしい）と克ち合わせる

「!!?!?!?!」

もちろんぶつける前に俺は手を離しているから、衝撃は全部張遼だけにいき、そのせいだろ…張遼は距離を取り、呂布もまたやられ

ては適わないのか同様に距離をとり、その隙に俺は張遼に接近する

「うちかい！」

「戦場で負けは命を失うことと同義、確実に勝利を拾えるほうからいくに決まってるさ」

「舐めんなや！！」

だが手に力が入らない状態では満足に戦えるはずもなく、俺は張遼が防御した瞬間踏み込み武器を蹴り飛ばしそのまま蹴りで顎をかち上げ、追撃の蹴りも叩き込んで華雄同様見学者勢近くの壁と仲良しこよしにしてやった

俺が警戒していることも呂布は本能的に気がついていたのだろう、華雄のときも張遼のときも攻撃をしてこなかった…そしてそれは正解だ。攻撃してきたら俺は華雄や張遼を盾にしていたからな

「呂布、一対一だ……しつかり遣り合おうぜ」

「（コク）」

俺は左腰の刀を抜き、その力を解放する

「叫べ！！斬月！！」

同時に俺の周りの気が爆発して粉塵を巻き起こす…そして俺の姿が見えなくなっただと思うと同時に俺は呂布に切りかかる

「っ！！」

呂布も反応するが若干遅い、力が乗り切らず吹っ飛ばすが体制までは崩せなかった

「それ…」

「聞いたことあるだろう、気を送り込むと形が変わる刀があること」

「（コク）」

「全部で何本あるのかは知らんが、そのうちの一本、名を『斬月』  
と…」

「強い？」

「ああ、だがまだ強くなるぜ」

そう言っただけ俺は全身に雷を纏わせる…人の動きは全て電気信号で行っているから、こつすることで行動速度が速まり、さらに筋力も活性化するので速度の力も同時に上げられる

無論欠点もある。早すぎるため速度に目が追いつくことが出来ないとそれに振り回され、相手が強いとあっさりやられてしまうのだ

まあ俺の場合『写輪眼』のおかげでそれはすぐに解決できたが…

とにかく、これで呂布と俺の状態の差はない…と思おう。しかし油断は禁物だ…って

「うおっどお…」

ちよつと考え事してたら呂布ががんがん攻めてくる…一見理に適っていないような動きだがその実隙がほとんどない…が、これは修練からではなく本能的なものから来る連携、つまりは勘だ

理と野生、相反するこの二つのどちらが優れているかで武将の動きは決まってくる

俺らだと俺と双花以外は前者、双花は後者だ。俺？俺は…

「ふっ！！」

両方だ…！！

その証拠に俺は呂布の攻撃をかわすだけでなくもう反撃を加えている。呂布のほうも捌いてはいるが徐々に徐々にその動きは精細さを欠き始めている

俺は多少空腹でも動けるが呂布はそうではないのだろう…先ほど大きく聞こえたしな…

まあ可哀想だし、一気に決めますか

俺は一旦距離をとり、斬月を突きのに構える…呂布もそれを感じ取ったのかそれに抵抗するような構えを取るが…

「無駄ですな」

「どづいづことですか」

「ただの突きでしょ」

「確かに…ですが、あれは見切れない突きなんです」

「どづいづことよ」

「見ていれば分かりますよ」

そう、あいつらの言うとおりこれは回避不能の突き…名を

「雷突」

その瞬間、俺は既に呂布を得物ごと突き飛ばし、気絶させた…

見ている奴も対峙していた奴も分からないだろうな…人の視認速度以上で動くんだから…無論俺の体もただではすまない。なにせ亜音速に近い速度で動くのだから、気をめぐらせて強化していたから傷ついたりはしてないが疲労感が半端ない…ただの突きに、黄巾連中相手に使ってるのにとどめときゃよかつたな…

まあこれで俺の実力も示せたし、俺の仲間の実力は大将である俺が一番良く知ってるからな…ちよう路銀も尽きかけてたから客将か何かで雇ってもらえると万々歳なんだがね…

第五話 大掛かりな戦と…あるえ？（後書き）

作：まずは董卓陣営と会合、そして戦闘

鳳：まさかマジで呂布に勝つとは

龍：いや、呂布は半分手負いのようなもんだからな

作：そう、呂布はお腹一杯ではありません。だからこのときの実力はだいたい55〜60出ていたらいいほうですね

鳳：雷突は正確にはどうなのなんだ？

龍：そうだな…教えてくれよ

作：アレは正真正銘唯の『突き』です。ただ雷で両手足の筋力を極限まで高めるだけでなく、地面と足の間に電磁誘導を起こし、磁石のN極同士反発しあうというその力も利用します。ただし、その部分がつましくないかと逆に威力が減衰します

鳳：逆方向に働いた場合は、ということだな

龍：摩擦で電気ためてとかじゃないと無理だな

作：さらに唯の地面では起きない、ここは石だったからできた、という風にあります

鳳：実際にはどうなんだ？

龍：たしか電気をまとう石もあればそうでない石もあるから…この城のが偶然そうだったということにしておくか

作：そういうことです。さて、ここで感想のお返事といきましょうか

鳳：パンチさん、紅さん、ありがとうございます…！

龍：確かに弓将はいないな…

作：どうにかして黄忠をさっさと引き込まないと…太史慈は出してもいいけど孫作とガチで張り合った豪将だからな…弓よりもそれ以外のが合うんだよ

鳳：確かに…弓で有名なのは？

龍：今拳がった黄忠の他に夏侯淵、後は弓腰姫といわれた孫小香かな

作：ちなみに孫小香というのは後人が勝手につけたもので、本来はありません。また劉備の嫁になりましたが、実際夫婦仲は最悪だったそうです

鳳：まあ親子…この時代だと孫ぐらいまで行くんじゃないか？

龍：むしろ仲睦まじいと想像した連中はすごいな

作：俺もそう思うよ…さて、次回も董卓軍、その次は孫家、最後に曹操と絡ませようと思ってます。

鳳：ガチ百合とは早めに会いたかったな

龍・仕方がないだろう、作者の頭は悪いんだから

作・そういうことはせめて聞こえないように言おうね

第六話 信頼と獲得と…なんかひどい(前書き)

作：今回は董卓陣営の続き

鳳：『反董卓連合』への布石か

龍：どうなんのかな？

作：蜀を宣言してるけど、まあいい展開にはなるよ

鳳：なくなることはないんだな

龍：なくしたら弱小勢力で曹魏か孫呉に食われるからな

作：ぶつちやけ曹魏はともかく孫呉とは仲良くする事決めてる

鳳：ではどうぞ…タイトル詐欺にならないよな？

龍：流石に大丈夫だろう

## 第六話 信頼と獲得と…なんかひどい

Side 龍鳳

俺達『珀武義勇軍』が董卓軍の客将となつて既に半年ほど経過したやつている事と言えば洛陽の警邏に兵の調練、それに書類の処理ぐらいだ

この軍にいるは史実でも真面目陣だったから皆書類とかもきちんとして処理している…それを見ていて賈馱が『恋れんも霞しあもねねも華雄も見習つて欲しいわ』とぼやいていた…確かにちやんとやらないあいつらも悪いが強硬手段をとらないお前と董卓も悪いと思うが…

それとここまでであつた大きな事件といえはやっぱりアレかな…

『呂布武器破壊事件』

これは客将になつて三ヶ月位して俺と呂布が手合わせしていた時におきたんだ…

俺達武人にとって武器は魂だ…だから手入れは欠かさない、俺は毎日寝る前にやる徹底振り、他の連中も最低でも二三日に一回は行っている、兵達も皆同じだ…というか兵達は鎧の調整まで行っているから俺達よりも真面目かも知れん

ちよつと話がそれたな、その武器の手入れを呂布は自身ではなく陳宮の奴が鍛冶屋に頼んで行っていたのだが、最近では呂布が俺との試合をしまくり、しかもそれで呂布の面倒(?)にかまけていたか

らおろそかになりついに…

鳳『豪雷突!!』

呂『ふっ!』

俺の『斬月』の豪雷突（雷突から速度を落とし力を上げたもの）と穂先で激突させた瞬間、限界が来ていた呂布の方天画戟は粉々に壊れてしまったのだ…

これには俺は物凄く驚愕したが…その後のほうは更にひどかった…呂布は激しく落ち込んでいた…賈馱に聞くとアレは呂布の母親代わりであり、流行病で亡くなられた丁原殿から送られた大切な得物という事…

そしてなぜ壊れたのか、原因が俺にあるかもしれないから調べたら手入れ不足ということが分かり、そのことを呂布に伝えようと思っただが俺とは会いたくないようだ…まあ張本人だからそうだな…なので張遼に教えてあげて欲しい伝えたら俺は腕を掴まれて呂布の部屋に連れて行かれ、部屋の外で待つていたら張遼が説明している声が聞こえ、しばらくしたら張遼が俺を部屋に入れた

俺は待つている間に自分の持つている武器の中で呂布が使用できる得物を渡すということを決めた

そこで呂布は…ちょっとやつれていた…俺はまず素直に謝罪したが、呂布も自分で手入れしなかったことを後悔していたと分かった…元々丁原殿からちゃんとやりなさいといわれていたが自分が怠ったのが原因と…

だが壊したのは俺なのだし、ということであの持っている武器の一つ、『破塵戟』<sup>はじんげき</sup>を渡した。そしたらその場にいた二人とは真名を交換した

なお陳宮だが呂布の武器のことを放っておいたりしたということが大きくな問題になり、賈馮達から謹慎が言い渡されていた

といってもその翌日に事のあらましを説明したら董卓、賈馮とも真名を交換する事になった。ちなみに他の奴らは既に交換していたとの事…

そのことを疑問に思って聞いたら『偶然』で済まされた…

その後は何もなかったな。まあ呂布の手に慣らすために俺と試合をしていた時に呂布が俺を片膝つかせ、それ以降華雄も霞もよりいっそう鍛錬に励むようになったぐらいか…

華雄は一撃で俺にやられたのが悔しかったらしく、毎日のように挑んできて壁に吹っ飛ばされるといづのを半月ほど続けたら俺を師事し始め、俺も伸び代のある勇将を鍛えられるのであっさり了承し、それを伝え聞いた霞も入り、先ほどの事件後は呂布も入った

そして今は…

「本当に終わらないな…」

「そつね…」

「へう〜」

詠、月の二人と書類整理中だ…ちなみにやっているのは俺が民からの陳情と警邏の問題改善、詠と月は太守としての仕事だけの筈だったのだが…

「あ、また霞の奴酒代を経費で落とそうとしてやがる…認められっかこんなもん」

「これは…恋の家族の餌代？給料から出せって言ってるのにあいつら…」

「お、終わらないよ〜」

「龍鳳さん、これうちの隊のです…って何ですか？これ」

「書類」

未処理より処理してあるほうが多いが、俺と詠の前にはそれ以外のよつなものがある、明里もそれを疑問に思ったのか一枚手にとつて見ると

「なるほど、そういうのですか」

「分かってもらえて何よりよ」

「やっぱり減給とかにしたほうが良くないか？延々とやり続けるぞ」

「でも、皆さんがんばってくれてるんですし…」

「」「甘い」

「へっ？」

「月、お前の優しさはすごい、だがそれがあいつ等を甘やかしているという事に気づくべきだ」

「……」

月大好きっ子の詠も何も言わない……やっぱりこの書類の量だと文句の一つも言いたくなるんだろう

「俺も上に立つものだから気持ちは分かる、だがな、時にはびしっと言ってやらない時もあるんだ……相手の事を思うんだったら特にな……厳しさがあつてこそ、本当の優しさだと俺は思う」

「……」

「そうですね。時に叱責することも大事です。月さんが皆さんの事を大切に思っているのは皆知ってます。だから皆さん分かってくれますよ」

「そうだよ……迷うくらいなら、覚悟を決めて、勢いだけでもいいから決めればいいんだよ」

「それにお前は一人じゃない、ここにいる皆が仲間だからさ」

「……そうですね……皆さん、ありがとうございます」

「いって事よ」

「そうそう」

「友達ですから」

「それじゃあ恋さんと霞さんと華雄さんとねねさんを呼んで来て下さい、それと龍鳳さん」

「何だ？」

「これまで壊した訓練場の修理費、これから給金から問答無用で引きますから、壊さないようにしてくださいね」

「は？」

「くくく…「詠ちゃん」何？月」

「詠ちゃんはこれまで龍鳳さん蹴ったりして壊したものの請求をするから」

「（あれ、もしかして…）」

この後月に呼び出された全員が同じような宣告をされた…それと同時に俺と詠は言わなければ良かったんじゃないかと本気で後悔したね…

これが今日までであった事、そして今日は俺が洛陽にいる事がついに劉弁様、劉協様にバレ、ここに来るといってお達しがあって今城内は上へ下への大騒ぎとなっている

「あんだ交友があつたのなら何で言わないのよ…！」

「交友といつても一年半ぐらい教鞭をとってただけだぞ、私塾の先

生伝で…まあ覚えてるとは思わなかったし」

「どづいことよ?」

「弁様の後ろ盾と、協様に取り入ろうとしている連中」

「…言いたいことは分かったわ…とにかく、あなたが出迎えて頂戴」

「分かっている…」

そんなこんなで俺が両皇太子妃を出迎え、玉座へとご案内した…  
なお護衛は「龍鳳がおるから大丈夫じゃ!!」という弁様の一言で  
いなくなった…確かに強さを見たいといわれて護衛官全員のした事  
あるけどさ、あっさり引くのもどうよ

「では、食事を始めます」

月の一言で始まった皇太子妃を含めた食事会。これは俺の隊がい  
つもこのように食べているといったら月がうらやましがり、詠が将  
軍達だけならという条件で許可したものだ。交流を深めるという意  
味ではこれ以上のものはないため皆喜んで参加している

最も一部は酒酒酒だが…それと今回は弁様、協様が来ているため  
まずは自己紹介（俺以外）をした後開始となった

このときは丸机で大皿に料理を盛り、そこから各々料理を取って  
食べるというもの、席順は玉座の方を十二時、始点として時計回りに  
『弁様、月、詠、彩燐、陽里、明里、恋、霞、双花、清、優優、華  
雄、協様、俺』

だ…ちなみに話題はもっぱら最近の洛陽及び全国の情勢だったのだ

が…

「そろそろ龍の話が聞きたいの」

「此度はどのような事を話してくださいますか？」

「話？何ですか？」

「龍はいろいろな話を知っておるのじゃ！」

「なんでも未来からこの世を救うために来たと言っておったしの」

「「「「「「！！！！？」」「」「」「」

「弁様、協様、それは公言しない約束のはずでしたが？」

「ここにおる者達は皆知っておるのじゃろ？」

「そうじゃ、お主は真名を交換したものは知っておるといっておったではないか…実際に盧植もしておったしの」

「ですが彼らにはまだ話してなかったのですよ…今日この時に話すと決めていましたので」

「そうなのか…すまんことをしたの」

「いえ…」

「では話してくださいますか？」

「ええ…ただ、話している間、質問は受け付けません。話し終えたらで」

「……………はい（うん）（ええで）（コク）（ああ）（なのです）……………」

この後俺の事と知っている事のほとんどを話した…

この世界を壊そうとするためにこの世界の住人として送り込まれた事、

そのための力として剣等を受け取った事、

本来の歴史とそれによりこの後起こるであろうこと、

それによる特定の人物の死と暗躍、

話し終わると既に知っている俺の隊の将、弁様、協様以外は顔が青ざめていた…特に詠がひどい…

「嘘はないんやな」

「ならお前らの出身地と親の名前言ってやろうか？」

「僕らもそれで最初疑いましたけど本当の事だとすぐに証明されましたよ」

「それにしても…正史でしたか？それで私の孫が…別人と分かかっていてもやりきれないですね」

「お主等は良いではないか…信じていた者にこのままでは殺されかねん我等より」

「そうですね…それに…董卓殿も」

「しかしお前は真名を交換したものに言っのたろう？それだと私に弁様、協様は除外されるのではないか？」

「弁様、協様の真名は知ってる、ただ公の場では呼ばないだけで…何進と宦官に目をつけられたくないのでな…華雄、お前に教えたのはお前の事情を知っているからだ」

「!？」

「すみません、華雄さん」

「董卓様…」

「ですから、私から真名をあなたに授けたいと思います」

「!？」

「これからは真名として『さい辛』を名乗ってください」

「董と」月です」

「皆さんも、よろしいですね」

「はい（ああ（もちろん）や（（（

「では我等もなのだろうかの」

「ですね、姉上」

『は？』

「しかし皇太子妃様達の真名は…」

「信頼できるのはここにおるもの達じゃ、龍よ」

「まあ我等二人、別の感情もあるがの」

協様のは全員にすっかりと聞こえた…無論俺は理由とかも全て知っており、身分とかを盾に逃げようとしたが美少女の涙目上目使いという見事な決め技の前に陥落したのだ…どこでおぼえたのか聞いたら侍女達に聞いたそう…以来俺が侍女とか小姓のようなのを側に置かないのはそれが理由だったりする

そしてそれを聞いた一部が若干、いやかなりおろおろしていたが…

「弁様、協様」

明里が口を開いた…どことなく嫌な予感もするがここは任せる感じにするしかない

「龍鳳さんの事を好きなのは御二方だけではありません。私を始めとする珀武義勇軍の全員は勿論、私と同じく水鏡女学院の諸葛孔明、鳳土元、盧植塾門下の劉玄德、公孫伯珪、荀文若が好意を抱いてます…異性として」

「そうであるうな…何せ盧植が宮廷を辞し故郷の幽州に帰ったのも門下が理由と聞いておるからの」

「それに董卓、お主も龍の事を好いておるう」

協様、それは…

「な…どうして分かったんですか!?!」

「当りだったよ…女性ってすごいな」

「恋も…好き」

「恋殿おお!?!」

「うちは…微妙やな」

「私もだ」

「僕は…」

とちよつと混沌としたが結局のところ俺の目指すものはまず漢王朝のもとで行うと言ったら一度落ち着き、俺の事を好いていないね、まだはつきりと分らない霞、幸が退出した後真名の交換をした

弁様は『梅芳』うめかほ、協様は『桜蓮』さくらつたという真名だ

これで今回の食事は解散…の前に今後の『黄巾党』と『反董卓連合』に対する対策を考えたが…宦官の残党などに恐らく、後者は十中八九邪魔されるであろうから外から救うという事、それで俺に

前者の時点で領土を与え、救いやすくするとしか結論は出なかった…

それから半年、何度も客将として戦い続け、宦官どもにも少しずつだが撒いたら簡単な官位をもらい、それを受けて出立というところ

「世話になった」

「いえ」

「でもまさかあの郡の太守になるなんてね」

「適度に撒いたおかげさ。世渡り世渡り」

「では気をつけてくださいね」

「ああ…またな」

「はい」

「ちゃんと来なさいよ!!」

「分かってるよ」

そうして俺達は新たな土地へと出立した…そこに尽く前にちょっと悶着があるのだが、そんなこと俺が知るはずもなかった

第六話 信頼と獲得と…なんかひどい（後書き）

作：孫呉が先って言ってたけど変更して曹魏を先にします

鳳：まあ道のり的には良いんじゃないか？

龍：にしてもこれまででたったフラグってどんなん？

作：こんな感じですよ

成立 桂花、桃香、月、恋、白連、朱里、雛里、オリジナル勢

半立 詠、霞、幸

八部立 音音音

鳳：反董卓で半立は成立入りするのか？

龍：しかし原作キャラは全部で50人位いるからな…

作：今回は曹魏で、一人成立させるのは確定、運が良いともう一人半立に出来る

鳳：誰だろうな？

龍：想像は結構易いと思うが…

作：ではまた次回！！

桃：質問・意見・感想等を待ってます！！今回から交代で私達が担当します！！よろしくね！！

第七話 強さと弱さと思いと…（前書き）

作：今回うまくかけたかな？

鳳・龍：いや、全く

作：ちゃんと書いたよ！！

鳳：いつペン書いたのを凡ミスで消した奴がどの口利いてんだ？

龍：俺のほう全く更新しないのに…

作：申し訳ありませんでした、それと基本視点は龍鳳です今回から  
そっついのは消します

## 第七話 強さと弱さと思いと…

俺達は治める事になった荊州南郡へと向かっている途中、とある村が賊に襲われ、数日後再び襲われる可能性ありとの報を聞きその村へ急行した

そして俺の名前は運良く良い感じに有名になっていたらしく、あっさりとその村に入る事が出来た。その村には義勇軍があり、今その将である彼女達とも面会しているところだ

「俺がこの軍の大將、珀麒麟だ」

「軍師の司馬中達です」

「同じく徐元直です」

「張儁乂といます」

「徐公明です」

「凌公績よ」

「姜伯約です」

「私は義勇軍の将の一人、楽文謙といます」

「沙和は于文則っていうの〜」

「うちは李曼成ゆんや、よろしくな」

「沙和、真桜!!」

「気にしなくて良い、それより、近隣の郡とかに援護要請はしたのか?」

「はい、それで、陳留郡の曹操殿が、既に将二人に先遣隊千人、そして自身が本隊を率いて来られるそうです」

「そうか…先遣隊到着まで後どのくらいだ?」

「早いと今日中には着くそうです。本隊は今しばらく掛かるようですが…」

「そうか…陽里、明里、お前達の予測だと後何日で賊は襲撃してくる?」

「早いと一、二日ですね…遅くとも三日目には来るかと」

「はい、ですので残りの時間で本隊到着まで持ちこたえられるよう門前の防御を強くしておく必要があります」

「門の状態は?」

「悪いとしか言いようがありません…なのでその周りに柵を作っていたのですが…」

「材料も足らないと…」

「はい…」

「優優、清、双花、彩燐、すぐに兵千率いて近くの森に行って各隊  
二、三本木切って来い」

「「「「御意」「」「」

「残り二千のうち千は負傷者達の救護、残りはこの村の状態の確認  
に行かせろ」

「「はい!」「」

「いいのですか!？」

「助けを求める手を振り払うほど俺は外道じゃない…それで、賊は  
普段どのように攻撃してくる？」

「いつも北門を重点的に攻めてきますね…それと同時に他の門全て  
も…なのでそこが一番不安です」

「そうか、退く時はどう動いている?」

「北から東のほうへと動いていきます」

「そうか…翳そく!」

「「「」」

「「「!?!?」「」

「聞いていたな」

「調べてきます、全て」

「頼む…危険だから気をつけてくれ」

「御意」

そうして翳はいなくなる…楽進たちはびっくりしてるな…まあ驚かなかつたら精神強いつて感じじゃないんだけどな

「これで打てるでは打つただろう…後は、君達の実力把握といこうか」

「「「へ？」」」

「実力を知らないとうまく連携できんだろう、ほら、行くぞ」

んなことがあって俺達は村のちよつと拓けた所にきた

「一人ずつ見る、まずは「私からお願いしてもいいですか」楽進か、いいぜ」

「よろしくお願いします」

俺も楽進も構える…合図は…

「それじゃ、いくの〜」

「始め!!--」

で、始まった…明里がいるのはその実力も考慮した策を作るためだ

楽進が俺に打ち込んでくるが俺はそれを余裕を持ってかわす…しかも必要最小限の動きでだ…時折捕らえかけるも上手く誘導しては  
ずさせる…

「なるほど…」

俺は一度空振らせてそのまま距離をとる…そうすると楽進のほうもいったん落ち着く

「なぜ腰の得物を抜かないのですか？」

「実力を見るんだ、こいつを使うと見るまもなく終わっちまう…まあ大体分かったから終わりでいいんだが」

「…どうですか、私の実力は」

「今の時点では俺の隊の兵より少し強いつて所だな…だが延びる余地が十二分にあるから上手く鍛えれば化けるな」

「そうですね…」

「まあそう落ち込むな…俺の隊の訓練は死ぬか死なんかギリギリのところまで追い込むからな…数が少ない分質で補うしかないからな」

「はあ…」

「おし、次は…」

そんな感じで于禁、李典の二人とも手合わせしたがこの二人は楽進より劣っていた…よくもってたな、この村

「悪くはないが良くもないな、お前ら」

「「「……」」」

「楽進はまだいいが于禁、李典の二人は気持ちだけが先走ってるな、変に実力以上のことをしようとしてる…こつという状況ならいいが疲れきったところでやるのは唯の自殺と一緒だ」

「手厳しいですね」

「あのお、俺は死なせに来たんじゃねえんだ…それに言ってやらんとたぶん自覚せんぞ」

「毎日ちゃんと訓練してるの!」

「どんなのだよ」

「素振りしてるだけですけどなの…」

「楽進は?」

「型を確認しているぐらいです、賊がいつ襲ってくるか分かりませんし」

「李典」

「え〜と…うちは肉体労働より頭脳労働派なんで…」

「龍鳳さん、落ち着いてください…彼女達に悪気はないんですから…」

「無い分性質が悪い…子供の発想だぞ…」

「では珀武殿はどのような訓練を？」

「走り込みを最低十里、その後腕立てや腹筋、背筋を百回やった後、素振りを百回、その後無手の型の確認する。それでこれと平行して気を体中に満遍なくまわせる様にするのもやっているな」

「「「！！！？？」」「」」

「なおこれは龍鳳さんだけじゃなくてうちの部隊は最低限これを個人であることを推奨してます、それに食事とかは基本的に全員で一緒です。連帯感が生まれますから」

「人を守りたいんだつたらまずは自分の身を楽に守れるようにならんと…そうでなければ守りたいものも守れなくなる」

「……そのような事があったのですか？」

「一度だけな、そのときの無念は忘れんよ…だからこそ強くあらんとするのだ」

「でっ」「申し上げます…！」

「どっ」「どっした？」

「曹操軍の先遣隊が到着されました」

「分かった、会いに行く。楽進、李典、于禁、お前達も来い、よく知っているからな…明里も」

「はい」

「分かりました」

「はいなの」

「了解やで」

そして村の中心のほうに戻ると青髪の女性と小さい女の子が居た

「お前達がこの村にいる義勇軍の将か？」

「はい、私は楽進と言います」

「于禁なの」

「うちは李典や」

「あんたは？」

「俺は荊州南郡の太守、珀武だ」

「かの有名な雷將軍か…そのことは聞いているがなぜこのようになつてくるに？」

「任命されて任地に行く途中にここで大規模な賊がいるって聞いてな、その討伐にきたら彼女達と会ったというしさ…てかやっぱり有名なんだな…」

「ああ、雷をまとい、賊を蹴散らす…名のほうは始めて聞いたが」

「うんうん、雷將軍・珀麒麟って言うのはよく聞くけどね」

「俺の字が麒麟だからな…名乗る時は姓と字の方が格好いい気がするな」

「確かに格好いいと思います!!」

「お主は？」

「あ、珀武軍軍師の徐庶です」

「そうか、私は先遣隊の隊長の夏侯淵だ」

「僕は許緒だよ」

「お前達の軍は全部で何人だ？」

「兵六千人、将四人、軍師二人に龍鳳さんです」

「そちらは？」

「将は私と季衣、それと兵が千人だ」

「わわわ、と言う事は私達が主力でしゅね…噛んじゃいまひた」

「そうなるな」

「本隊はいつごろ到着予定だ？」

「早いと三日後だな」

「わわわ、もしかすると間に合わないかもしれないかもしれましえんね…またか  
んじゃいまひた」

「家の将が兵率いて丸太持ってくるだろうから、それ使って何とか  
防衛するしかないな」

「あの、投石器はどうでしょうか？」

「なんだ、それは？」

「字のごとく、石を投げるものさ…ただ急造物しか無理だろうから  
五発放てればいいほうだろうな」

「石なんか投げてても意味無いんじゃない？」

「石といっても道端に転がっているようなものではなく小さくても  
人の頭と同じぐらいの大きさのを投げるんです、しかも賊は密集し  
ているでしょうから効果は大きいです」

「なるほどな…確かによさそうだ」

「んじゃ、明里はあいつらが戻ってきたらその指示頼むわ、それと  
龍鳳さん」陽里か、どうした？」

「君は？」

「珀武軍軍師、司馬懿です。皆さん戻ってきました、それと、これが今の村の状態です」

俺は陽里に渡された竹管を読む…現在戦えるのは百人ほど、門は開きっぱなしといてもいい状態、武器はほぼなし、か…それと斬って木は全部で十二本…よし

「陽里、半分はすぐに加工して門を守る柵にしろ、やり方はわかっているだろう？」

「はい！！」

「残りはこっちに持ってきてくれ、簡易の投石器を作り、防衛に使う」

「わかりました、明里ちゃん、一緒に来て」

「うん」

とりあえずこれで準備のほうはいいか、簡易だから投石器もそう複雑ではないしな

「で、投石器を作るのは？」

「俺がやる、攻城戦とかに使用するものじゃないし、使い捨てのよ  
うなものだからな」

「そんなに簡単に出来るものなの？」

「長い丸太の中心に短い丸太くつつけりゃいいだけだからな」

「それだけで石が投げられるようになるのか？」

「ああ、各門一台ずつ、まずは北門用から作る」

「お待ちください、北門は一番賊が多く来るのですよ、そんなところのを…」

「北門の守りは俺が着くからな、だからそれでいいんだよ」

「流石二万の賊をなぎ払ったといわれる『雷將軍』だな」

「ああ、だができる事は限られてるし、へたすりゃ死ぬ事もある…だからそうならないようにいろいろ考えるのさ」

「なるほどな…」

「とにかく作ろう、その後全員で配置を決めて作戦を立て、本番…そんな流れで良いか？」

「構わない」

「んじゃ、いつちょ頑張りますか」

それで投石器を作っていたら李典が「協力するで〜」と行って参加したが正直助かったな…想定していたものより良い投石器が出来たから楽に成る…先遣隊の兵達は投げる岩を探してきてくれた…後

で夏侯淵殿には礼を言っておかんな…

また平行して楽進、于禁、李典の三人を鍛えた…楽進は飲み込みが早いから鍛えてて楽だ…于禁、李典、お前達はもうちつと真面目にやれ…ことあるごとに洛陽の事聞いてくんな…欲望全開で

そんなこんなで賊がもうすぐ来る確認でき、全員配置に付いた

振り分けは

- ・北門 俺と楽進と彩熐率いる騎馬隊（伏兵・千人）
- ・南門 于禁と明里に双花
- ・東門 夏侯淵殿と優優、清
- ・西門 許緒殿与李典

そして各門に俺の隊の兵千人ずつ、残りは村の中だ…夏侯淵殿達が率いてきた兵は各門近くに二百五十人ずついる

これで負けるか…ないな。何せこのような状態で恋、幸、霞、詠指揮する四方からの攻めを凌ぎきって逆襲してやったからな…あれ、攻めも守りも万能？俺の隊

鍛えた甲斐があったぜ…と、そろそろ来るな…んじゃ、始めますか…!!

第七話 強さと弱さと思いと…（後書き）

作：最近遊戯王物も書くころと思ってるんだ

鳳：やめろ、龍士以上に更新が遅くなる

龍：せめて俺のほう完結させてからにしてくれ

作：『ギャグマンガ日和』みたいな感じですか？

鳳：「ソードマスター大和」か…結構有名だよな、あれ

龍：流石にそれはやめてくれ、後生だから

作：冗談だ…しかし一話の予定だったのにな…

鳳：予定は往々にしてずれたりするもんさ…次回は戦闘と霸王との  
会合か…

龍：まあ頑張れ

第八話 百合百合霸王様：超逃げてえ（前書き）

作：前半は戦闘メイン！！の予定

鳳：ちゃんと楽進活躍させるよ

龍：基本主人公無双だからな…

作：楽進はちゃんと戦いますよ…主人公の援護で

鳳・龍：まともになりあえる奴っているの？

作：呂布

鳳・龍：確かに

## 第八話 百合百合霸王様…超逃げてえ

戦闘が開始して大体半刻、まずは投石器の射程内に入った賊に対してでっけえ岩を送ってやる…これには若干ビビリつつも退くことなく突進してきたため、今度は矢を雨霰の様に降り注ぎ、平行して門の柵の前にいた俺と楽進が突っ込み、

「おらあ!!」

「ふっ!!」

賊どもをがんがん吹っ飛ばしてる…

岩と矢で結構人数が減らせているため、そう苦にはならない…兵達に剣、槍、弓、どれも最低限使える様にしておいて正解だったな…

龍鳳の『最低限』は民から見ても玄人と同じですby作者

またなんか飛んできた…しかし人数はあまり減ってないように感じる…

「なかなかへらねえな…おらおらおらあ!!」

「全くです…援護もなくなりましたね」

「まあ量には限界があるからな…まだいけるか、楽進」

「はい!!」

「俺も少し本気を出そう…水天逆巻け…掬花あ！！」

「『…！！』」

楽進も賊どもも驚いてるな…まあ何か言ったら刀が槍に変わったんだからな…しかし…

「驚くのはいいが戦場で止まるのは自殺行為だぜ！！『波鬪撃』！！」

『ギヤアアアア！！』

掬花は基本的に片手でぶん回してその勢いで相手をたたつ切ったり、潰したりが主だ。それに『流水系』だからそのときに水も溢れ出す…その威力は人二人をあつさりと押しつぶすほどだ…なので

「楽進、お前はもうちょい離れたところにいる奴らに！！ここは俺が！！」

「は、はい！！」

そうして俺の掬花と楽進の攻撃…ってありや気弾か？仲間にしたいな…んん、とにかく、攻勢に回った俺達の攻撃の前に賊は次々と蹴散らされ、さらに伏兵としてとうか翳に敵の根城を探らせておいた根城を強襲し帰ってきた彩燐の騎馬隊に止めを刺された…うん、見事

俺達は手に入れたものと共に村に戻ると本隊が到着し、他の門の戦闘も終わっている事が分かり、俺は彩燐と陽里、明里に賊の拠点から取ってきた物資を村の人に配るよう指示し、双花と清を伴って

曹操軍本隊のところへ向かうと、夏侯淵殿と出会った

「夏侯淵殿」

「珀武殿か、何用ですか」

「曹操殿にお会いしたくてな…取り次いでもらえるか？」

「もともとそのつもりで探していたので…こちらです」

「分かった、双花、清、行くぞ」

「「御意」」

そうしてしばらく行くと楽進、于禁、李典と共に夏侯淵殿の色遣いの服着た黒髪の女性と金髪ツインテドリの女性が居た…恐らく金髪のほうが曹操だろうな…

「華琳様、珀部殿が来られました」

「そう、分かったわ、あなた達もここにいなさい」

「「「はい(なの〜)」」」

「始めまして、雷將軍・珀麒麟」

「ああ、始めまして、霸王・曹孟徳殿」

「「「「「っ!」」」」」

俺と曹操が互いに覇気を体から出すと、楽進達は驚いているな…  
双花と清は平然としているが

「あら、私の覇気と同じぐらいのを持つなんて…すばらしいわね」

「お褒めに預かり光栄だね、でもこれで一つわかっただろう」

「ええ、なら倒すまでよ」

「結構、まあこの程度の連中に俺の仲間は誰一人として負けんがな」

「そのような、私とあなたの覇気を受けても平然としていたのだから」  
「ら」

「敵にあんたみたいなのが居たらという前提で訓練した事もあるからな、このくらい出来てもらわないと困る」

「そう…一ついいかしら」

「これからの乱世、俺はこの覇と仲間と民を思う徳を併せ持ち、恐れぬ勇と忘れぬ初の魂を持ってその乱世を平定するつもりだ…お前は？」

「あら、物分りのいい…私が目指すのは霸道、それだけよ」

「孤独で血塗られた道をあえて選択するか」

「ええ、それが私の道よ」

「そうか、また会おう、曹孟徳…出来れば味方同士がいいがな」

「それは天のみぞ知る、よ…でも、秋蘭からの報告ではそのほうがよさそうね、兵の錬度が違いすぎるわ」

「華琳様、このような奴の軍にわが軍は負けません!!」

「貴官は？」

「我名は夏侯惇!!華琳様の覇道の妨げとなるものを切り裂く大剣だ!!」

「ほう…確かに強い部類に入るが…うちの軍師にも負けそうだな」

「何だと!!」

「姉者、本当だ…楽進たち三人相手に二人で圧倒していた」

「!!」

「実戦経験も多いからな、あいつらは…まあ負けるといっても条件次第じゃあんたが勝つ」

「勝負は時の運という事か？」

「そういって…あんまり頼りたくないがな」

「そこは同意するわ…それと」

「何だ？」

「そのの三人、あなたの軍に入りたいそうよ」

「そうか、ならばありがたくいただいていくとしよう」

「遠慮という言葉は無い様ね…まあいいわ」

「ああ、それとこちらも流石にこれ以上はいられないのでな、申し訳ないがもう行かせてもらう」

「ええ、ではまた会いましょ」

「ああ、出来れば戦場以外でな…ありえないだろうが」

それで俺は清、双花、楽進、李典、于禁を伴って自軍の所に向かうと、既に全員出立準備は完了していた

「まず全員に紹介しておく、今日から加わる新しい仲間、楽進、于禁、李典だ。それぞれ自己紹介を」

「私は姓を楽、名を進、字を文謙、真名を凧といいます、今日からよろしく願います」

「沙和は姓を于、名を禁、字を文則、真名を沙和って言うの。よろしく願いますの」

「うちは姓を李、名を典、真名は真桜や。よろしゅうな」

その後俺達全員が真名を教え、そこから配属を決めていく

「凧は双花、沙和は優優、真桜は清の元で副官をしてもらう」

「……はい(なの)」「」

「では進発する。目的地は荊州南軍!!」

『はっ!!』

歩を進め始める俺達… 凧たちは馬が無いから徒歩になる… 多分来なかつたほうが良かったとか思いたすだろうな、特に沙和と真桜は… 行軍も半分調練になつてるからな…

「荊州南郡には一体どうなっているんだろつな… とにかく実際に行つて見なければ分らんか」

既に情報は陰、影、翳の三人の部下から逐次報告が入っている

土壤状態から民達の状態、さらにはかつて太守がどのように治めていたのかまで分かっている…

前太守はまともであつたが病没、今はその奥さんが何とかしている状態らしい…

大丈夫なのかな、俺…

そんなこんな考えたり兵達の訓練もしたりしながら四日後、無事南郡に着く事が出来た

凧達は歩兵同様時々走らされたりしていた… 凧は一日目から平気そうだったが沙和と真桜はしんどそうだったな… といっても昨日当りになつたら凧と同じぐらいで走れるようにはなつていたな… お、

迎えが来た

「始めまして、私がこれまでこの南郡を代わりに治めていた黄忠漢升です」

「遅れてすまない、俺が新太守の珀武麒麟だ」

「お噂は常々聞いております。こちらです」

黄忠に案内されて俺達は入っていく…その中にいくつか殺気を感じる…黄忠からも感じるが何か憂いのようなものも感じるな…大方俺を嫌っている連中だろう…黄忠は人質か何かで仕方なくといったところか…よし

「翳」

「はい」

「どうなっている」

「主の軍を吸収しようと劉表あたりが仕掛けてきたのでしよう…某も注意しなければれるところでした」

「あ奴は？」

「人質です…某でも一人だと命を犠牲にせねば助けられぬほど兵士達が嚴重に困っています」

「分かった、刺客は全員俺にしか集中していない…凧と双花と古参の兵十人、大丈夫か？」

「十分です」

「頼んだぞ」

「御意」

翳がいなくなる…今翳と会話していた事に気づいているのは俺の軍以外だと黄忠ぐらいだろう…実際にちよつと殺気が薄れている…ちなみに気づかないのではなく気づかせていないのだ…うちの隠密の連中は気配消すのに長けてるからな…ちなみに俺が気づけるのは気を感じるからだ

刺客が一箇所に集まりだした…どうやら決めたようだが手はずが悪…実行者は流れ者のようだな…糾弾されて自分に被害が出ないようにか…阿呆が

暗殺のほうが確実だったのに気づいてないのかね…まあ俺としてはめんどく無いからいいんだけどね

するといきなり大量の兵士達ができて黄忠ごと俺達を取り囲む…ざつと一万ぐらいか

「何者だ!?!」

「なに、ただあんた達には死んでもらいたいだけだよ」

「話が違つじゃない!?!」

「あんたは邪魔だから一緒にやれっつていわれてんのさ」

「そんな…」

「くつくつく…俺達は一人、これだけの数に勝てるかな？」

「ああ」

「ば、馬鹿じゃねえのか！！兵法の基本も知らねえのかよ！！」

「有象無象が一万二万集まろうと俺達は負けん」

「ふざけんじゃねえ！！手前ら！！やつちまいな！！」

「全軍抜刀！！迎撃せよ！！」

『オオー！！』

俺達に敵が襲い掛かってくるが全員次々と打ち倒していく…沙和も真桜も活躍しているな、それじゃあ俺はつと

「どうした？この状況に声も出ないのか？」

「ば、馬鹿な…」

「雷將軍の部下なんだ…二万を一人で打ち破る奴についてきてもらうためには一人で五十人は殺せるようになってもらわんとな」

単純に計算すると五十倍を打ち破れるようになりたいといっているようなものだ…実際は十倍がいいところだろうがこういうときは誇張したほうがいい

「こ、黄忠！！奴を討ち取れ！！あ、あいつがどうなってもいいのか！！！」

「……………」

黄忠が無言で矢を向け、俺に放つも、全て俺は掴みとる…まだか…  
… 凧、双花、翳…

「ええい…役立たずめが…もう言い！！あの餓鬼を連れて」あの餓鬼はこの子のことですか？「！！！」

「！！璃々！！！」

「遅いぞ」

「申し訳ありません、着いても妨害がすごく…」

「とはいっても凧の嬢ちゃんが気弾で片っ端からぶっ飛ばしてくれ  
たからだいぶ楽だった」

「さて、これで俺達が争う理由はなくなっただな」

「ええ、兵士達のほうも終わったようですね」

「……………」

「ん、怪我した奴はいるが重傷って感じじゃないし…死者は零か…  
うれしいねえ」

そう言つて微笑む…すると正面から俺の顔を見ていた三人は顔を赤くしてそらす…戦場でなにしてんだか…

「隊長！！逃げちゃうの！！！」

「！逃さん！！！」

俺は雷天装を発動して瞬時距離をつめ、捕獲し、もと居た場所に戻る…黄忠だけか、驚いてるのは…子供はどうやら気絶しているようだしな

「さて、どうする？」

「そうですね…」「ああ！！」「どうしました？」

「双花、知っているのか？」

「うん、こいつ、黄祖だよ…たしか孫呉の母、孫文台を毘にはめて殺した奴だよ」

「いい事を聞いた…黄忠、こいつは孫呉との取引材料にする、構わないか？」

「本音を言えば私自身の手で殺してやりたいところですが…孫呉とは今後のことを考えると友好的な関係は作っても敵対するのは危険ですから、よろしいです」

「すまないな、それと風、早く渡してやれ」

「あ、す、すみません！！！」

「いいですよ…ありがとうございます」

「いえ、お礼なら隊長に…」

「実際に助けだしたのはあたしらなんだから素直に受け取るつよ」

「双花の言うとおりだな。謙虚なのはいいがそれも過ぎると嫌味に  
しかならんからな」

「あ…はい」

「さて、お前はこれからどうするつもりだ？」

「よろしければ…末席に加えていただけませんか？」

「末席ではなく、副官になってももらえないだろうか」

「…！よろしいのですか？」

「お前が俺の命を狙った理由はあれでもよく分かった、それに俺達  
は土地を治めた経験はない…だから指南役が欲しいのさ…無論受け  
るか否かはお前に一任する」

「わかりました…受けさせていただきます。我真名は紫苑、お受け  
取りください」

「我真名は龍鳳、紫苑よ、お前がこれから先望むものは何だ？」

「我子、璃々と笑って過ごせる世です」

「分かった、もし俺がそれを成すに値しない人物と分かったら裏切  
つても構わん、だが、値す人物である限り、全命をとって答えても  
らうぞ」

「はっ！！」

そうして俺達は南郡を治める事となり、紫苑という新しい仲間も  
得た…さて、まずは洛陽と同等とは言わんがそれに近いものにせん  
とな…これから忙しくなるが、楽しみだ！！

第八話 百合百合霸王様：超逃げてえ（後書き）

作：終わった〜！！

鳳：しかし今回で黄忠も仲間に加わるとは…

龍：まあ蜀で黄忠がいなくならないわけ無いしな

作：しかも弓の名手：兵の錬度がまた上がるぞ

鳳：親衛隊だけか？

龍：いや、こいつの性格だと…

作：目標としては兵一人〃原作の関羽クラスにしたい

鳳・龍：兵達一人一人が一騎当千！？千人率いていけば小さい軍勢は瞬殺されるな…

作：それと凧、沙和、真桜もどんどん強くしてくし、次回はまた新しい仲間入れたいな〜

鳳・龍：ちゃんと紹介してやれよ

作：分かってるよ…また次回！！

鳳・龍：お楽しみに！！

桂：誤字脱字、感想や意見とかいろいろ待っててあげるわ…正直男  
からの遠慮したいけどね

## 第九話 仇と小猿に（前書き）

作：結構きつい感想が来ました…

鳳：くれるのはいいし乱文と書いてくれるのもいいですがこういうのってちよくちよく見るぞ

龍：さりげなく他人を巻き込むな…感想書く時は自分がもらって嬉しく感じるものを書いてもらえるとありがたいです

作：誤字脱字に意見・感想とは書いたが批判が欲しいとは言っていないし

鳳：荒らしと言う奴か？

龍：そこまでじゃないよ…

作：形式は変えませんが、素人ですし…恋姫は登場人物が総勢五十人を超えるので…

鳳：てか面白いの見つけるとまずwikiチェックしてるからな

龍：漫画も読んでるらしい

作：感想一つでホンとテンション変わるわ

## 第九話 仇と小猿に

今俺は双花を護衛として黄祖を孫呉に引き渡しにきている

なんでも双花の父親は孫堅に仕えていたものの、自分は幼く、仇ともいえる人物が入り、そいつに常に突っかかって不協和音を生み出しかねないからこっちに來たと聞いている

陽里、明里は内政を整えるために残した…ちなみに翳に命じて既に書簡を届けて、返事ももらっている。まあ「はい」というのは期待していたが「早く連れてきてね、出ないとあなたも殺しちゃうかも」と書かれているのを見たときは双花と一緒に顔を引きつらせたな

内政の様子は良好だ。元々紫苑も紫苑の旦那さんも善政を行っていたのが大きく、またまだ存命のところに俺のことを聞いていて「うちに来てくれないかな」とぼやいていたらしい…

その紫苑さんは俺達には大きな助けとなっている。なにせ土地を治めた事がない俺達は暗中模索もいとこなのだからな…紫苑がやり方を端的にかつ分かりやすく説明してくれなかったらまだ黄祖を連れて行くことはおろかここまで余裕も生まれなかっただろう

そして俺がまず取り入れたのは町の警備を行う警備隊の設立と町民の意見を直に聞ける目安箱の設置だ。警備隊は軍に入りたいが試験に合格できなかつた者達で構成されている。ここで経験をつみ、各部隊の分隊長貴下の部隊長の推薦があれば軍に入れるという条件もついているため、反対するものは運良くいなかった。

目安箱は江戸時代、米將軍と呼ばれた徳川吉宗の真似だ…年号的

には先取りといったほうがいいかもしれないが…それは各地区の警備隊の詰め所と城の門近くにある。警備隊のほうはまだ難しいが城の方は既に機能している…文字書けるのを増やすために警備隊でも文字を覚えさせたりしているが…いかんせん時間がかかるな…気長に待つしかないか

む、思い出していたら孫策殿がいる城に着いて玉座の間にいる…さて、謁見といくか

「始めまして孫策殿、俺の名は姓を珀、名を武、字を麒麟といい、雷將軍とも呼ばれている」

「ええ、私が孫伯符をよ。黄祖を連れてきてくれて礼を言うわ」

「周公瑾だ…雷將軍の噂はここまで届いている。私としても黄祖を連れてきてくれるとは…少し驚いている」

「まあ、ただでもらえるとは思っていないんだろう？」

「ええ…でも「安心してくれ、小猿の仲間は俺の影に食われた」それならいいわ」

「まあ、こつちの要求は黄祖の身柄を引き渡す代わりに手を組んでくれないか、だ」

「こつちは母上の仇が討てるけど…私達は袁術の客将よ、今はね」

「商人は将来性のある武将に投資する、それと同じ事さ。小猿は虎には勝てん、猿同士なら分かんらんが、間に霸王がいる…まず無理だな」

「そうね…冥琳もいいと思うでしょ」

「ああ、しかし、そちらに良い事は殆ど無いぞ」

「そうかな…俺はいずれいいことがあると思っている」

「あら、あなたも勘がいいの？」

「多少な…孫策殿には絶対に適わないだろうが…」

「あら、嬉しいこと言ってくれるじゃない…それとそっちの子は？  
似た人を見たことあるんだけど」

「かつて孫堅様に仕えていた凌操が子、凌統です」

「凌操の…どうしてうちに来てくれなかったの？」

「甘興霸…」

「「！！」」

「仕えたかったです…母からは常々孫呉の絆は家族の絆と言われて  
まし…しかし孫策軍に彼女が入ったという事は彼女も家族、家族を  
殺してしまいかねませんので…」

「そう…私達も黄祖を恨んでるからその気持ちは分からなくも無い  
わ…」

「しかしどうしてそう考えた…いや、考えれるようになった？凌操

殿はそこまで思慮深くは無かったと思うが…」

「はい、母の仇を討つために訓練している途中に龍鳳…珀武様にお会いして、諭されたのです」

「なんて?」

「復讐もいいが親が本当に望んでいる事を忘れるな、と」

「!?!…そう…」

「はい、ですがやはり勝手ですがこちらの気分は悪くなり、それが軍への悪影響になると思いましたがこの軍にはこられませんでした…」

「いいわ、あなたがそんな風に考えているのなら」

「しかし珀武殿はすごいな…」

「お褒めに預かり光栄だね」

「じゃああなたと手を組む、秘密裏の同盟という形でね」

「ああ、あなた方が一人で立てるようになったらこちらから正式に使者を派遣するよ」

「ええ、まだ時期じゃないから時間はかかるけど…楽しみにしててね」

「ああ…有意義な時間だった」

「ではまた会おう」

「ああ、双、いくぞ」

「はっ！！」

そして孫策達のところからその足で袁術のところに向かい、近くに赴任してきましたので仲良くしましょう、といった感じの事を献上品と一緒に言っておいた

献上品は当然蜂蜜、しかも俺が洛陽にいたころに作った純度の高い奴で大層お気に入りだったそうで…俺が元を造ったと聞くとしっかりと食いついてきた

条件として孫策たちをもう少し優遇してやる事を条件としてやったら周りの諫める声を無視して承諾した…幸運だったぜ

まあ優遇と言っても月に一度か二度家族で会わせてやって欲しいと言うものだ。変わりに蜂蜜を遅くとも半年後から月一で届けることを約束した。半年後としたのは条件的にその位にならないと無理な事と有難みを教えてやろうということぐらいかな…

それともし俺達のしか買わないのなら持つてくる量を予定では普通の壺二つだが三つにすると言ったらこれは側近の張勳すら同意した…よっぽど気に入ってんだな…てか貴重な感じだから三つだと多分袁術が毎月消費する量の蜂蜜と同額飛ぶぞ…

まあ消費量だけで見てもんだらうな…こっちは足元見てやるが…それと俺の考えはそばにいる双花には筒抜けのようで苦笑していた…

そして見ていただけだと袁術はただの子供だが、ちゃんと恩を売れば返してもくれるから、こっちとしては孫策に倒された後、もし生きていたら保護してやってもいいな、とまで考えたところで謁見を終了させ、今度はもつと大人になった袁術様とお会いしたいです、とつい微笑んで言ってしまったが運良く浅い意味で取られたようだ…

もつともちよつと頬染めていたのは気のせいだと思う、てか思いたい…これで善政するようになったら孫策達が不利になるじゃねえか…もうちよつと考えて行動しや良かったよ畜生…

それで帰ってきた俺達の元にあつたのは大量の書簡と民からの陳情に加え…

「長安へ？」

「はい、両皇太子妃が将来どちらが帝位についてもちゃんと統治できるか見ると言つ名目ですが…」

「実際は勢力争いから守るための董卓さん達の策ですが…」

「それを期と見た十常侍が手の者を送り込んで変な風に教育しようとしています」

という良くも悪くも良い情報とは言えないな…ただ霊帝様も俺の事は覚えていらっしやるだろうが…長安は位置的に微妙だ…もし何かあつたら、すぐに駆けつけられると言っわけではないから…とそこまで俺が離れていた間にあつた事の報告だ…終わり俺は居室に戻り…

「一応警戒はしておくか…陰!」

「ここにいますぜ、旦那」

「長安へ行つて裏から両皇太子妃を守つて欲しい」

「分かりやした、ですが…」

「月達の方は影に頼む…翳は伝令役とする。そして他国他軍の細作つづしも平行して行つてくれ」

「もちろん…」

「ああ、これに関しては特別報酬も付ける…だが俺の話覚えているな」

「大体二、三年掛かるんすよね…その分」

「ああ、上乘せする、全員分な」

「分かりやした。大船に乗つた気でいてくだせえ」

「頼りにしている」

陰がいなくなり、俺は仕事の処理をしていくが…結構少ないな…本当に俺じゃなければならぬ仕事しかない…それ以外は恐らく全員で処理しているんだろつな…と思つたら

ドゴオオオン!!

「何事だ！！」

「はっ！！どうやら楽進副隊長達の部屋のほうで爆発があったようです！！」

「少し様子を見てくる…着いてきてくれ」

「了解しました」

兵を伴って凧たちのところに急行したら怒髪天をつく状態としか  
いえない凧と完全に延びている沙和と真桜の姿があり…

「一体何があつたんだ？」

「あ、隊長…実は」

凧の話では沙和も真桜も仕事をためており、今日までに片付けて  
おかなければならないのがあつたにも関わらずつい先ほども町に行  
こうと つまりサボりか していたため凧の堪忍袋の尾が切れたか  
ら、が真相のようだ…俺は兵に他の者に心配する必要は無い事を伝  
えるように言い、沙和達を強制的に復活させて話を聞くと…

「沙和、真桜、お前ら明日までに凧の分も片付けろ、出来なかつた  
ら明後日から城から戦以外で出るのを禁止する。それと来月の給金  
一割五分減だ。凧、お前の気持ちも分かるが部屋を破壊するな…来  
月の給金一割減だ、いいな」

「分かりました」

「了解なの〜」

「分かったで…」

「覇気をにじませたので流石に反抗する気は無いようだ…元々させない為に放ったんだからな…慣れられん方法も多少考えるか…仕事終えたら」

「では俺も政務に戻る。何か分からん事があつたらこい、近くには陽里も明里もいるからそこでも良い。あいつらは優秀だしな」

「分かりました」

「そう言つて俺も戻つて政務を再開したが…やはりあいつら量減らしてるな、もう終わったから、ちよつと行つてみるか」

「陽里、明里」

「龍鳳さん」

「どうしたんですか？」

「いや、意外と仕事が少なかつたからここでほぼ処理しているのかと思つたんだが…」

「私達じゃなくて紫苑さんですよ」

「本当か？ならちよつと行つてみるか」

「でもそれでも龍鳳さんとあまり量変わらないんですよ」

「そうなのか？ならその理由もあわせて聞いてくるか」

というわけで俺は紫苑のいる部屋へと移動するとまだ仕事をしている紫苑がいた

「紫苑、まだ仕事中か？」

「ああ、御館様ですか。何用ですか？」

「俺の仕事の量が少ないからどうしてなのか聞きたくてな」

「あら、そんなことですか…実は私の事情を知った文官たちが頑張ってくれてまして、そのままだったのですよ」

「なるほどな…夕方ぐらいには終わってるのか？」

「ええ、全員」

「そうか…給金とかは？」

「元の通りで満足していました…」

「そうか、ならもうちょい国庫を潤わせる方法を考えたほうが良いな」

「確かにそうですね…今ある兵糧を売り買いするだけじゃまだ足りないですからね」

「ああ、それから」お母さん「お？」

「璃々、まだお仕事終わって無いからもうちよつと待ってて」

「え〜」

「なら俺が面倒を見てようか？」

「良いのですか？」

「紫苑のおかげで仕事量が減ってるんだ…この位しても罰は当たらんぞ」

「そうですか…ではお願いします」

「分かった。璃々ちゃん、どこ行くところか？」

「町に行きたい…！」

「なら行くか」

「気をつけてくださいね〜」

璃々ちゃんを連れて町へと来た俺…紫苑の頃も善政で俺の時もそうだが、俺の組織した警備隊により犯罪がさらに減少したのでほとんど商人とかが流れてくる。それに農具のほうも真桜のおかげで原案しかなかったものが試作品として作ったのに完成品と遜色が無かったためすぐに農民に渡したりした

他にもここの料理で再現できるものを極力再現すると町の料理人達が飛びついてきて、既に幾つか町に並んでいる

また最近では城壁の防御力も上げようか考えているがどうせしばらくしたら離れる気がしたから大体の砦とかと同じぐらいの防御力にするにとどめた

そんなこんなしているうちにさらに年月は過ぎ去っていき…遂に朝廷と言つか十常侍も何進も重い腰を上げ、黄巾党の討伐命令を出したのだ…これから始まるな…乱世が…

俺の手の届く範囲が俺の国…だから必ず守ってみせる！！そう城壁の上で町を見ながら決意した

## 第九話 仇と小猿に（後書き）

作：孫策達の出番少なかったかな？

鳳：まだ良いんじゃない？

龍：前回のガチ百合霸王様より俺は孫策のほうが好きだな

作：黄蓋もだそうか迷ったけど…袁術の下にいるんだから無理だろうと思いき周瑜だけにしました

鳳：周瑜の病はどうするんだ？

龍：よくあるように華佗だろう

作：そっちについてももう大丈夫。ただ袁術は露骨だったかなとちょっと後悔

鳳：まあ子供だから大丈夫だろう、と俺は開き直ってる

龍：璃々ちゃんにもなつかれたな…

作：紫苑とも仲良くなったし…次回から黄巾討伐編に入ります

鳳：ちなみに紫苑、凧、沙和、真桜にも俺の秘密は教えてあるぜ

龍：そういえば本文中に無かったな…てかここで言うのもどうよ

作：現在で知っているのは珀武軍（十人）、董宅軍（六人）、劉弁、

劉協、桃香、桂花、白蓮、朱里に雛里、後は盧植水鏡両先生だけか  
…全部で二十五人

鳳：全部で五十人以上…ちなみにこの中でフラグたってる人数は？

龍：え〜と…多分十六人かな…

作：沙和、真桜、紫苑はまだ立てて無いからね、半分しか

鳳・龍：いやそれでも早いつて

朱：はわわ、誤字脱字報告に感想、意見待ってましゅ！！…咬んじ  
やった…後批判は極力やめてくださいなね！！…また咬んじやった

第十話 黄天の終焉…かな？（前書き）

作：タイトルのつけ方がどう考えても一定じゃない事に気づいた

鳳：いまさら漢バリバリだな

龍：これはアニメ沿いじゃないと無いからな

作：アニメ沿いか…作ろうかな？

鳳・龍：無理だろ

作：乙女大乱は全話見たぞ！！

鳳・龍：最初から全部見るよ

作：リリなのほうはまたとまるかも

鳳・龍：お前本当に良い加減にしろよ！！

## 第十話 黄天の終焉…かな？

黄巾本隊討伐の勅命後、俺達は本隊がいるところに向かってまっすぐに進んだ…何せ居場所わかつてるからね。途中で妨害もあつたが全て山賊まがいの連中であつたため即座に叩き潰した

「しかし多いですね…何の恨みがあるんでしょうか？」

「自分達の食い扶持が無くなるという事位分かる頭があつたという事だ、械那」

話しかけてきたのは黄月英、真名は械那だ。見つけてきたのは真桜、町に出て機械からくりの部品とかを探していたら偶然会い、意気投合し、更に械那が俺の事を知って仕えたいと言う事で今こうしている…のだが唯一の欠点がある…それは

「早く着いて使いたいですよ！！新しく作つた衛車！！」

この実験好き(?)なところだ…人に変な影響のある薬とかはまだ作っていないが俺の過去(第六話参照)を知って作ろうとしているところがある…まずは農耕具や連弩に火薬壺、虎戦車、木牛流馬といったのが完成してからと言っているのだが…

「それに連弩も火薬壺も虎戦車も！！木牛流馬はこの様子だとかかなり良さそうですしね」

ほぼ完成の域に至っている…仲間に入れて半年でここまで…このままだとこの時代より先にあるものとかガンガン作りそうだ…一応俺が消えるとかそういうことはないが流石に不安だ…

「贅沢を言えば木牛流馬一台で兵士二人分の一日の食料を運べるようにしたいな…後荷車ももう少し改良して欲しいな」

「良いんですか…!!（キラキラ）」

「いや〜嬉しいな〜」

言うまでもなくする気だったか…まあ俺としても糧食の心配が小さくなるのは良いことだから良いか

「といっても衛車以外は使う予定は無いぞ、あっても火薬壺ぐらいだ」

「ええ〜〜」

「何でや〜」

「裏工作はしてあるからな…何人が裏切ってこっち側に来るだろう…最善の状態だと衛車すら必要なくなると言う状況になるな」

「そんな〜〜」

「他勢力にばれんようバラバラにして持ってきた意味もなくなるやん」

「そうしたのは敵にばれないかどうか確認するためのものだ…糧食隊に混ぜたのもそのためだ」

「せつかく戦場でも組み立てたり出来るかと思ったのに〜〜」

「せやで〜隊長〜」

「仕方があるまい…賊とはいえ元は民…俺が守りたい存在なのだ…彼らのうち土地さえあればやり直そうとする者達にはそういった所を用意してやれば良いんだしな」

「龍鳳さん、もうすぐ集合場所につきます」

「そうか…陽里、械那の指揮の下天幕と防柵を組み立てておけ。明里、彩燐、お前達は俺と一緒に軍議に出るぞ」

『御意』

今回連れてきたのは既に出てきた明里、陽里、彩燐、真桜、械那に加え凧と優優の俺を含めた八人。清、双花、沙和、紫苑の四人には残ってもらった。残ってもらった理由は紫苑は璃々、清と沙和と双花は錬兵だ…今回はこれまでずっと率いてきた兵六千に入ってすぐ徴兵した五千を加えた一万一千が俺達の全兵力だが、持ってきた糧食の量は二万の兵士が半月は過ごしていける…加えて十人単位で調練代わりに狩りを行わせ、兎や野草を採らせてるが…凧が行った時に熊を獲ってきて全員の度肝を抜いた事もあったな…

「いい加減現実逃避してないで軍議の状況を見てくだしやい!!……かんじゃった」

「いや、これ見て真面目にやろうとしている奴らが凄いや」

軍議が行われている天幕に近づいたら大急ぎで帰りたくなる高笑いがか聞こえてきたため現実逃避をしたのに…

「なあ明里、彩燐、俺の給金から特別手当出すから変わりに二人だけで行ってきてくれないか？」

「いやですよ！！あんなの居る所に行行って！！ある意味最悪の拷問じゃないですか！！」

「主君が行かなくてどうするんでしゅか！！……うう」

「あれって袁家の馬鹿だろ？何進の女郎も余り会いたくないしな……仕方ない……無理やりだまらさ「龍鳳さん！！」「桃香！！」」

「お久しぶりです！！」

「この事を聞いて？」

「はい、それと……」

「桂花！！」

「……………」

「（小声で）一体どうしたんだ？」

「（小声で）何か男性に対して嫌な事があったみたいですよ……龍鳳さんはそんなことないと思っててもどこかやりきれなく、嫌われるのもいやと言う状況感じです」

「（小声で）そうか……桂花」

「（ビクッ！！）」

「何があったか俺は知らないし、聞くつもりもない…だが、俺はお前がこうなった原因になった事をするつもりはない…それだけは信じてくれ…そして、もう一度お前の笑顔を見たい」

「あの…実は…」

桂花がポツリポツリと語りだす…話し終わるか否かというところで桃香、明里、彩燐の三人が桂花を抱きしめる…

「ひどい事思い出せちゃって、ごめんね」

「絶対大丈夫です、龍鳳さんはそんなことしません」

「はい、そんなことする人でしたらもうここにいる人は皆そんな事されてますよ」

「……桂花、これからはどうするんだ？」

「私は兄上の下で働いて良いのですか？」

「俺の方は太守になってから何時来てくれるのかと待ってたんだが」

「私は？」

「お前の事だからこの期に合流する気だったんだろっ？」

「ありゃ、ばれてた」

「そちらの軍の軍勢は？」

「大体六千人かな？」

「でしたら後で率いて私達のところに来てください、手配します」

「ありがとうございます」

「で、いい加減行きませんか？」

「ちっ…忘れてくれれば良かったものを」

「さっきからあそこで曹操さんが睨んでるんですよ」

そうして見ると確かに仁王立ちしてこっちを見てるが…

「桃香、そっちの軍の将と軍師は？」

「えつとね、関羽と張飛、趙雲さんが将で、軍師は孔明ちゃんと鳳統ちゃんだよ」

「分かった、桂花はここまで一緒に来ただけか？」

「うん」

「なら桂花、このことを桃香の軍に伝えてくれるか？」

「はい、大丈夫です」

「なら軍議に行くか…やりたくない事もついでにやってな」

そうしてようやく俺達は軍議に向かう…その時に平行して俺は『覇気』を後ろに居る明里、桃香、彩燐以外を威圧するように撒き散らす…その瞬間…木々が揺れ、天幕も揺れ動く

俺はそのまま天幕へと歩き出す…この量はちよつと多いらしく流石の曹操殿も少し汗が浮かんでいる…

「あなた…それだけの覇気出せたのね」

「早く行かねばならぬだろう…正直今すぐ帰りたい。黙らせるために覇気出したのに全く答えちゃいないのだからな」

「馬鹿だから効かないのかもね」

「…桃香、俺の武器持ってきてくれ。彩燐、明里、俺が切りかかろうとしたらとりあえず止めてくれ」

『（とりあえずなんだ……）』

そうして俺達が天幕に入ると既に諸侯は勢ぞろいしていた

「遅いぞ、雷將軍」

ちなみに覇気は効果が無いという事で既にやめている…そして俺に話しかけてきたのは今回の総大将である何進大將軍だ…他には袁紹、袁術、孫策、曹操、董卓（といっても参加しているのは呂布）に公孫讚の全七軍、総兵力は約十万…とは言っても俺の軍だけでどうにかなるんだけどな

「申し訳ありません、準備を万全にしていたら遅れました」

「まあ良い…その分、働いてくれるのじゃろう」

「お望みとあらば、我軍が先鋒を務めましようか？」

場の空気が一変する…といっても袁家だけが驚いており、他のところは「やっぱり」という感じだが…

「うむ、では頼むぞ」

「御意、それと」

「何じゃ？」

「敵軍の降兵、及び捕虜や慰み者として捕まっていたであろう女性が居た場合、我々だけで取り扱ってもよろしいですか？」

つまりは降兵、捕虜（居ないだろうが）、女性、どれも全部俺の軍で保護して後の身振りも決めさせる、そう言外に言ったということとを分かっているのはやはり馬鹿ども以外か…何進も気づいてなさそうだし

「構わん、妾はそういう面倒くさいことは嫌いじゃ。主が先鋒、そしてそこで捕らえたり保護した者たちはおぬしが自由に処断すると良い」

「ありがとござん、ん」どうした？恋？」

「月と詠から」

「え〜と、何々………何進將軍」

「何じゃ？」

「呂布將軍はここにいる間我が軍と共に行動させて欲しいとのことです」

「構わん、好きにせい」

「分かりました。では準備があるので失礼します。明里、彩燐、桃香、恋、行くぞ」

そうして俺達は一礼して天幕から去っていく…しかし恋のときは見ものだったな…全員が口をあんどりと空けてたんだからな…

んで戻ってきた俺達の陣地の方からなにやら言い争っているような声が聞こえてくる…

「この軍に降るといふのか!?!」

「だから最初からほぼこの軍のようなものだったのよ!?!桃香は最初からこの軍に加わるつもりだったのだから!?!」

「なんでなのだ〜納得いかないのだ〜!?!」

「はわわ…愛紗ちゃんも鈴々ちゃんも落ち着いてくだしやい!?!…かんじゃいまひた」

「しかしあやつらの気持ちは分からんでもない…」

「そうですが珀武軍、大将は雷將軍・珀麒麟さん、知らぬ人も居ない大きな軍なんですよ」

「そんなことは分かっている!!」

「じゃあ何が不満なのよ!!」

「何も知らない奴の軍で戦いたくなんかないのだ!!」

「どうやら争いの原因は俺らしい…仕方ない」

「お前達、俺が珀麒麟だ」

「龍鳳さん!!」

「!!??」

「お前達はお前達の主君の決定に逆らうのか?」

「……」

「沈黙は肯定と取るぞ。それと理由は俺が新たな主君として窺わしいのか?それとも…」

「違う…私は桃香様を王としたいのだ!!」

「ほう…確かに桃香は上に立つ力がある…だが当の本人がそうなりたがってないんだぞ」

「そつだよ、愛紗ちゃん」

「桃香様!?!しかし…」

「それに言ったよね、私は最初から人に仕える気だつて」

「ですが…しかし」

「お兄ちゃんが珀麒麟なのだ?」

「ああ」

「強いのですか?」

「龍…強い…恋も…勝ったことない」

『!?!』

飛將軍・呂奉先が勝った事無いというのは流石に驚いてるな…まあ仙人モードと写輪眼併用しないとやはり勝つことはできんだろう…

「ならば、試させてもらってもよろしいかな?」

「構わない…なんなら君達全員でかかってくると良い…出陣前だが、君達が戦闘に参加できなくても大きく支障は無いだろうしな」

「!?!」

そうして俺は黒髪、赤髪、青髪の子と戦う事になったが…俺は気づいていなかった…この先の危険を…そして…『真の敵』の正体を

⋮

第十話 黄天の終焉…かな？（後書き）

作：黄巾討伐、まずは序章？

鳳：…どういふ感じで着てるんだ？

龍：まさか呂布は一人じゃないよな？

作：呂布は一人で三万討つたと言われてるし、龍鳳が来るという情報から詠が一人で良いと決めただ

鳳：いや、マジで一人かい

龍：ちなみに呂布の現在の強さは？

作：えつとね、全体でいうとこんな感じ、武官だけで、今まで出てきてる人だけな

龍鳳>恋>>>彩燐、優優、双花、清、霞、幸>桃香、紫苑、凧、  
沙和、真桜、孫策>白連、関羽、張飛、趙雲、夏侯惇、夏侯淵、曹操

鳳：桃香つよ！！史実だと義弟達より弱かったのに！！

龍：お前が原因だろうに…ちなみのその事実を知ってるのは？

作：龍鳳と朱里、雛里の三人、気づいてるのは恋

鳳：…てか恋と俺の二人組みに今出て来たの全員で挑んで勝てるのか？

龍：勝てない勝てない、阿吽の呼吸で動くって聞いているし

作：恋と龍鳳の組で恐らく十万の敵は壊滅できます

鳳・龍：一人当たり五万！？てか強すぎ！！

作：今回は戦闘とまだ準備段階です

鳳：裏工作の結果まだもんな

龍：楽しみにしてくれ

朱：誤字脱字報告に意見・感想とか待ってましゅ！うう…：かんじゃいまひた…：それと自分もらって嫌な気持ちになるものは書かないでください！…うう…：またかんじゃいまひた…

第十一話 黄巾終焉…ってまだかよ!!

「さて、三人とも準備は良いか？」

「無論だ!！」

「いつでもいいのだ!！」

「ふっ…」

俺が仕えるべき主にたるかどうか腕試しすると言ったことになった俺と関羽、張飛、趙雲の三人。しかし実力は気で多少分かるのだが…桃香と同じぐらいか少し下ってところか…

「桃香と一緒に戦場に出て敵を殺した事はあるのか？」

「桃香様は我らが旗、戦場に出ても敵を倒したことはありません」

「桃香お姉ちゃんは弱そうだからいつも皆で守っているのだ!！」

疑問に思っただけでチラリと桃香のほうを見ると首をゆっくり横に振っていた…どうやら関羽達と会ってからは出て最前線には行ってないか…まあ外見上強そうには見えないからな、朱里も雛里もちよつと呆れてんぞ…あ、趙雲も見えない位置に居るから溜息ついてら…分かってないのは関羽と張飛か…って義妹二人かよ

「趙雲はどう思っている」

「正直に言ってよろしいので?」

「もちろんさ…恐らく武官で桃香の実力を正確に測っているのは君だけだ」

「では…恐らく桃香様と全力で戦ったら負けるでしょうな」

「なに（えっ）！！」

「そして鍛えられたのは雷將軍殿…しかも桃香様だけでなく朱里、雛里、それに荀？殿もですな」

「そこまで気づかれていたとはな…だがそうだと知ってなぜ告げなかった？」

「そのほうが面白そうでしたのでな」

「（仲間個性的すぎだろ）…だが俺が桃香より劣っていると思うか？」

「正直に申しますと、全く勝てる気がしませぬ」

「そうか」

「私からも質問してよろしいですか？」

「俺の理想は理不尽に虐げられるものの居ない世界…夢物語と思われても構わないし、矛盾にも気がついて…しかし、それが理想なのだ…その世に近づけるために武が必要ならば俺は振るう」

「そうですか…」

すると趙雲は構えをとき、桃香たちの下へ向かう

「星、どうしたのだ」

「なに、桃香様の理想と殆ど変わらぬし、桃香様が雷將軍に仕える、ならば後は戦場で見ればよいと思ったただけだ」

「（多少現実家か…いいな）わかった、関羽、張飛、お前達はどこうする？」

「決まっておろう！！」

「お前をぶちのめして逆に降伏させてやるのだ！！」

「「「「「（無理だつて）」「「「「「

「……お前ら星の言ってたこと聞いてたか？」

「「嘘に決まっておろう（るのだ）！！」「」

もう良いや

「では…行くぞ…！！」

「始め…！！」

「うおおおっ…！！」

「うじやあああっ…！！」

「甘い」

振りかぶって大上段で来るが俺は半身引いて地面に交差して叩きつけた二人の武器の交点の部分を右足で押さえる

「どうした、もう終わりか？」

「くっ…」

「ぬ〜」

「ああ、すまん、その状態では無理だったな…そら！！」

俺は左足で下から蹴り上げると持ち上げようとしていた力も加わったため大きく隙ができ、それを見逃すわけも無く…

「ふん！！はあっ！！」

「がっ！！！！」

「にゃ！！」

関羽は腹に、張飛には右肩に蹴りを叩き込む…威力は抑えたと思  
うんだが…

「見事に気絶してんな〜」

「愛紗ちゃんはしょうがないよ、鳩尾に入ってたもん」

「はわわ…相変わらず凄いです」

「あわわ…鈴々ちゃん、大丈夫ですか」

「まさか…一撃とは」

「あなたはと思った？」

「あの二人…弱い」

「龍鳳さん、呂布さんを一撃で気絶させたこともありますから」

「それは真か!？」

「(コク)」

「とはいっても全力でしたから…呂布さんも相当お強いですね」

「多分あなたたち三人に桃香加えてギリギリってところかしら」

「それでも勝つのは恋だろうな…勝てる要素が見当たらん」

「そうなの？兄上」

「呂布は前にあったとき以上の強さだ…桃香も強くなってるが元々が違いすぎる…俺と会う前だったら四対一なら勝てたってところだな」

「あ、愛紗ちゃんと鈴々ちゃん気がついたよ」

「結構早いな」

「あれから気での医療術も学んだんだよ」

「そいつは心強いな、俺は攻撃しか出来ない…出来ん事は無いが戦場での自分への応急処置ぐらいだ」

「えへへ」

「ここで話すのもなんだな、俺達の本陣に来てくれってか、一緒に行くぞ」

そうして俺達の本陣の本陣内では既に他の将達全員がそろっていた

「でははじめようか…まずは軍議で決まった事だが先鋒は俺達、捕らえたり保護した連中は好きにして良いとの許可ももらったから、例の作戦通りいける。向こうからは？」

「はい、向こうの兵糧を管理しているもの達を騙して切り詰めさせてるそうぞ、かなりあるそうぞです」

「ではそれは乗り込んだら彩燐と優優、お前達の部隊で全部確保しろ」

「「御意」」

「そして門番のほうは残念ながら…ですが中にいる兵のうち半分はこちらにつきましました、判別するために我が軍の親衛隊がつけている赤布を右か左の二の腕につけるよう指示も出しました」

「分かった、ならここにいる全員から各兵に伝達、腕に赤布のある奴には攻撃禁止、とな。それと械那、真桜、すぐに衛車の準備を。他のは追って通達する」

「「御意や（やった）！！」」

「それと新しく仲間になった劉備玄德、関羽雲長、張飛翼徳、趙雲子龍、諸葛亮孔明、鳳統士元、荀？文若だ」

「劉備玄德です、真名は桃香なので、そう呼んでください」

「趙子龍だ。私の真名は星だ。これからよろしく頼む」

「諸葛孔明です。雛里ちゃん、陽里ちゃん、明里ちゃんとは同じ私塾の出身で、真名は朱里です。これからよろしくお願いしましゅ！……うううかんじやった」

「鳳士元です。朱里ちゃんと同じく陽里ちゃん、明里ちゃんとは同じ私塾でした。真名は雛里です。私もこれからよろしくお願いしましゅ！！……ううう私もかんじやった」

「荀文若よ。桃香とは同じ私塾出身よ。真名は桂花。よろしく」

「ほら、愛紗ちゃんも鈴々ちゃんも自己紹介しなよ」

「「……………」」

「まあ時間が無いから構わん。これから配置を発表する。まず前線で城門をぶち壊し、後方援護の部隊は械那・真桜率いる工作隊及び凧率いる歩兵部隊」

「御意」

「その後敵の及び兵糧を確保するのは先ほどの言った様彩燐、優優、そして捕虜及び降兵は桃香と星、雛里で頼む」

「御意」

「そしてこの作戦の肝の部隊は俺が率いる、共に来るのは関羽と張飛、それと俺の親衛隊だ」

『！』

この采配には驚いただろうな…なにせ俺に忠誠というか真名を預けて無い奴を共にするんだからな

「これには理由がある…が、それはこれが全て終わった後だ。まずはこれを裏で操ってる奴を見つけ出し、倒す。それと本陣は筆頭は明里と恋、その補佐を朱里と陽里、桂花」

「御意（ん）」

「いいか、これが終われば一応乱は終わる。元々やつらの中で外道行為をしているのはそれを隠れ蓑にしようとしている連中、もしそっういう奴らを見かけても赤布をしている限り殺すな…いいな」

「つまりそれっばかったら二度手間をかける、という事ですね」

「とはいっても彼らがそのような輩に声はかけないでしょう…」

「優優の言つとおりだな、とにかく、配置は以上、後は大將軍の攻撃命令を待つだけにしておけ、良いな!!」

『御意』

そうして全員が天幕から去っていき、俺も親衛隊に告げると兵から孫策と曹操が来たと報告を聞き、天幕に案内するよう言つて俺も天幕に戻ると、すぐに兵が二人を伴つて現れた

「ご苦労、下がつて良いぞ」で、明日の先鋒に加えろとか下れ、だったら帰つて母親の乳でも飲んでろ、邪魔だ」

「あら、いきなり邪険に扱うわね」

「ほんとね」

「おおっぴらな偵察に出す物は何も無い」

「そう…ま、要求はさっきあなたが言ったものじゃないわ」

「同盟か？正直に言え、俺の軍の強さの秘密が知りたいと」

「そこまでばれてたのね」

「もっと言つてやろうか？」

「あら、もしかして全部気づいてるの？私達の目的」

「気づかんのは袁家の馬鹿…といつても袁術のほうは何か考えてたが…まああんまり気にするような事じゃないな。白ね…じゃねえ、

公孫讚は日和見つてところかな」

「そうよ。あなたのところは軍だけじゃなく治安もいい、洛陽や長安と比べても遜色ないって報告に拳がってるもの」

「まあ、不可侵程度なら結んでやるが」

「それ以上は望まない、ということね」

「当然だ。俺から破る時は開戦の一週間前にはその午を届ける、それで良いか？」

「こつちもその条件で良いわ。一週間前に破と宣戦布告をするわ」

「こつちもよ」

「そうか、ならもう良いだろう…入り口まで送ってやるっ」

「あら、そこまでしてくれるの？」

「俺はお前らをかってる…しかし、俺の軍は賊崩れもいる…お前達に恨みを持っている奴が殺そうとする可能性もあるだろうからその護衛だ」

「あら、雷將軍自らが護衛なんて、うれしい事もあるのね」

「ま、俺に襲い掛かる馬鹿は居ないからな…前は居ただけどあきらめさせたし」

「へえ…」

その後は簡単な雑談をしながら俺の陣の門前に来ると

「そういえばあなた、『天の御遣い』のうわさは知ってるかしら」

「ああ、冀州：袁の最馬鹿が保護した餓鬼のことだろ、報告には聞いているがする前と後で変わったことといったらその馬鹿がいたく気に入って第一の側近にしたことと、自分の婚約者にしたって事ぐらいだろう？」

「ええ、それで袁術は大荒れよ」

「お前も大変だなあ…何か変わったことでも？」

「ええ、実は最近そいつが討伐に出ると冬でもないのに氷が出来たり、いきなり炎が出たりするって言うのよ」

「私も聞いたわ…何でも刀から氷の龍を出したり、炎を出したりするって」

「へえ…面白い情報を聞いたな…情報量代わりにあとで治安対策の政策を同じものだが渡すよ。もし他にもあったら教えてくれ…今ままで放って置いてたからな」

「無警戒って…まあそれもそうよね…邪魔したわね」

「それじゃね〜」

「ああ…」

ようやく来たか…刀のほうも分かった、氷輪丸と流刃若火か…負けはしないだろうが今のままだと良いところ引き分けだろう…もっと鍛えないとな…それとお礼の品、早く用意しとくか

俺が例の品を両軍に送り届けた後、大將軍から攻撃決行は明朝との連絡を聞き、全員に通達…ああ、楽しみだ

第十一話 黄巾終焉…ってまだかよ!! (後書き)

雑：誤字脱字報告に意見。感想とかいろいろ待てましゅ!!…うっ、  
かんじゃった

第十二話 黄巾党、壊滅すること（前書き）

作：今回からタイトルはアニメ風にしてみたよ！！

鳳：これならまだ楽しそうだな

龍：というか劉備の配置おかしくない？

作：（前話を読んで）確かにな、ちよつと変えるか

鳳・龍：えらくあっさりだな、おい

作：OVA2結構面白かつたし、三国伝要素も入れたいからね

鳳・龍：じゃあ最初からそう書けよ！！

## 第十二話 黄巾党、壊滅するの二と

明朝…俺達の軍は既に展開を終了し、後は命令を待つばかりとなつた…

あの後編成を見直し、軍師陣と相談した結果桃香は俺、関羽、張飛と一緒にすることになり、そこには恋を入れた…まあ張三兄弟の相手をさせるにちょうど良いと思ったので特に反対する事は無い…

「で、まだなのか？」

「完全に日が昇っちゃったらあまりよくないよね」

「まああいつらは鶏の鳴き声の変わりに衛車の激突音で目え覚ますだろうがな」

「……………」

ん？桃香の顔が青ざめてる…あ、そうか。私塾時代起きるのが遅いと俺が容赦なく鍋鳴らしとか食らわせてたからか

- 鍋鳴らし、それは字の如く鍋の底をお玉等で叩いて鳴らす事…威力は絶大でくらった者は一刻ほど物事が聞きづらくなる by 作者

ちなみにここにいる連中の内、食らった事無いのは関羽、張飛、星、凧の四人…後は留守番してる紫苑と璃々ぐらいか…他の連中は何だかんだで最低一回は食らってるし、回数重ねることに俺も容赦しなくなってくから必然的になくなるんだよな…お

「伝令！！何進將軍から攻撃命令が出ました」

「ようやくか…攻撃開始の銅鑼を鳴らせ！！攻撃開始だ！！」

『御意！！！！』

銅鑼が鳴り、その後すぐに械那、真桜特製衛車が敵砦の門を攻撃し

ガオオオンツ！！

物凄い音が響いた…この威力は予想しておらず、本人達も驚いているのだらう、動きが止まって…いや、俯いて肩が震えている…ありや恐らく

「やったわ！！想像以上の威力よ！！」

「せやせや！！これもっと改良してどんな門でも一撃で壊せるようにしたいわ！！」

…戦場でする会話じゃない…それ以前に兵達は音の衝撃から未だに立ち直っていない…前衛の工兵陣を除いて…しかも一撃でもはや門は半壊し、門としての機能は無い…そこに

バツコオオン！！

二発目がぶち込まれ門が『壊れる』…文字通りに、見事に、残っているのは蝶番の周りだけ、それ以外の部分は無い…って風達まだ呆けてるじゃないか！！

「前衛！！中軍！！攻撃再開！！賊どもが呆けている隙に攻め入れ

「!!手早く制圧するのだ!!」

俺の指示で呆然とした状態だったのにすぐに動き出し、俺達もそれに連なって砦に入り、張三兄弟を探していると、明らかにおかしい三人組が居た…こいつらか

「お前達が張三兄弟か？」

「その通りだ」

「手配書そのままの容姿だな（こっちが裏工作したんだが）」

実際は張三『姉妹』なのだが彼女達を保護するために陰、影、翳の三人に言ってこいつらをそのかし、三『兄弟』にして彼女達を保護しやすくしたのだ…そこ、あくどいとか言うなよ、約束を守るためなんだ…彼女達はいろいろ使えるしな、主に金策とか金策とか金策とか、後徴兵

「お前達は何者だ!!」

「雷將軍・珀麒麟」

「その部下、劉玄德!!」

「その義妹、関雲長!!」

「同じく、張翼徳なのだ!!」

「ら、雷將軍!!??」

「飛將軍と共に五万の軍勢を蹴散らしたって言うあの!?!」

「五万じゃない、七万だ」

「……………えっ?!?!?!」「……………」

実際は六万五千で、こちらも三万ほど率いてたのだが…俺と恋が先頭で突っ込み、攪乱して混乱したところを兵達が明里、音々音の指揮の下倒したって言うのが真相だが…見ていた者達からすればああいう風を感じるんだろっな…

「さあ、どうす…むっ!!桃香、関羽、張飛、ここは任せるぞ」

「しまった!!」

「あっ!!」

俺が周りに他に誰か居ないか探すと何人かが桃髪の女性、左側で髪を止めた女性、眼鏡をかけた女性をどこかに連れて行くこうとしているのが見えた

「龍鳳さん、あの子達を!!」

「分かっている!!」

「行かせん!!」

「邪魔はさせません!!行くよ、愛紗ちゃん、鈴々ちゃん!!」

「はい!!」

「おうなのだ!!」

桃香の言う事は聞く、か…俺と桂花の関係と似てるな

桂花は龍鳳が信用かつ信頼している人の言う事は聞きますが、それ以外の人の言う事は聞かずに毒舌を放ちまくります（男女関係なし）by作者

判断基準は龍鳳が真名で呼んでるか否かですby作者

横目で戦闘に入ったのを確認して俺は三人の女性の下へと向かった

Side Change

Side 桃香

龍鳳さんにあそこに居る女性達を助けてもらうためにも、私達が張三兄弟を抑え、ううん、仕留めなきゃ!!

「愛紗ちゃんは右側、鈴々ちゃんは左側の人をお願い!!」

「はっ…しかし、大丈夫ですか?」

「桃香お姉ちゃん、あんまり強そうじゃないのだ」

「人を見かけで判断しちゃだめ、いつもそう言ってるじゃない」

「……………分かりました」

「危なくなったらいつでも言うのだ!!」

「愛紗ちゃんと鈴々ちゃんもね!!」

そう言つと私は張三兄弟の真ん中、恐らく張角さんだろう、に靖せい  
王伝家を構えて向かつていく

切落、左斬上、胴と三連撃を出すけど防がれる…普通にやっちや  
うとやっぱりまだだめか…なら…!

私は気を体に充満させて、体の細部に行渡らせ、そこから攻撃を  
再び繰り出していく

この状態では一撃一撃の威力は先ほどの倍にはなっているから、  
相手の人の顔はゆがんでいくけど…

「なめるなあ…!」

「うっ…でも…!」

相手の人はもう一つ武器を出してくる…どうやら二刀流だったみ  
たいだね、こういうとき戦場に出ても有名じゃないと嬉しいな

「龍帝剣…!」

「…!」

「二刀流なのはあなただけじゃない…!」

「くっ…」

「遅い…!」

動揺した事で動きが鈍る…そこを狙って斬撃を加えていく…そして相手は二刀流の利点を上手く生かせていない…隙が大きくなった…今だ!!

「星龍斬!!」

「なっ!!」

星の軌道で靖王伝家と龍帝剣を重ねて動かし、相手を切り裂き、首を切り落とす…

「「「兄者!!」」」

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、今だよ!!」

「はああ!!」

「つりやりや〜!!」

「敵将張角・張宝・張梁、劉玄德と」

「関雲長」

「張翼徳が討ち取ったのだ〜!!」

「勝ち鬨を上げて!!」

『おおおお!!』

「そしてもう戦っても無意味です!!大人しく降参してください!!」

「!

私がそういうと戦意が喪失したのか皆次々と武器を手放していく  
…これで終わり…かな

Side Change

Side 龍鳳

俺は本物の張三姉妹を無事保護していた

元々陰達に彼女達の側近のような事をしていた波才、馬元義、張曼成の三人をそそのかせて張三兄弟の名を名乗らせ、本人達はただ仲間などを集めるための道具にさせる、それなら文句はつけられないだろうからというものだ…ただ彼女達は今後本名が名乗れなくなってしまうが…

戦闘らしい戦闘も無かったな、偶然俺（が率いた部隊）と戦った事のある奴が護衛（？）だったので俺の顔を見ると二、三人いたが蜘蛛の子を散らす如く物凄い速度で全員逃げていった…

そして俺が雷將軍である事、陰達に頼まれて保護しに来た事を告げると簡単についてきてくれた…なんでも少し前に陰から手紙で俺が保護してくれる事を伝えておいてくれたようだ…手間が省けたし、追加給金の額ちゃんと考えないとな

それで今はその三人を連れて天幕に居るんだが…事情を知っている奴らはともかく、桃香と桂花の視線が痛く顔が怖い…そして星、その笑顔は『何かたくらんです』と宣言しているようなものだからやめたほうが良いぞ

「兄上、彼女達は誰なんですか」

「あいつらに良いように利用されてた子達だ。保護する事にした」

「どうしてですか？」

「そのことでしたら」

「私達から説明します」

明里、陽里が

- ・彼女達は旅芸人で歌で聞いた人を魅了する事ができた
  - ・それに目をつけた今回の首謀者が彼女達を拉致
  - ・さらに彼女達の名を奪い自らの隠れ蓑にしようとした
  - ・だけどそれは真実を知る者達を下したため俺の知るところとなった
  - ・そのため彼らと協力して助けて保護する事となった
- といった事を説明すると、桃香達の顔も元に戻っていく

「そういうことだったんだ」

「兄上らしいですね」

「まあ…で、君達はこれからどうする…ああ、もう名は名乗れない、張角、張宝、張梁は世間的に既に死んでいるからね」

「じゃあもう真名しか名乗れないの？」

「ではその名を言ってください」

「天和です」

「ちーは地和だよ」

「人和です」

「君達は旅芸人だったが、今回の乱で活動しても政府から危険視され、下手に活動するとかまる可能性がある」

「何で!!」

「君達を使って仲間を集めていた事は既に周知の事実となっているのだ、ゆえ、『もしかしたら』というので官軍が動く可能性は高い」

「そんなー、ちー達はただ楽しく歌ってただけなのにー」

「…すまん、皆。俺と彼女達だけを残して外に出てもらえるか」

「…わかりました、でも危険な事はしないでくださいね」

「善処するさ」

そうして全員が出て行ったところで俺は彼女達に知っていることを全て告げた…

・君達が大陸が欲しいと言ったことを拡大解釈して追っかけが蜂起したこと

・そして賊まがいのが増えてもそれをとめようとしなかった事

・更に無視して自分達の欲望のままに活動し続けた事

それら全てを…

「全部…知ってたんですね」

「元々周倉の奴との約束でも会ったしな」

「知ってるんですか!?!」

「俺の部下で、主に情報収集をやらせてる、後は今回みたいな攪乱だな」

「どーいうこと?」

「君達を確実に守るような事だな」

「彼らに私達の名を奪わせたのは私達を守るため、という事ですね」

「そつだ、運良く君達は官軍のほうには名しか知られていない。そこを逆手に取ったわけさ」

「すつごーい!?!」

「で、君達に提案がある」

「何ター?」

「これから暫くの間 大体一年ぐらいか 歌うことは出来ないが俺の庇護下で安全無事にすごし、しかも歌えるようになったら援助される道か、この後すぐ自分達だけでやり直すか、どっちを選ぶ?」

「そんなのやり直「姉さん待って」なに人和」

「…前者のほうは絶対なんですな?」

「付き人というか護衛もかねて影、廖化をつける、他にも条件は無  
いわけじゃないが、そこは最低限保障する」

「ならあなたの庇護下に入るほうを私は選びたいです」

「ちよつと人和!!なに考えてるのよ!!」

「そーだよ!!今すぐやり直そうよ!!」

「さつき言われたでしょう!!私達は警戒されてるの!!今すぐや  
つたら捕まるかもしれないのよ!!でもこの人の庇護下に入ればそ  
うならなくなるし、雷將軍って呼ばれてるんだから、他の人たちも  
下手に手出しはしてこない!!」

「でもでもこの人が裏切つたら!？」

「裏切るくらいなら周倉たちを仲間にしな、賊として処理した」

「ほら」

「姉さんはどうなの!?!今すぐやり直したいよね!!」

「……………」

「まあ、今すぐ決めろといったわけじゃない、それに明日か明後日  
には洛陽に向かう。帰り道の途中にあるんでな。そこまでに君たち  
三人で話し合って決めてくれ…誰か!!」

「終わりましたか?」

「一応わな、彼女達を天幕に」

「はい」

凧に連れられ去っていく…個人的には前者を選んで欲しいが…後者を選んだら洛陽でおいっていく…人和の奴は賢いから良いが上二人はだめだめだな…

さて、この選択が吉と出るか凶と出るか…それは天のみぞ知るか

## 第十二話 黄巾党、壊滅すること（後書き）

作：黄巾編一応終了！！

鳳：本編は終了か、この後はどうなるんだ

龍：複数人で劉備や荀？の時みたいなのをやるんじゃないか？

作：面子は優優、清、双花、彩燐、明里、陽里、紫苑 & a m p ; 璃々と自軍だけで七つ、そして董卓軍は恋と月、他に梅芳、桜蓮、後は朱里に雛里に白連…最低でも十四

鳳：絞ったほうが良いな…殿下達は抜こう

龍：再登場するまで一番長いからな

作：でも十二…ちょっと短めで四人ずつで行けば良いか

鳳：桃香達は入れないんだな

龍：もうやってるから除外されたんだろうな

作：時間があればちゃんと書きますよ

星：誤字脱字報告に意見・感想など待っておるぞ。ふむ、やはりメ  
ンマはいい

第十三話 龍鳳、新たな地位を得ること（前書き）

作：台本書きつてやっぱだめなのかな

鳳：誰が喋ってるのか分かり易いと言えば分かり易いが…

龍：まあ見栄えはあんまり良くないね

作：批判は二回…全部直すか

鳳：台詞量少ない会も多かったから手早くいけるんじゃないか？

龍：まあがんばれ

### 第十三話 龍鳳、新たな地位を得ること

「珀麒麟、貴殿を擁州州牧に任命する」

黄巾討伐して早二週間、全員連れて俺達は南軍に戻ってきた

張角達を打ち取ったのが大きく影響し、なおかつ霊帝が俺の事を梅芳、桜蓮の教師で心を虜にしている事も知っているのだろう…じやなきや本人たちが居るところに赴任しろとか言ってこないはずだ…多分…大丈夫だよな？

ちなみに朝廷からの使者は言うだけ言っただけ印を置くとさっさと帰っていった

また天和達だが洛陽までの道中で桃香達が会いに行き、事情を聞いた後説得したため、俺達に付いてくる事になった…決定したのは洛陽に着いて俺の人気というか通り名を聞き、恋が飛將軍というのを子つて決めたようだ…

それと関羽と張飛もあの戦いで俺の事を分かってくれたのか俺に真名を預けてくれた。

そして今は俺の配下の将、軍師を全員集めて事の次第を説明と俺自身のことを説明し終えたところだ

「まさか…」

「私も聞いたときびっくりしたけど事実だよ、愛紗ちゃん」

「はい、ですが、これだけの案件を見聞きすると逆にそつだと考えるほうが納得いくんです」

「そして主、擁州の州牧になったのですよね、これからはどうするのですか？」

「まずは引継ぎと引越しの準備、これは紫苑を中心にやってくれるか？」

「大丈夫です、ですが一つ問題が…」

「何だ？」

「この治安になれた後、民達が別の人の治安になれるのかという不安が…」

「それも俺は感じていたから…彩燐」

「はっ」

「この後書状を持って洛陽に行ってくれ。月達の助力をえて俺達が擁州に南郡の民達を連れて行く許可を取ってきてくれ」

「分かりました、お任せください」

「しかし、糧食のほうは大丈夫なのですか？」

「それに関しては問題ありません。前回の戦で奪ったのと元々集めていたものもあわせてもし全員付いてくるとしても一週間は持ちます」

「それに隊で持ち回りで行軍中に狩を行わせたりもしますから何とか持つはずです」

「しかし不安は尽きぬな…よし、ここに次に来る奴が最低限過ごせる分だけ残し、後は持ち運ぶぞ、金とかは全部糧食の購入に使え、それなら余裕も出来るはずだ」

「御意」

「軍部は優優、清、双花、警邏は凧と沙和、兵器系は械那と真桜、糧食は桂花、明里、陽里、政務は朱里、雛里、桃香、俺、愛紗と鈴々、星は紫苑と共に軍部、警邏、政務の手が足りてないところの手伝いか今まで率いていた軍をまとめておいてくれ」

「……………御意」……………

「……………」

「では解散、全員、頼むぞ」

結果としては準備から出立まで一月かかった…準備開始して二週間目の半ばで彩燐が許可をもらって帰ってきて、そのお礼の使者を立てせると同時に民達に高札を掲げて告知したら八割強から九割弱が付いてくる事になり、その護衛のための配置などに時間がかかったのだ

それから行くまでは何も問題は無かった…わけも無く、途中で将の実力を見せあう兼心労発散のための簡単な大会を開いたのだが…

今まで俺の鍛錬を受けていた連中の強さが半端なかった…四日に

一回という配分で行ったのだが、準決勝の時点で残っているのは基本的に彩燐、優優、双花、清で、時折凧と紫苑が誰かと変わるといった具合、沙和、真桜、械那はどちらかと言うと指揮型で自ら戦場に赴いても敵陣に切り込むことは少ないし、愛紗、鈴々、星の三人は入ったばかりだからな…でも凄く悔しそうにしていたためちゃんと手ほどきと鍛え方を教えた

手取り足取り教える必要もあつたため密着したら愛紗はかなり顔を真っ赤にしていたが…その時を偶然見た桃香、桂花、凧の顔が半端無く怖かつた…

加えて星はそれだからか…つたり弄つたりとしてきたから、逆に誘惑するようにしてやつたら凄く困惑していたな…自分でやるのは良いがやられるのには免疫が無いみたいだな

到着までは大体二週間半だったが、大きな問題は無かつたな…うん、なかつた。

出発して二日目に行った大会の後愛紗に修行をつけた後桂花、桃香、朱里、雛里、明里、陽里、優優、清、双花、彩燐、凧、紫苑が俺の眠っている天幕にこっそり忍び込んできた事なんて無い…つたらない

「と、おもつても無かつた事になりませんよ、主」

「心読むな、星…璃々ちゃんいなかったら毎日だつたんだぞ…」

そう、紫苑のいないところで璃々ちゃんを上手く買収（…）といつてもこの時代で作れるお菓子あげただけだ（…）して一緒に寝たから襲われるだけは避けられた…といつても翌朝璃々ちゃんをばさん

だ反対側に眠っていたが…まあそれぐらいなら別に良かったのだが…

「早く璃々ちゃん見たいな子が欲しいね、なんて言われた時はかなり動揺したけどな」

「まあ頑張ってください、としか言えませぬな」

「とは言っても今すぐは少し待って欲しいかな、まだ暫く戦は続くからな…だから子をなすのはそれが落ち着いてからだ」

「子をなす事自体はやぶさかではない、と？」

「無論だ…俺はこの時代に生きる人間だ…天の御遣いとやらとは違つてな、だからこそ自分に好意を持ってってくれる、愛してくれてる奴には答えたいのさ」

「では私の様な者や愛紗の様な焼餅焼きでもですか？」

「当然だ。お前はちよつと素直になれぬだけで、焼餅はいわば嫉妬、そしてそれは愛情の裏返しだからな…ちゃんと受け入れるさ」

「左様ですか…だそうだぞ、愛紗」

「……まことですか、龍鳳様…」

「ああ…しかし愛紗も星もかわいいな」

「「なっ！！」」

「自分では素直に聞けないから他人ひとを利用するところがな、愛紗は

星を、星は愛紗をな…」

「……………（赤面中）」

「そんな二人も個性的だから、俺は好きだな」

「主…」

「龍鳳様…」

「まあ俺は気が多くて桂花、桃香、朱里、雛里、明里、陽里、優優、姓、双花、彩燐、紫苑、凧にここにはいないが他にも五人ほどいる…それでも良いのか？」

ちなみにこんな事はさつき名を上げた者達にも、月、恋、梅芳、桜蓮、白連のことだが…前者四人に関しては知っているのはその場にいたもの達のみ…月と恋の事を言うのはまだ早いかな…

「私は構いませんで、英雄色を好むといたしますしな」

「私は…その…欲を言えば…自分だけを見て欲しいですが…」

「二人っきりの時はそのときいるやつだけを見るさ」

「本当…ですか？」

「ああ」

「でしたら…その…結構です」

「ただ…まだ我慢してくれるか？とにかく袁家の馬鹿どもが変な事はじめて、それが終わるまでな」

「確か…『反董卓連合』でしたか？」

「しかしあの呂布が従うお方ですから…優しい方だと思いますが…」

「俺はあったことがあるが、愛紗のいうとおり的人物だ…だが、いるところが悪い」

「洛陽…宦官ですな」

「それに先の大將軍、何進殿との権力争い」

「ああ、…といっても董卓自身はそんなのに興味はないし、打てる手は打ったが張襄という筆頭だけは手を出せなかった…それに」

「はい、靈帝の様態が良くないというのはもはや公然の秘密でした」

「だから崩御した、という情報と同時に動きがある…それまでに鍛えておけ」

「確かに、あの呂布と戦う事にもなりそうですからな」

「はい…！またご指導お願いします…！」

「分かっている。ただこれから先はこの新拠点、長安を洛陽並みにする必要があり、軍部も再編成をしなければならぬ…頼むぞ」

「」「はっ…！」

こうして俺達は拠点を長安にして、治安回復に区画整理に戸籍整理、更に農耕方法に加えてここだと五胡（匈奴・鮮卑・羯・？・羌）の対策…とはいっても意外と簡単そうなのは気のせいかな？

それにここには今皇太子妃がおられるから大変なんだよな…

ま、俺の仲間は誰も死なせないし、俺も死なない…絶対にな！！

### 第十三話 龍鳳、新たな地位を得ること（後書き）

作：なんか中途半端間がある

鳳：ならもうちよいかけよ！

龍：まあまあ、これからは？

作：拠点フェイズのようなのかいてから反董卓編

鳳：大筋は決まってるのか？

龍：呂布との対決は誰？

作：元々董卓軍勢の武将人は凶化済みだから多分龍鳳の軍以外は即蹴散らされる流れ、呂布は主人公が当てるか、劉三姉妹にするかちよっと迷ってる

鳳：愛紗と鈴々も魔改造か？

龍：現時点でどのくらいの強さなのさ

作：龍鳳の手ほどきを受けたら一日でかなり強くなったから、かなり好いてますし、兵も指令をしっかり聞いて手足のように動くから将三人はいたく感動してたね、それから強さは愛紗、鈴々も桃香には勝てるようになった

鳳：やっぱり自力の差？

龍・だろうな

作・そう…拠点フェイズ誰から行くのかな……………

愛・誤字脱字報告に意見・感想などいろいろ待ってます!!…!!面白くないとかつまらないとかはやめてくださいね!!…!!面白

### 幕間三 董卓陣営のお話（前書き）

作：ちよつと変化球でいつてみた

鳳：時期的はどのくらい？

龍：まあお前が洛陽去ってからじゃないか？

作：黄巾党を潰した時で洛陽発つて約半年だからね

鳳：これから暫く幕間が続くのか？

龍：董卓陣営が終わったから、後は旗揚げ時から付いてきてると劉備軍、三羽烏に紫苑か

作：形としては軍師で一つか二つ、武將で三つか四つ、それに涼州との話をやってから反董卓に行こうかと考えてます

鳳・龍：あくまで予定だから期待しないでくれよ、駄作者だし

作：お前ら俺を虐めてそんなに楽しいのかよ！！！！

鳳：それと今回は珍しく三人称だ

龍：楽しんでくれよ！！

### 幕間三 董卓陣営のお話

洛陽にある城の一画：そこをメガネをかけ、緑色の髪を二つに分けて三つ網にしている女性 名を賈馱、真名を詠という がなにがあつたのか、かなり取り乱した様子で走っていた

「月!!！」

「詠ちゃん、どうしたの？」

「医者を、洛陽一の医者を呼んで!!今すぐ!!！」

「ど、どうしたの!? さつき書物庫に行くって」

「そこに重病人がいたのよ!!！」

「ええ!!だ、誰!？」

「恋と幸と霞とねねよ!!！」

「ええええ!!！」

詠がやってきたのは彼女の主にして現在洛陽の治安を一手に引き受けている少女、董卓 真名を月 がいる部屋、そして詠の口から出たことには流石の月も驚いたようだ

「い、一体どんな状態なの?もしかしたら私達で対処できるかも…」

「僕達じゃ無理だよ!!！」

「と、とにかく現場を見ないと分からないよ…」

「月がそういうなら…」

結果として詠は月を伴って再び書物庫に向かう…途中で聞こえてくる声に気づく

「詠ちゃん、声が聞こえるんだけど」

「内容聞いたら月だって重病人だと絶対思うよ」

「内容？」

耳を済ませて聞く月…聞こえてきた内容は…

「孫子？」

「そう、しかもねねを筆頭に武官全員で読んでるんだよ!!これ絶対物凄く高い熱があるに違いないよ!!」

「詠ちゃん、知らないの？」

「え、月、どうして皆がこうしてるか知ってるの？」

「うん、龍鳳さんに勝つためだって」

「龍鳳に？あいつ、兵法も知ってるの？」

「兵を率いる以上基本は納めておくべきだ、って皆に言ってたんだ

よ。で、ねねちゃんもまだまだ未熟ってことを明里さんと陽里さんに思い知らされて、それで一から勉強し直してるんだよ」

「じ、じゃあ熱があるわけじゃ…」

「無いよ、詠ちゃん。そもそもあれは龍鳳さんが秘密を教えてください半年前からずっとやってるんだよ」

「嘘!」

「嘘じゃないよ、じゃないと皆が自分の分の書類を真面目にするわけないじゃない」

「そ、それもそうだけど…」

「それで私達も楽できたりしてるんだから良いじゃない」

「う、うん」

「それでね、詠ちゃん」

「な、なに…月…」

月からの気迫に詠が目に見えて脅えている…

「ちゃんと事情を知らないなんて…だめだよ、まずは本人達に聞かなくちゃ」

「う、うん」

「それをせずに城内を走り回って、そのうえ上司を引張りまわすなんて…」

「う、ごめんなさい…」

「じゃあ、これから皆に軍略を教えてあげてね、でもそれで本来のお仕事に滞ったら減給だけどね」

「わ、分かりました…」

「すぐ去っていく詠の背を見て、月は書物庫で勉強をしている恋、霞、幸、ねねのほうを見て微笑んで

「皆、頑張ってるね」

「そうやって自分仕事を再開するためにその場を去った…そしてその件の女性達は…」

「よし、これで今日の分は終わったな」

「せやな、ほならいつものいこか」

「ねね、準備」

「出ていますぞ…!」

「そうやってねねが出してきたのは色々書かれた紙を取り出す

「では、今日の分がちゃんと覚えているのか確認しますぞ…!」

彼女達が今からするのはいわゆる試験だ。しかも

「さっきやった分ではこれまでの八割は出来ていたな」

「半年…頑張った」

「正確に言や籠っちがおった一年前からやけどな」

「龍鳳殿達が居なかったらねね達はもつと弱かったです…ですが龍鳳殿達のおかげで更に強くなりました…ですが」

「龍鳳の言い分では月様を殺そうと十常侍及び袁家の馬鹿が色々してきて結果『反董卓連合』が組まれるのだったな」

「そいつら…月が死ぬまで、攻撃してくる」

「せやから、最初の一回で終わらせなあかん」

「一番良い方法はそれに参加した諸侯を全滅させる事なのですが…」

「それをすると、また賊が大騒ぎして、皆が困る」

「だから、上手く月様の身代わりを用意して、ご本人には何処かに匿ってもらわないとな」

「せやったら籠っちのところがええやろ。うちらのこともしっかりしっとるしな」

「そう。それに、龍鳳は今、擁州を治めてる。だから、逃げてても、問題ない」

「「「それです(だ)(や)!!」「」

「?」

「恋殿!よくぞ言ってくれたのですぞ!」

「ああ、最悪、連合を組むという檄文が出回ったら身分を隠して我々全員で逃げれば良い」

「無論、その前に洛陽に住む民達はちゃんと逃がさんとな」

「でも、それを知られたら…龍鳳が追われる」

「袁家如き、龍鳳殿の軍と我らの力と函谷関があれば負ける可能性は無いのです」

「「確かに……」「」

「なら、それを月たちにも言っ」

「それもそうだな、最悪の事態に備えてこのことを月様達から龍鳳に伝えておかねばな」

「そうですね、ですがまずは試験をしましょう」

「「「おう(うん)」「」

こうして本人達及び筆頭軍師を完全無視して決まっていく対反董卓連合対策…龍鳳の指導力の高さが垣間見える事態となった事に他

の面子が気づくのはしばらく後の事…

そしてこのことを聞いた月はこれを了承。詠はこの四人がここま  
で考えれる事になった事で軍師として危機感を感じたため普段の仕  
事に彼女達への軍略講義に加えて勉強のやり直しだけでなく政や農  
耕だけでなく謀略などもやり始めた

このことで一つの歴史が変わるなど、誰にも予想は出来なかった

…

### 幕間三 董卓陣営のお話（後書き）

作：はい、龍鳳は気づかないところで歴史変えました

鳳：反董卓どうなの！？前回行くかもって言ってたよね！？

龍：いきなり予定壊すなよ！！

作：なんか書いてたらこんなノリに…後悔はしていない！！…反省はしてるが

鳳：まあ反省しているならまだ良いが…てかこれノリ的に漫画版に近いんじゃないか？

龍：そういえばそうだな

作：てか書き始めたたらそれが頭に浮かんで…そうしたら面白いんじゃないかと…で、こうなりました

鳳：無計画なのはいつもの事だけどさ…

龍：もうちょっと考えようぜ

作：今回は龍鳳の陣営です

鳳：なんか嫌な予感

龍：あきらめろ

#### 幕間四 珀武軍の軍師達のお話(前書き)

作：多分これから暫く二作品とも更新が滞りそう

鳳：卒論か…もう準備しないと遅いもんな

龍：でもまず就職だろう？

作：そっだが…が、半分あきらめオーラを漂わせてる俺は負け組…

鳳・龍：だめだ!!ニートはだめだ!!

作：バイトはするけど…はあ

鳳・龍：(だめだこいつ)

作：…と言っわけで2月から3月ごろまで更新は少なくなります。ご了承ください  
承を

#### 幕間四 珀武軍の軍師達のお話

「はわわ・・・」

「あわわ・・・」

「わわわ・・・」

「ふわわ・・・」

「こ、これは・・・」

長安の城の一画、ここには今珀武軍の軍師が全員集まっていた

なお他の武将陣の内、龍鳳、桃香、紫苑、彩燐、清、優優、双花は民からの陳情整理を筆頭とした書簡を片付け、愛紗、鈴々、星、沙和は兵の調練、凧は警邏、真桜と械那は新兵器の開発及び改良といったところ。ちなみにこれに軍師達が書簡のほうに入るのが普通なのだが、多少おかしい所もあるがこの軍では突っ込む奴はいない

そして軍師達が一同に会して読んでいるのは

「こ、これなら兄上も・・・（ゴクッ）」

「す、素晴らしいでしゅ」

「至極のものでしゅ」

「べ、勉強になりました」

「少し出費が高まりましたけど良いものでしゅ」

何のことは無い、ただの房中術の本もといたただの艶本だった

どうして彼女達がこうしたのを読んでいるのかと言つと・・・

『御館様、反董卓が終わる、ないし群雄割拠になったら私達皆の本懐を遂げて下さるのですよね?』

『ああ、俺と一生を添い遂げたいと言つのだらう?』

『ええ、私を筆頭に古参の者達も、桃香さん達も、勿論桂花ちゃん達も』

『無論だ・・・だが、桂花達軍師陣と鈴々 俺を異性として好いてくれているのか良く分らんが はもう少なくとも二三年は我慢してもらいかな』

『なぜです?』

『俺の前いたところでは・・・というかこの世界でもか、幼くして子供作ると母子共に危険なんだ』

『そうなのですか・・・』

という龍鳳と紫苑の会話を偶然陽里が聞き、軍師達に収集をかけ、話し合った結果本を買うことになり、全員でお金を出し合っって先ほどの本を買ってきたというしだ

ちなみにその原因となった龍鳳だがその後には

『俺の子を産みたいと思ってくれるのはありがたい、だがそれであいつらがいなくなるなんて、嫌なんだ・・・我俣だがな』

『そうですか・・・ですが、御館様が私達のことを深く愛してくださっていると仰うのは分かりました』

『ありがとう、紫苑』

と言う会話をしていたのだが、まあ聞いていたらいたでまた別の騒動が起こっていただろう・・・そして鈴々がないのは話してみたが興味が無かったから

そしてこの本を買うと決めたのは『房中術が出来ればきつと大丈夫!!』という電波みたいなのを朱里が受信したからとも言っておこう

しかし・・・

「はわわ、男の人はこうされると喜ぶのですか」

「あわわ、世、世の中にはこういうのもあるのですね」

「わわわ、お、お尻の穴でするのもあるのですか」

「ふわわ、こ、このような風にも・・・」

「これ・・・勉強になるわね」

肝心の『龍鳳の子を無事に産む』という目的から大きく外れている



彼女達から腹に突撃を受けて前かがみになり、そこを狙ってその本を桂花が回収し、同時に全員その場を離れていき・・・

「い、一体なんだったんだよ・・・」

一人愚痴り、解決できなくなった案件に頭と腹を抱える龍鳳がいた

数分後、様子を見に来た桃香が頭痛腹痛と勘違いしちよつとした騒ぎになったのは完全なる余談である

幕間四 珀武軍の軍師達のお話（後書き）

作：三人称書きやす

鳳・龍：おい！！

作：にしても短かったかな？

鳳：一人一人だと異常な長文

龍：二、三人にまとめると面子が他のところと一緒に面白くないしな

作：と言うわけでサブタイ、『軍師、子を得るために学ばんとすること』をお送りしました

鳳：房中術ってのは実際は男を虜にするためのもので

龍：子をなしても平気な体にするわけではない・・・そのところは？

作：分かってないよ、そういうの彼女達は聞いたこと無いから

鳳：どうやって教えよう・・・

龍：まあがんばれ

幕間五 珀武軍の武将達のお話 (前書き)

作：更新滞るって言って良いのかな？

鳳：昨日の今日だからなあ・・・

龍：本格的にやばくなったら活動報告で良いんじゃないか？

作：そうするか

鳳：今回ののはどういう内容になるかな

龍：しっかり読んでくれよ！！

## 幕間五 珀武軍の武将達のお話

「よし、全員集合したな」

現在、珀武軍の主要武将全員が城内のかなり広い庭に集まっている

「ではこれより、我が軍恒例の全武将による武術大会を執り行う！」  
「！」

『わああああっ！！！！』

観客の数もかなり多いがその中でも一際目立っているのが・・・

「龍鳳——頑張るのじゃぞ——！！」

「負けないで——！！」

どっから聞きつけたのか、なぜかいる皇太子妃の劉弁様（真名を梅芳）と劉協様（真名を桜蓮）だ・・・

現皇帝の靈帝様の容態がよろしくないのに・・・こんなところでなにをされているのか・・・

ちなみにこれは長安に住む民達も見物、もとい観戦している。ちまたでは誰が優勝するのかという賭けが行われているらしいが・・・大事になったりしない限り龍鳳達も本気で取り締まるうとはしていないため、こうして行われている

そして対戦表は・・・

一回戦

関羽(愛紗)

黄忠(紫苑)

姜維(彩燐)

趙雲(星)

劉備(桃香)

なし

張?(優優)

徐晃(清)

凌統(双花)

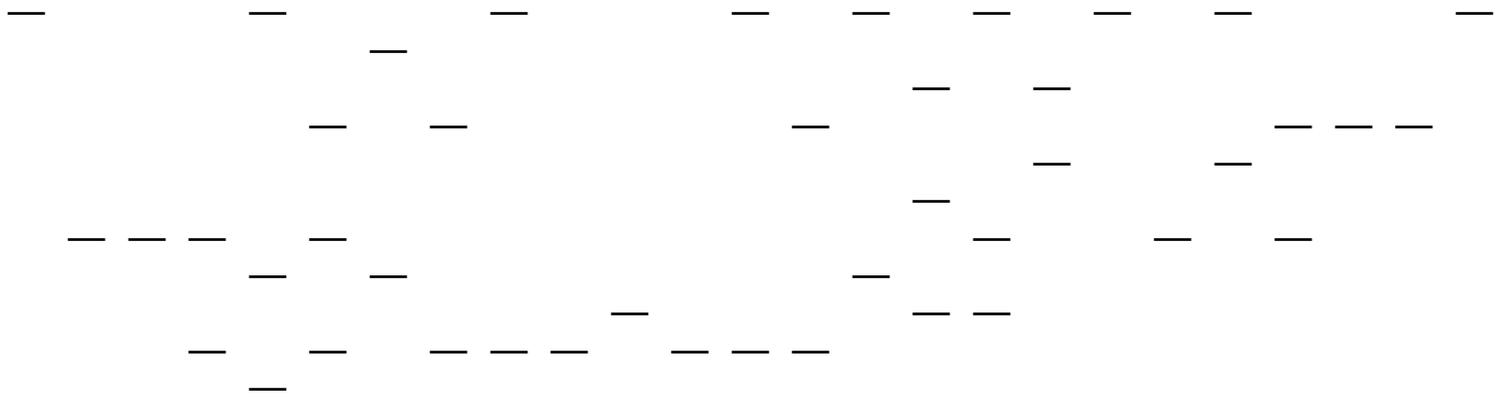
于禁(沙和)

張飛(鈴々)

李典(真桜)

樂進(凧)

黄月英(械那)



と言つ具合だ。審判は龍鳳が務めるため、不正は不可能。得物は刃

物を使うものは潰したものを用意されており、傷を負う可能性は低くされている・・・何度か骨にひびが入るなどはあったが・・・

そして優勝者には褒美として丸一日の休暇、もしくは自身のお願いを何か一つ（不可能なものを除き）上司である龍鳳にかなえてもらえる・・・もっともほぼ全員これを願っているが

ちなみにこれまでの優勝回数は

桃香：二回（二回ともお願い。内容は龍鳳との逢引

愛紗：なし

鈴々：なし

星：なし

紫苑：一回（お願い。内容は龍鳳と逢引

凧：なし

沙和：なし

真桜：なし

優優：二回（二回ともお願い。内容は龍鳳との逢引

清：二回（二回ともお願い。内容は龍鳳との逢引

双花：二回（二回ともお願い。内容は龍鳳との逢引

彩燐：三回（三回ともお願い。内容は龍鳳との逢引

械那：一回（お願い。内容はちよつと高価な部品購入

愛紗、鈴々、星、凧、沙和、真桜の六人は実力はあつても実戦経験が少ないのか、勝ち進めても古参である四人や最年長である紫苑にうまくあしらわれて負けることが多い

その紫苑も結局今まで内政中心だったせいがいざと言う時に体力切れ気味になつて負けることが多くなつてしまった・・・実際にこの間桃香にそれで負けていた

桃香が優勝できたのはそういった運の要素も多い・・・実力が付いたといっても元々差があるため、決勝戦とかに双花、清といったどちらかと言えば力押しで来るのには弱く、負けてしまうこともあった

他のは実力がほとんどといっても良いかもしれない・・・全員が全員の特徴を把握しているといっても良いかもしれないが・・・

械那ははじめての時に欲望が強く後押ししたのか優勝を掻っ攫っていた・・・次の大会では特徴を把握され一方的といっても良い展開になったが

現在の實力は

龍鳳>>>優優、清、双花、彩燐>>紫苑、械那>>>桃香、愛紗、鈴々、星、凧、沙和、真桜  
といった具合だ

さて、そろそろ試合が始まるようだ

「では、試合を開始する！！第一試合の選手、前！！」

「手加減はせずに、紫苑」

「ええ、思いつきり行きますよ、愛紗さん」

「試合・・・開始！！」

開始の合図と共に紫苑は距離をとろうとし、愛紗は詰めようとする・・・弓対長物、遠距離武器と中距離武器では距離を製したものが勝つといっても過言では無いだろう・・・ただ紫苑の矢に限りか

あるが、尽きたとしても戦場を前提としているため補充などは認められない

一方の愛紗も、弓が額や胸などに当たればその時点で敗北なので一瞬でも気を抜く事が出来ない・・・そのため、この二人の試合は膠着のような状態になる事が多かったのだが・・・

「ふふつ、油断大敵よ、愛紗ちゃん」

「なにっ!」

距離をとっていた紫苑が急に愛紗へ接近する・・・このことには流石の愛紗も驚き、対応が一瞬遅れる。その隙を紫苑が付かないはずは無く・・・

「これで決まりね」

「っ!」

愛紗の顔の前には弓に番えられた矢があり、

「そこまで!!勝者、黄忠!!」

『わあああ!!』

「っ・・・また私の負けか」

「ええ、でも物凄い速度でおってくるんだもの、かなりあせったわ」

「だが、勝てなかった・・・私もまだまだな」

「あらあら」

「次の試合を始める！！両者、前へ！！」

「負けません」

「それはこちらの台詞だ」

「試合・・・開始！！」

今回は互いに槍の名手なため、かなりの接線模様だ・・・片方が押せば引き、引いたら押すという形だが・・・攻撃の範囲では彩燐が、手数では星が勝っている為、多少は長引くかと思ったのだが・・・

「はいはいはいー！！」

「えっ、はやっ！！」

星の攻撃の速度が以前よりもかなり早くなっていたため彩燐では対応しきれず、得物を弾き飛ばされたので

「それまで！！勝者、趙雲！！」

『わあああっ！！！！』

「まさかあそこまで早くなっているとは思いませんでした」

「ふっ、私とて何時までも負けっぱなしと言うのは性に会わないので

な

「次の試合を開始する！！両者、前へ！！」

「今回は私が勝つ！！」

「常勝將軍をなめないでよ」

「試合・・・開始！！」

大斧を武器としている清と、爪を武器としている優優、もぐりこめれば優優の勝利、もぐりこませなければ清の勝利となるこの勝負・・・互いにせめぎあう好勝負・・・しかし、次の瞬間模様は一変する

「っ！！」

優優が自身の得物を清に向かって投擲する。しかも飛ばした場所は彼女の顔を狙っていたため清は体制を崩しても避けるか、得物ではじくか、大人しくもらうしかないゆえ、大きな隙が生じる。よって

「はっ！！」

優優の接近を許し、避けたものの不安定な体制なので清は武器を弾き飛ばされ、首筋に武器を突きつけられ

「そこまで！！勝者、張？！！」

「やった！！」

「あー、負けたあー!!」

「次の試合を行うー!!両者、前へー!!」

「負けねえよ」

「こっちの台詞なのー!!」

「試合・・・開始!!」

双花も沙和も接近戦が本領だが、大きな違いがある。双花はどちらかと言えば攻撃に傾倒しているが沙和は双剣なので攻防一体の比重がちようど良いうえ、防御に徹せられるとそう簡単に攻撃は入らず、いたずらに時間ばかりが過ぎていくような状態になる

しかし・・・

「今なのー!!」

「っ!!」

業を煮やした双花の攻撃にあわせて沙和の攻撃が双花の二の腕に当たり、双花は武器を取り落とす

「それまで!!勝者、于禁!!」

「やったなのー!!」

「ちえ、負けちゃったか」

「次の試合を開始する！！両者、前へ！！」

「ぶっ飛ばしてやるのだー！！」

「負けへんでー！！」

「試合・・・開始！！」

この試合も第二試合同様長物対決となったが鈴々の力に真桜が勝てるはずも無く、あっけなく敗北した

「って短すぎやせえへんか!?!」

「なに御空に向かって言ってるのだー?」

「次の試合を始める！！両者、前へ！！」

『（無視した！！）』

「あらあら、星ちゃん、やる気満々ね」

「無論だ、紫苑殿も油断していると足元を掬われますぞ」

「試合・・・開始！！」

愛紗より力は劣るが速度は速い星、そのため先ほどの策は使えない為紫苑はどんどん追い込まれていき・・・

「はっ！！」

「くっ……」

星の鋭い一撃で弓を弾かれてしまい、無防備になった紫苑、よって

「そこまで！！勝者、趙雲！！」

『わあああっ！！』

「星ちゃんみたいな早業対策も考えないといけないわね」

「ならば、私はそれを上回るくらい強くなって見せますよ」

「次の試合を始める！！両者、前へ！！」

「一番弟子の強さ、見せてあげます！！」

「順番じゃないってこと、証明してみせる！！」

「試合……開始！！」

優優が両手武器なので桃香も靖王伝家せいおうでんかと龍帝剣の二刀流で戦う・  
しかし、やはり多少実戦経験は桃香のほうが上のように優勢を保  
つたままだ

「ええい！！」

焦りを出して大振りになった優優、その隙を簡単に逃すような桃  
香では無く……

「はっ！！」

すばやく靖王伝家せいおうでんかで払うと龍帝剣で追撃し……

「そこまで！！勝者、劉備！！」

『わあああつー！！』

「次の試合を行う！！両者、前へ！！」

「負けないのー！！」

「簡単に倒してやるのだー！！」

「試合……開始！！」

「うりやりやりやー！！」

「え？え？え？」

鈴々の猛攻の前に双剣と言えど防ぎきる事は適わず、耐え切れなくなつて両方とも弾き飛ばされてしまい……

「そこまで！！勝者、張飛！！」

「やったのだー！！」

「あつう、まけちゃったのー」

「次の試合を始める！！両者、前へ！！」

「負けません!!」

「これで勝てば……うふふ」

械那が棍で攻撃をするが風はあっさりと見切り、棍を掴むと上空に放り投げ……

「はあっ!!」

「ちょ、気弾はズル……」

ドオン!!

械那はアフロみたいな髪形になり、武器を取り落として地面に落ちる

「そこまで!!勝者、楽進!!」

『（あれみて笑わないんだ……）』

「次の試合を行う!!両者、前へ!!」

「桃香様と言えど、加減はしません」

「負けないよ!!」

「試合……開始!!」

星の速い槍捌きを桃香も両手の剣を巧みに操って防ぎつつ、徐々に徐々に近づいていく……



「うりゃー!!!!」

「はぁあっ!!!!」

同時にかち合う二人の攻撃・・・勝ち残ったのは・・・

「ぐっ・・・」

「か、かったのだ・・・」

鈴々だった・・・

「そこまで!!勝者、張飛!!」

「やったのだー!!!!」

「はぁ、まだまだ修行不足だ」

「すまんが鈴々、このまま決勝に行くぞ」

「良いのだ!!!!」

「よし・・・それでは決勝戦を行う!!!!」

『わぁああっ!!!!!!!!!!』

「まずは中山靖王の末裔、劉備ー!!!!玄德ー!!!!」

『わぁああっ!!!!!!!!!!』

「そしてその対戦相手は、その義妹！！張飛ー！！翼徳ー！！」

『わあああつー！！』

「それでは試合・・・開始！！」

「うりゃりゃりゃー！！！！」

「やあああつー！！」

鈴々の丈八蛇矛じゅうはちだぼうと桃香の靖王伝家せいおうでんかと龍帝剣が音を立てて激突する・

「桃香お姉ちゃん・・・始めて戦うけど本当に強いのだ」

「鈴々ちゃんまで・・・愛紗ちゃんにも言われたけど・・・ね！！」

桃香がはじき飛ばして距離をとると、また互いにぶつけ合っていく

「姉上・・・やはり強い」

「龍鳳様から直接教えてもらったものを毎日欠かさずしてきたらしい・・・お前達と義姉妹の契りを結んでからも、欠かさなかったそ  
うだ」

「本当に御館様の事が好きなのね、桃香ちゃん」

「今回こそ勝って私も自分だけのを教えてもらいたかったのだが・

」

「沙和は張三姉妹の歌を聞かせて欲しかったの〜」

「うちは新しい機械からくりの部品が欲しかったんやけど・・・」

「私もよ〜」

「」「」「もう一度逢引がしたかった・・・」「」「」

・・・新参達は真面目だが古参の者達はもはや欲望駄々漏れである・・・そんなのも耳に入らず　むしろ入ったら怖いが　鈴々と桃香は激突を繰り返している

鈴々の丈八蛇矛じやちやびちまへは星の龍牙りゅうがと違って少々形状的に捌き難いため、返し技を得意としている桃香は苦戦気味だ・・・しかし

「にゃあー！！全然手応えがないのだー！！こうなったら・・・」

「ふふつ、鈴々ちゃん、隙あり！！」

「にゃー！！」

力強い一撃を放とうとした張飛の足下に龍帝剣を投げつけ、体制を崩して首筋せいおうでんかに靖王伝家せいおうでんかを突きつける

「そこまで！！勝者、劉備！！」

『わあああつー！！！！』

「うにゃー、負けちゃったのだー」

「でもやっぱり鈴々ちゃんも強いよ。気の調整が大変だったんだもん。あせるのがもうちょっと遅かったら負けちゃってたかも」

「にゃにゃ、そうなのか？」

「うん、そう」

「にゃ〜もうちょっと我慢すればよかったのだ〜」

「あはは、残念でした〜」

「それにしても姉上、御見事でした」

「あ、愛紗ちゃん、ありがとう」

「本当、お強いですね」

「そうですね、ちょっと羨ましい気もしますが……」

「紫苑さん、凧ちゃん」

「」「」「桃香さん、羨ましいです」「」「」

「優優さん、清さん、双花さん、彩燐さん」

「お前達、今日はもう上がりで良いぞ。ただ軍師達に今日俺は仕事できないとだけ伝えておいてくれ」

『御意』

今回の大会は桃香の勝利で幕を閉じた・・・

なお、皇太子妃が来たおかげで龍鳳が仕事が出来ず、他の仕事が出来るものがいなくなってしまうため、軍師たちがひいひい言いながら仕事をこなし、その罪滅ぼし（？）もかねて今回優勝した桃香の願いも含めて六日連続逢引をする事になって龍鳳の財布が限りなく軽くなったのは完全な余談と言えるだろう

幕間五 珀武軍の武将達のお話（後書き）

作：引越し中にやった武道大会を書いてみました、ただし現時点版

鳳：しかし桃香強いな・・・

龍：張飛に勝つとは・・・

作：桃香はボクサーで言うとカウンターパンチャーだから、後紫苑も、他は沙和が防御重視、他は攻撃重視って感じかな、またその中でも力重視と速さ重視と別れるけど

鳳：確か星と双花が後者だったな

龍：力攻め多いな・・・

作：今回は桃香との逢引でも書こうかな

鳳・龍：ちゃんと書けよ！！

星：誤字脱字報告に意見・感想など色々待っておるぞ。リクエストなどもあつたら受け付ける・・・ただし、R-18に引つかかるよ  
うなものはNGだそうだ

第十四話 龍鳳、仲間を得、師から真実を聞くのこと（前書き）

作：龍鳳強化

鳳：まてえ！！

龍：伏線回収か？

作：劉備強化

鳳：更にか！！

龍：他にはいないのか？

作：馬超達も出したい

鳳：この時期に五虎將軍そろえるのか！？

龍：布陣最強（笑）

## 第十四話 龍鳳、仲間を得、師から真実を聞くのこと

ここ最近ではあまり大きな動きはなかったな・・・

しいて言えば匈奴の連中が来たぐらいか・・・ちよつと叩いて食事もんちらつかせたらあつさり仲間くしてくれたのには驚いたがな・・・

その際に涼州の馬一族とは仲良くなつたな・・・馬騰さんは頭がちよつとあれなのかと凄く不安になったが、姪の馬岱曰く、「翠（馬超の真名）姉さまに合いそうな男の人見つけるといつもああなるらしいので果てしなく『娘馬鹿』だということか・・・

好いている女性が多いといったのだが「英雄色を好む」一言で片付けられた・・・しかも「娘をもらってくれるのなら傘下に入る！」とまでいいきつた・・・

流石にそれには俺も、従軍してきた雛里、明里、紫苑、彩燐、星の五人もあきれているように・・・いや、星と紫苑は新しい玩具を見つけたような顔をしていたが、俺は見えていない、見ていないっから見ていない

まあ本人の気持ちしだいじゃないかと思つたら当の本人は絶賛混乱中でした

時々「まあ確かに格好良いし・・・でもあたしがさつだし・・・デモでも・・・」などと聞こえてきたのは絶賛無視したが、馬岱が「なら私が!!」と立候補(?)で馬超も正直になつたのか、「見極めたい」と言う結論で落ち着いたようだ

そして結果として涼州も俺が管理と言つか支配と言つか面倒を見る事になりました。朝廷が許可を出すはずもない（現在靈帝は体調不良で政治を取り仕切っているのは宦官）ので勝手にやっちゃった状態だ・・・まあ長安には桜蓮様がおられるので全く持って問題はないのだが・・・

そんなこんなで涼州のほうは一日の長がある馬騰に任せ、なおかつ俺達の政治体制に慣れてもらうために馬超、馬岱をこちらに連れってくる变わりに朱里を派遣し、彩燐と紫苑を残した・・・当の三人には恨みがましい眼で見られる事になったが・・・

それからもう半月・・・朱里から万全との報告を受け、全員帰還させる事にしたのだが、馬騰が「こつちはあたしがいりゃ大丈夫だから」と言ってきたので馬超と馬岱はそのまま残り、それを機会としたのか皆で真名を交換したな・・・

なので現在は

- 太守：俺（珀武麒麟こと龍鳳）
- 副官：桃香（劉備）（太守不在時の指揮官的存在）
- 筆頭軍師：桂花（荀？）
- 副軍師：朱里（諸葛亮）
- 軍師：雛里（鳳統）
- 明里（徐庶）
- 陽里（司馬懿）
- 五虎將軍：愛紗（関羽）（筆頭）
- 鈴々（張飛）
- 星（趙雲）
- 紫苑（黄忠）
- 翠（馬超）

四天將軍：清（徐晃）  
           双花（凌統）  
           彩燐（姜維）  
           優優（張？）  
 三鳥將軍：凧（樂進）  
           沙和（于禁）  
           真桜（李典）  
 馬將軍：蒲公英（馬岱）  
           藍菜（馬騰）  
 機械將軍：械那（黄月英）  
 諜報部隊：陰（周倉）（隊長）  
           影（廖化）  
           翳（裴元紹）  
 特殊任務：天和（張角）  
           地和（張宝）  
           人和（張梁）

現在の部隊はこのように分けられている。兵数は二州合わせて約六万・・・これは漢民族だけでなく異民族である五胡を受け入れる、というよりその違いがどこにあるのかを桃香に説かせたからだ。はつきり言っつてこういう力は俺よりも桃香の方が上だ。だからその力を十二分に生かせる仕事が多く、張三姉妹もそれに付いていっている事が多い

なので擁州、涼州では最近異民族が襲ってきたと言う話はなくなりつつある・・・そのなかでもそれに快樂を見出している連中もその一族では煙たがられ始め、そのなかでどうにかしようとしているらしい

よって今日下の問題は・・・

「この書類の量本気でどうにかなんねえのかな・・・てか雑務は半分警邏隊の分隊長にも簡単なものはやらせろっていったのに・・・」

「本当に多いよね」

「はわわ・・・」

「あわわ・・・」

「わわわ・・・」

「ふわわ・・・」

「うう～～」

俺と桃香、軍師五人で書類の中でも重要事項を処理しているのがその中に時々（六～七枚に一枚）そうでもないやつが入ってて、更に涼州も合わせているため必然的に量が多くなり、苦戦しているのだ。

「まあ民の陳情さえその日のうちに終わらせてしまえば大きく問題になる事は無い・・・そういえば將軍達に出すように言った各隊の調練計画表、誰が出てない？」

「えっと、四天將軍と三烏將軍の皆は出してきてるよ」

「五虎將軍は鈴々ちゃんと星さんと翠さんがまだですね」

「蒲公英と藍菜さんもまだです」

「械那さんのほうは大丈夫です」

「通達を出しますか？」

「そうね、明日の昼までに出すように伝えてくれる？もし遅れたら給金二割減ともね。それで良いですか？」

「それで良い。まあ藍菜は涼州だから遅れるのは目をつぶろう・・・軍全体としてはどうだ？」

「兵達の練度もかなり挙がってきました」

「五胡の方達と交流できるようになったのが大きいですね、軍馬が大量に手に入りました」

「更に彼らから教わった馬術も合わさって更に精強な騎馬隊になりました」

「それであまったりしたものを他国に売ったりもしましたので軍資金なども今の状況下でしたら約二年ほど持ちますね」

「兵糧のほうも同様です。更に困っている村町邑に配ったりもしますから良い噂も立っています」

「他にも張三姉妹の噂を聞きつけた人達が軍に入ったりもしています。実際に姿を見せたりもして、なおかつ軍規を守ればいいという条件ですから民達に被害が出ていると言う報告も出ていません」

「そうか・・・では「失礼します!!」「どうした」

「はっ、太守様に会いたいと言う方が来られています」

「何人だ？それと容姿も合わせて報告せよ」

「はっ、人数は五人で全員男性、内二人は筋骨隆々で一人は桃色の下着のみで、もう一人は禪に上着を着ているだけ、他三人はまともな格好をしています。また、そのうち四人は太守様の真名を知っております」

「わかった、全武將に招集をかける、集合場所は玉座の間、それとその客人たちはとりあえず丁重にもてなしてくれ、身なりは伝えてくれた通りだが、心根が悪いやつと言うわけではない・・・一応、俺の武術の師範でもあるしな」

「はっ」

「と言うわけだ。非常に、ひじょーに余り会いたくないがこの時期に来たと言う事は何か意味があるのだろう。・・・行くぞ」

「……………御意」「……………」

それから暫くして、將軍全員が玉座の間に集合した。藍菜は来れないから後で手紙で教えようと考えていたのだが偶然用事があつてこちらに来ていたため参加している。また天和達も関係があるかもしれないと思つたため同様に参加させている

「客人をここへ」

「はっ」

連れてこられる客人・・・八年ぶりに見るが全員変わっていない。  
・・・が、やはり見た目的は凄いのでは？全員が引きつった表情をしている

「久しいな、貂蟬、卑弥呼、于吉、左慈・・・それとそつちの奴は？」

「俺は華佗、字は元化。ゴットウエイドオー五斗米道の医師だ」

「貴殿が・・・で、如何様かな？それとここにいる全員、俺の事を良く知ってるから大丈夫だ」

「・・・今回は全て悪いニュースだ」

「マジかよ・・・」

全員の頭から？マークが出ている・・・

「今のと、これから出てくる意味の分からない言葉は天の国の言葉とでも思ってくれ。で、どんなのなんだ？・・・左慈、頼む」

左慈に頼んだ理由？察してくれ

「わかった。まず一つ目、俺達が追っている人物の事が分かった」

「それって、龍鳳さんが私達の所に転生するきっかけと言うか原因になった人ですよね？」

「そうだ、そいつは今・・・袁紹になっている」

「へく……ってなんだとおおお!!」

「う、嘘でしょ!!あ、あいつが元神!？」

「ありえないありえないありえないありえないありえないありえないありえない」

「落ち着け!!」

『!!』

「それで、どういう状態なんだ？」

「元々女神だったから悪影響はそれほどない……ただ覇気とかそういう類のものは聞かない」

「倒すには首刎ね飛ばすとかしかないのか……」

「だから黄巾党の時龍鳳様の覇気受けても平然としていたんですね」

「そういうことだ……まあそれに関しては大丈夫だろう」

「どういことですか？天の御遣いとか言う人が一緒にいるんですよね？」

「ああ、だが奴の戦闘力ははっきり言ってからっきしだ。ここにいる連中なら労せず勝てる」

「氷輪丸の奥義を使われてもか？」

「ああ、来る前に見たが使っても数分しかもってなかった。そのうえ終わったら倒れこんでたぞ」

「なら威力にさえ気をつけていれば大丈夫だな・・・他には？」

「お前に関するものが一つ、それと」

「そつちに関しては俺が言う」

「分かった・・・龍鳳、最近、目が見えにくくなってきたんじゃないか？」

『！！！？？』

「ああ、もしかしたらと思っていたんだが・・・」

「俺達の力でも完全に取り除く事は出来ない・・・が、正しい方法の裏技でならどうにかなる」

「そうか・・・この大陸一の名医の華佗を連れてきたのもか？」

「そうだ」

「分かった。それで華佗殿、貴殿の様は如何様なものか？」

「ああ、あんたが張三姉妹を保護していると聞いて・・・もしかしたら此処に『太平要術の書』があるかもしれないと思ってな」

「いや・・・天和、地和、人和、お前達は知っているか？」

「あの・・・知ってます」

「実は・・・龍鳳さんに保護される前日に・・・なくなっちゃったんです」

「「なにっ!？」」

「なにがあつたかといいますと・・・」

人和が言うには、俺達の攻撃の前日(つまり軍議があつた日)の夜に何者かが忍び込んで盗って行ったらしい・・・そしてそのことに気が付いたのは俺達に攻められて回りの物を確認した時だそうだしな

「確かに、盗まれたと判断したほうがよさそうだな・・・俺達はお前達がいるところは分かっていたのでそのほうには攻撃していないしな」

「ということは『太平要術』の力を良く知っているものが持ち出したと見て間違いないな」

「誰なんでしょう?」

「それは多分ご主人様ね」

「ああ・・・あいつか・・・なんでそんなことが出来る・・・ああ、黄巾の連中の格好してりゃバレねえか」

「だな」

「で、この後、お前達はどうする予定だ？」

「暫く世話になる予定だ・・・少々お前の事も気になったしな」

「左慈ちゃんだったら素直じゃないわねん。龍鳳ちゃんの噂聞いて悪いのだと流した人達を全員殺そうとしたりもしてたのに」

「貂蝉!!」

「ははは・・・まあ俺も暫くの間・・・恐らく一週間ほど動けんだらうから申し訳ないがその間政務とかを手伝ってもらっても良いか？」

「」「」「いいわよん(ぞい)(分かりました)(・・・いいだろう)」

「では華佗殿、お願いする」

「分かった・・・」

「あの・・・なにするんですか？」

桃香が恐らく全員が疑問に思っているであろうことを華佗に尋ねる・・・

「じつ「華佗、俺から言う」・・・分かった」

「俺の目がちょっとした特別性だということは全員知っているな」

『「」(「)』

「万華鏡写輪眼……この目は使えば使うほど闇へと向かう目……」

「ま、まさか……」

「失明……と言う事ですか」

「ああ」

場の雰囲気は暗くなる……

「それを何とかするために私達はここに来たのよん」

「そうじゃ、おぬしらを守るためでもある」

「失明しないようにするには同じく万華鏡に開眼している『血縁者』の目が必要なのです」

「しかし、龍鳳のは龍鳳のしかない……子供も親ももつ事はない」

「じ、じゃあ……もう失明しかないじゃないですか!?!」

「そうじゃ……だから、裏技としてもう一対……『龍鳳の目』を用意してきたのだ」

『!?!?!?』

「一つ聞きたい、その目に宿っているのも『今と同じ』なのか?」

「そこは分からないわん」

「宿るのはランダムじゃからな・・・しかし今得ているのは無くならんじゃろっ」

「分かった・・・」

「つまり・・・その目をえと・・・龍鳳さんの今の目を取って入れれば龍鳳さんの目は失明しないんですよね？」

「そうです・・・かなり危険な賭けでしたが無事に行ってよかったですよ」

「では龍鳳殿・・・」

「ああ、安全というか離れたところがあるから・・・そこで頼む・・・それと」

「何だ？」

「桃香に五斗米道ゴトウエイドオを伝授してくれないか？」

「えっ!？」

「桃香は医療系の扱いが上手い・・・そうなければいざと言う時居ない者に頼らなくても良くなる・・・」

「五斗米道ゴトウエイドオは人を救う為のもの、俺は構わない」

「ついでですから私達の導術とかも教えましょう、天和さん達も」

緒にね」

「・・・本人達が了承したのなら、頼む・・・」

「わかりました」

「では珀武ど「龍鳳だ」・・・そうか、俺の真名は『舞斗』だ・・・必ず成功させる、この名に賭けてな」

「頼む」

そうして俺達が退席する・・・

その後の事は卑弥呼から聞いたが、武官達は卑弥呼と左慈と貂蟬が、軍師や導術（正確には気を）使える面々は于吉に色々習ったらしい・・・ただとても良い時間でもあったようだ（？）全員が凄く満ち足りた顔をしていたからそこから推測しただけだがな・・・

俺が復帰したのは大体一週間後、万華鏡の文様はいつもの奴が二つ重なっている状態（六枚刃の手裏剣）になった。他に付いたものが何か分からないが、『天照』と『月詠』はそのまま使えることはわかった・・・

また強さのほうもかなり強くなっており、全員が気を併用した戦闘が出来るようになっていた。武官の方は風以外は変換能力がなく、ただ身体強化などにしか使えなかったが、それでもその効果は高く、全員自分の身長のはある岩を軽々粉碎していた

そう、粉碎だ・・・真つ二つとかは聞いた事があるが粉碎とは・・・凄まじい・・・ちなみに風は『風』の変換資質を持っていた・・・

なんか將軍勢全員が別れる前の呂布以上の強さになっている・・・

そして軍師達や桃香は治癒系の術を覚えてきたのだが・・・失った臓器や腕とかを再生させるとか何だよ・・・しかも『寿命は縮まらない』？・・・どんだけえゝ

まあ不都合な部分としては一人分やるとその翌日はまともに動けなくなるようだが・・・

更に全員ゴッブアゴエイトオー五斗米道を覚えてきた・・・そう、全員だ・・・軍師達  
は分かるがまさか武将達もとは・・・もはや笑うしかない・・・

無論、俺も復帰してから覚えた。その後医書『青囊書』を写さしてもらい、また靈帝様のことを直せないか聞いてみたがどうやらもはや末期で華佗でも無理らしい・・・他の皆は靈帝様に会えるほどでも無いので結論としてだめだとわかった・・・

そしてそれから二月後・・・洛陽に居る月達から一報が届いた・・・

『靈帝崩御す』

の

これにあわせて何進が強行に梅芳様を皇帝に添えたが、それを快く思わなかった宦官達によって暗殺されたが・・・しかしそれにも私兵をかなり使い、なおかつ宮中での事だったため月達によって一部というより張讓以外 殺されたのだが・・・それが原因で月を人質にされ、皆はやむなくその支配下になっている状況ということが陰達からの報告で分かった・・・

そしてその張讓は追い落とされたフリをして月を盾に悪政をしているようだ・・・それで民の間には怨嗟の聲が広がっている・・・これは確定だな

「華佗、今『太平要術』は洛陽にある・・・そうでなければああいうことはしないだろう」

「俺もそう思っていたところだ・・・頼みがある」

「・・・俺が知っている事は全部教えただろう・・・従軍以外は認めないし、単身で行っても入れる可能性は無い」

「・・・俺も一緒に連れて行ってくれ!!」

「ああ、恐らく袁紹当たりが檄文を飛ばすだろう・・・俺達は助け出すために行く予定だ・・・そのためには常に前線、先陣に立つ・・・それでも構わないか」

「構わない!!」

「なら良いさ・・・」

その後このことを全員に通達し、いつでも出陣できるように準備するよう指示し、なおかつ全員で行くわけにも行かないため待機組みと出陣組みともそこで分けた

出陣・・・俺、桃香、五虎將軍、三烏將軍、桂花、朱里、雛里、天和、地和、人和

待機・・・陽里、明里、四天將軍、馬將軍、機械將軍からくり

なお出陣には華佗が、待機のほうには師範達が他に加わっている。待機組みは藍菜を主軸とするように指示している・・・なにせこの中で唯一州牧曆が一番長いのだ・・・判断力では軍師達が上だが支配力とかでは負けている・・・なので彼女に任せただけだ

そして三月もたたないうちに袁紹から檄文が飛んできた・・・悪政をしている董卓をぶっ潰そうと言う内容のが・・・裏側とかもしつかりと知っている俺にはあほらしいとか思えないのだが・・・

裏側はアニメ・『乙女大乱』と変わりませんby作者

とにかく、出陣も決まったため、俺は出陣組みを率いて進発した。待機組みには劉表のだあほと劉璋の小坊主に気をつけるよう注意もしておいたから、まあ大丈夫だろう・・・

さて張讓・・・俺の友と・・・愛してくれる女を利用したり監禁した罪・・・その身で払ってもらうからな！！

第十四話 龍鳳、仲間を得、師から真実を聞くのこと（後書き）

作：気が付いたら涼州も併呑していた件

鳳：俺達のところって完全に全員チート部隊じゃないか

龍：ちなみに兵の強さは？

作：指導に熱が入って更に強くなりました。その後町で元盗賊五人が騒ぎを起こしたんだけど偶然居た非番の警邏隊の一人があっさり制圧してました

鳳・龍：って並みの武将と同等！？

作：いや、劣ってます・・・訓練された兵相手でも一対一なら油断しなければ負けないでしょうが

鳳：・・・強いつてのがなんなのかわかんなくなってきた

龍：ノリとはいえこれは・・・

作：反省はしている、でも後悔はしていない！！

鳳・龍：いや、ちょっとはしろよ

鈴：誤字脱字報告に意見や感想とか色々待ってるのだ〜！！

第十五話 諸侯、集結すること（前書き）

作：まずは？水関！！

鳳：激しく嵐の予感・・・

龍：なんか原作ブレイクが普通になってる

作：二次創作だからね

## 第十五話 諸侯、集結すること

長安を出、俺達は連合軍の集合箇所に到着したんだが・・・

「まだ総大将が決まっていけない!?」

「はい・・・」

確認に来た兵（金ぴかの鎧を着ていたから袁紹軍と推測）からそう言われた・・・ちなみに率いてきた兵は総兵力六万五千のうち三万五千・・・しかし兵糧はその倍は持つてきた・・・理由？分かるだろう・・・

「しかしではなぜ貴官らが確認をしておられるのだ？こつというのは総大将の軍の任だと思っただが・・・」

「そりゃあいつがやりたがっているからさ」

「」「白蓮（ちゃん）」「」

「よ、龍鳳も桃香も桂花も久しぶりだな、元気にしてたか、星」

「はい、白蓮殿もお元気そうで」

「こつちはお前の抜けた穴を埋めるのが大変だったけどな」

「おやおや、皮肉を言われるとは・・・白蓮殿も成長されましたな」

「言ってる」

「やりたがってるんならそのままおきや良いのに・・・立候補してないのか？」

「そうなんだよ・・・全く、昔からあいつの相手は骨が折れる」

「ははは・・・大変だね」

「・・・お前ら軍議に参加しないのか？」

『あんなのが居るところに行く価値があるとでも？』

「・・・仲良いな、お前達」

「まあ冗談だ・・・一応顔だけ出すか・・・俺と桂花、翠、それと桃香、朱里、この五人で行く。他の者は天幕の用意を」

『御意』

「しかしお前のとこの軍、強そうだな」

「鍛えてるからな」

「騎馬隊のほうは涼州と五胡の人達仕込みだから白蓮ちゃんの白馬隊にも負けないよ」

「へえ、言うじゃないか」

「・・・そういえばどうして白蓮さんはこんなところ？」

「到着してほぼず〜っと同じことを延々と聞かされてまともで居られると思うか？」

「嫌・・・」

「しかも御遣いって奴が無責任に煽るもんだから止まるどころか増徴していく一方でさ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だから気分転換に来たらお前達と会ったということさ」

「やっぱり参加しないと言うか用事が会っていけないという事だ」  
「だめだ！！」ですよね〜」

「行きたくないというお気持ちは非常〜〜に良く分かりますが」

「この連合の盟主ですから・・・」

「呂布と死合いするほうが遙かにましなんだが・・・はあ・・・」

「ほらほら、観念して行こう行こう」

そうして俺は桃香達に連れられ諸侯が軍議をしている天幕に着いたのだが・・・

「新しい万華鏡写輪眼の能力確認、いってみよ〜」

「「「「「落ち着いて（ください）（しゃい）（！）（！）（！）（！）（！）」」」」」

「冗談だ・・・新技の実験をするだけだ」

「」「」「それもだめ（）です（）でしゅ（）！……！」」「」

「でもこれ聞いて耐えられるのか？」

「」「」「……」「……」「……」「……」「」

「なにやら騒がしいと思ったらあなた達だったのね」

「曹操か・・・一つ聞きたいんだが」

「何かしら」

「どれだけの諸侯が集まってるんだ？」

「あなた達が最後よ」

「来なけりゃ良かった」

「それには大いに同意するけど・・・だめよ」

「今日の食事は胃に優しいものが良い・・・」

「」「」「うんうん」「」「」

「・・・早くきなさいな」

「くくく」

そうして天幕に入ると曹操の近くには護衛の夏侯淵と眼鏡をかけた女（恐らく軍師だ）に周瑜・・・恐らく孫策が代わりに来させたのだろう、同情する・・・に袁術と確か張勳だったか？、それと袁紹かに白い学生服みたいなのを着た奴がいる・・・恐らくあいつが『天の御遣い』とやらだろう・・・

「全員揃ったみたいだから本格的に始めましょうか」

「公孫讚が戻ってきてないが・・・」

「そうですね、では始めましょうか」

「」「」（白蓮さくら）ちゃん（・・・）泣（）」「」「」

「まずは私から自己紹介させていただきますね。かつて三公を出しました名門・袁家の頭首、袁本初ですわ。おゝほっほっほっほ」

「俺は北郷一刀。天の御遣いだ。麗しい将の皆さん、よろしくね（スマイル）」

「曹孟徳よ、こっちは護衛の夏侯淵、それと軍師の郭嘉よ」

『（無視した・・・）』

「周公瑾だ。我が主、孫伯符の名代として今回は参加している」

「妾は袁公路なのじゃ」

「張勳といいます」

「珀麒麟だ。雷將軍という二つ名のほうが分かりやすいだろう・・・後ろに控えているのは護衛の劉玄徳、軍師の荀文若と諸葛孔明だ」

「馬孟起だ。母の代わりとして参加している」

その後も諸侯が自己紹介をしていき、最後の一人のときに白蓮も戻ってきたのでそのまま自己紹介し、本題に入ろうという空気になったのに・・・

「さて皆さん、k」

こっから先はちょっと割愛させてもらう・・・なんで？あんな阿呆な演説まがいのものを延々と聞く時間が惜しいからだ・・・俺は右から左に聞き流しながらこっそり刃禪を行う・・・精神世界つてちゃんとあつたんだよ・・・俺の体は一つだから斬月も抜花のほう一緒に居る・・・うん、こいつらとの死合いも楽しいな」

「（目線）いい加減推薦しないか？」

「（目線）あんな人を推薦するのなんてよっぽどの馬鹿だよ」

「（目線）ですが誰かがしなければ永遠に続きますよ」

「（目線）それで先陣を押し付けられましゅ・・・ってそうならないと助けられないんじゃないでしゅか？」

「（目線）目線なのかみかみだよ、朱里ちゃん・・・でもそれは此処だけ、虎牢関とか洛陽の先陣を取られちゃったら全く意味が無いもん」

「（目線）だな、あたしらの目的は董卓の名を騙った宦官を討つ事、董卓の配下と戦う事じゃない」

「（目線）ええ、ですから兄上もずっと黙ってるんでしょ……条件を飲ませれば良いのですが……」

「（目線）私達がずっと先陣になるという形のですか？……袁紹さんは名門に拘っている……大丈夫でしゅ！！策があまりましゅ！！」

「だから目線なのになぜかむ」「」「」

「（小声）龍鳳さん、推薦してください、私に策があります」

「（小声）分かった……もう貴様で良いんじゃないか」

「あら、私がこの連合軍の総大将でよろしいのですの？」

「ああ」

「では推薦がありましたので、私がこの連合軍の総大将になって差し上げますわ。おほほほほほほほほほほ」

『（ずっとなりたがっていたくせに……）』

「では私達はこれで失礼するわ。決まった事は後で伝令を出して頂戴。行くわよ、秋蘭、凜」

「はっ（御意）」

「私も失礼させてもらおう、曹孟徳殿と同じく、決まった事は後で伝令を出してくれ」

そうして曹操と周瑜が退席する・・・二人ともこっち見たときの目は同情と呆れがあった・・・俺だって好きで推薦したんじゃないよ

「ではなりたくも無いのに総大将にさせられたのですから責任は取っていただきます・・・先鋒を務めていただきますわ」

「良いだろう」

「あら、よろしいのですか？」

「ただし、条件がある」

「何ですか？」

「それは俺のこの軍師からだ・・・孔明」

「わ、わかりました!!」

『（しっかりかんだ・・・）』

「えと、？水関だけでなく、洛陽のほうの先鋒も勤めさせてもらえるのなら、ちゃんと責任を取りましゅ!!」

『（またかんだ）』

「あら、まさか一番乗りの手柄まで持っていくおつもりですか？」

「ちがう、ここにいる連中で洛陽内のことを隅から隅まで知っていて、なおかつ警備体制とかを知っている奴は居るのか？居ないだろう・・・だから俺達は偵察として先に行くという事だ」

「それでしたらよろしいですわ」

「・・・では我々も失礼する・・・攻める準備をしなければいけないのでな」

そうして俺達も退席し、自分達の天幕に戻って明日の作戦を考えているところに伝令が来た

「どんな内容だったのですか？」

「これだよ・・・ある意味すばらしいものだ」

そこに書いてあったのは「雄雄しく、華麗に、勇ましく前進」だった・・・

「どこが素晴らしいのですか？」

「これさえ守れば何しようか勝手ということよ・・・いわば何も指示してきていないのとおんなじ」

「ならどうするのだ？」

「華雄も張遼も強い・・・乗り込む方法は俺と桂花の術で地面から階段を作り出すから、それで・・・そうだな・・・凧、愛紗、お前達が先陣で隊を率いて乗り込んでくれ」

「御意」

「その後ろから鈴々、星、沙和の三人が同じく隊を率いて乗り込み  
終わったらその階段は元に戻す、そして三人は残りを入れるために  
門を開けてくれ」

「御意（分かったの）（だ）」

「そして残りのうち右翼は翠と朱里、中央は俺と真桜、左翼は桃香  
と雛里、紫苑と桂花は後方からの援護だ」

「御意」

「これは勝つための戦ではなく、救うための戦、誰一人死ぬ事はま  
かりならん！」

『御意!!』

こうして始まった『反董卓連合・？水関戦』・・・華雄、霞・・・  
すまん・・・俺はお前達と戦う事になっちまった・・・怨ん  
でくれて構わない・・・だが・・・

「お前達全員を救うには・・・これしかないんだもん・・・」

例えどんなに怨まれようとも、俺はお前達を死なせない・・・友  
として!!

第十五話 諸侯、集結すること（後書き）

作：袁紹を殺したくなった人挙手

鳳：むしろ劇中で殺そうとしてた俺

龍：あれに怒りを感じない人っているの？

作：種馬ボーイ

鳳・龍：あいつは鈍感なだけだろう

作：さて、次回は華雄と張遼との戦い・・・

鳳：愛紗、尻、負けるなよ・・・

龍：何とかしてくれよ、作者

星：誤字脱字報告に意見・感想など待っておりますぞ！！

第十六話 龍鳳、奇策を用いて戦わんのこと（前書き）

作：今回龍鳳の出番はちよつとだけかも

鳳：布陣上俺は前線で暴れまわるわけじゃないからな・・・

龍：布陣的に楽進と関羽対華雄と張遼だね

作：戦闘力は全員ほぼ互角・・・攻の華雄、技の楽進、速の張遼、  
万能の関羽という具合

鳳：なるほど・・・愛紗、尻を応援してくれよ

龍：そういえばお前達って何気に負け無しだよな

作：軍師も将も一流ですから

鳳：ああ！！

龍：ってか俺のほうの更新・・・（泣）

## 第十六話 龍鳳、奇策を用いて戦わんのこと

馬鹿大将からの攻撃命令が届き、俺が戦闘にたち、桂花も側に控える

「聞け、我が軍の勇猛なる将兵達よ！！我らは今から？水関に攻め入る！！臆する事はない！！厳しき訓練を耐え抜いたお前達は大陸でもさほど見かけられぬほどの強さを持っている！！全軍抜刀！！突撃——！！」

『わあああつ——！！』

俺と桂花を先頭に楽進隊、関羽隊と続く・・・距離が縮めて城門の近くまで迫り

「桂花——！！」

「はい——！！」

「土遁・土流階段」

俺達の術により俺達の前から城壁の所まで土で出来た階段が出来る。これは雷遁の術でないと破壊する事は出来ないため接近を許す事になる・・・それに今遠目に見えたが二人ともめっちゃめっちゃ動揺してたな・・・

俺はそのままそこで俺と桂花を倒そうと飛んでくる矢をかわしたり叩き落したりしながら突入隊が入っていくのを見守る・・・

「風、愛紗、鈴々、星、沙和、後は頼んだぞ」

Side Change 龍鳳 三人称

関羽と楽進が先頭で階段を駆け上がり、？水関へと突入するとその前には大斧をもった女性と関羽のせいりゅうえんげつとう青龍偃月刀と似た武器を持った女性が居た・・・彼女達も驚いてはいたが二人を見て顔を引き締める

「我が名は楽進！！」

「我が名は関羽！！」

「我が名は華雄！！」

「うちの名は張遼！！」

「一つ・・・いいか」

「なんですか」

「うちらと・・・全力で戦って欲しい」

「・・・無論です（目線）理由も分かってます」

「（目線）感謝する・・・では」

「」「」「いざ、尋常に・・・勝負！！」「」「」

似た形の武器を持っている関羽に張遼が切りかかり、無手の楽進

に華雄が襲い掛かる・・・これは有利不利ではなく、自分が全力を出せる相手を互いに本能的に見抜いたからだ

もちろん、関羽も楽進も黙ってやられるわけには行かないため、関羽は受け止め、楽進は回避する・・・

そうして抑えるのが役目であるため、二人は自分以外に眼が行かないようあえて全力を出して相手の目をめい一杯ひきつける・・・

張遼と関羽の戦いは・・・張遼が切りかかっても関羽はそれをいなし、そのまま返し切ろうとするも張遼もまたかわすという一進一退の攻防

華雄と楽進の戦いは・・・力強い一撃を紙一重でかわしつつ懐に潜り込もうとする楽進に対し、それをさせまいと大振り和小振りを交互に繰り出す華雄というある意味我慢合戦にも似た状況・・・

双方共に気を抜いたら瞬時にやられるという事をよく理解しているため、徐々に徐々にこう着状態へと入っていく・・・

そして此処に乗り込んできているのは彼女達だけではない・・・

彼女達の配下の兵も乗り込み、それから余り時間をおかずに張飛、趙雲、于禁の三人も兵を率いて乗り込んでくる

これだけの人数が来るとは流石に予想していなかったのか、関内の兵達は動揺してまともに戦えておらず、次々と倒されていく・・・

本来はこういうとき兵達を落ち着けるのが將軍なのだが、この関を守る將軍である華雄と張遼は最初に乗りに込んできた関羽と楽進に

目が離せなくなっているため指示が出せず、混乱を収めることが出来ない・・・

そのため、張飛達の進軍をとめる事が出来る事は出来ず、簡単に城門まで到達されてしまう

そしてその城門前にあつた階段は既になくなっていて、開くのに支障はない。そのため、あっさりと門が開き

「門が開いた！！全軍、突撃！！突入隊も反転して再攻撃！！」

『おおおおつ！！！！』

珀武軍の後詰の援護隊以外全軍が？水関に突入し、残っている兵達を次々と無力化していき、珀武が先頭で戦い、今回の戦闘が始まってからずっと戦い続けている四人を見つけると・・・

「愛紗、凧、幸、霞、そこまでだ」

「！！！！！！！！！！」

珀武が戦っている四人の間に滑り込み全員の武器を己の武器・真せきりゆうしんとうしんせいりゆうれつざんとつ赤龍翔神刀、真青龍烈斬刀、天鳳星凰剣、天鳳威天剣の四本を両手と脇、膝の裏でもって受け止めていたのだ

「これ以上はお前達が不利・・・いや、もはやお前達以外戦っているものは居ない」

「！！！！！！！！！！」

「全力で戦わないといけないという点を突いて一騎打ちに集中させて兵の統率をさせないという策、見事に当たったな」

「しもうた・・・」

「相変わらず弱点を見抜くのが上手いな、お前は」

「ふっ、褒め言葉として受け取っておくよ」

「龍鳳さん、？水関の守備兵は全員降参したよ」

「お前達は どうする？」

「お前達の軍の軍門に下るさ」

「龍つち以外のところは息詰まるっちゅーか殺されるか変な事されそうやしな」

「わかった・・・」

そのあと、珀武は城門に出て

「？水関は我らが占拠した！！皆のもの！！勝ち鬨を上げよ！！」

『うおおおおっ！！！！』

これにて？水関の戦いは集結した・・・降兵及び降将は降伏を受け入れた軍で監視し、彼らの食事及び天幕もその軍で用意せよとの命令が出た

もつとも珀武軍ではもともとそういつ事態を想定して兵糧と天幕は大量に持つてきていたため全く問題にはなっていないが・・・そしてところ変わって洛陽・・・

「？水関が落とされたただとお！？」

「はい、以前董卓軍の客将をしていました珀麒麟率いる軍によって落とされたそうです」

報告をしているのは董卓軍軍師である賈馱、報告を受けているのは十常侍唯一の生き残りである張讓だ・・・なお、董卓軍の主である董卓は現在囚われの身となっており、また現皇帝の梅芳様は直前で長安に逃れて妹で陳留王の桜蓮様の元へ身を寄せており、このことを知っているのは擁州の太守である珀武及びその配下とそこまで逃した管理者四人と華佗だけである

「しかし、奴らにも被害は出たであろう・・・なにせ守っていたのは華雄と張遼なのだからな」

「いえ、報告では奇策を用いられたため兵達はそれに動揺し、殆ど動く事が出来ず、その隙を見事に付いて関を制圧し、両將軍を降伏させたそうです」

「くっ・・・」

「どうされますか」

「ならば賈馱！！貴様も虎牢関に行け！！そこで奴らを食い止めるのだ！！」

「……………分かりました」

「華雄達のように降伏する事は許さん！！したら……………分かっているな」

「……………はっ」

退席していく賈馱……………その背を忌々しげに見つめる張讓……………  
そして天井裏からその様子をずっと見ていた一つの影……………

次の戦場は難攻不落絶対無敵七転八倒虎牢関……………されど、洛陽  
でもなにやら動きがあるよう……………果たして、珀武達は董卓を救い  
出す事が出来るのか……………それを知るのは恐らく……………天のみだろ  
う……………

第十六話 龍鳳、奇策を用いて戦わんのこと（後書き）

作：？水関戦終了！！

鳳：戦闘描写短すぎだろ！！

龍：一騎打ちじゃなかったからな・・・

作：次回は虎牢関！！

鳳：難攻不落や絶対無敵は分かるが七転八倒は一体何なんだよ・・・

龍：何度倒されても蘇るって事じゃないか？ゾンビみたいに

作：そうだとしてもなあ・・・

鳳：次回はどうなるんだろうか？

龍：虎牢関の守将は呂布と陳宮、それに賈馮か・・・

作：龍鳳達以外が攻めると最悪壊滅します

鳳：お山の大将が死ぬのは別に構わんが・・・

龍：曹操とかの時は助けに入るんだろうな

作：誰を先鋒にするかまだ決めて無いから・・・まあ誰でも呂布と龍鳳の一騎打ちは決まってるから

鳳：腕が鳴るぜ

龍：がんばって〜

翠：誤字脱字報告に意見・感想とか待ってるぞ！！

第十七話 龍鳳、呂布と雌雄を決せん（前書き）

作：対呂布戦！！

鳳：初めて本気で戦つぜ！！

龍：虎牢関壊れないよな・・・

## 第十七話 龍鳳、呂布と雌雄を決せんの事

「空は良いなあ……」

「現実逃避はやめてください、兄上」

「そつでしゅ!?!」

「いざとなつたら助けに行かないといけないんでしゅよ!?!」

「だつてなあ……」

「?水関攻略から二日、俺達連合軍は現在虎牢関を攻略しているのだが……」

「恋の奴やつぱり強いな」

「あ、また吹つ飛びました」

「でも吹つ飛んでるのは袁紹軍の人達だけでしゅね」

「そういう風に軍師達がたずなを握ってるんでしょ」

「だろうな……孫策のことと曹操のそこには矢が大量に送られるけどな」

「アレはアレでいやね」

「まあ械那と真桜に作らせた大鉄防矢矛盾があるから大丈夫だろう」

がな・・・打ってくる方向は限定されてるし」

「この後はどうしますか？」

「まあ折見て戦場に入るさ・・・」

なお俺と軍師達は俺が考えた片遠眼鏡（手持ちの望遠鏡のようなもの）を使って前線の様子を観戦しており、他の武将達はいつでも出撃できるように自分の部隊で待機している

「あ、袁紹ぼかのこの前線が崩された」

「それに反応して二枚看板と御遣いとやらが向かったわ」

「つて一撃で吹っ飛ばされました!!」

「孫策軍から援軍として甘寧、周泰、それに大将の孫策が動きまじゆた」

「曹操軍からは夏侯惇、許緒、典韋ですね」

なお此処までの確分かるのは牙門旗と諜報隊の情報のおかげである

「流石にまずいな・・・全軍出撃!!非常に不本意だが、旗を守りに行くぞ!!」

『はっ!!』

そうして俺達は一応、名目上は盟主である袁紹ぼかを助けに向かった・・・が、そこで見たのは六対一なのに一方的に攻撃を加えている恋

の姿であった・・・

「ってあいつらが弱いのか恋が強いのか一概に判断は出来んがな」

「「「いえ、恋さんが強いんです（しゅ）」」」

「まあ言ってみただけだ・・・孫策軍、曹操軍の援護を五虎將軍と三烏將軍で、残りは軍師の指示で袁紹はかを下がらせる、俺は戦っているところに行く」

『御意』

そうして俺は恋のとこへ向かった・・・てかあれは

「旋風・・・激烈斬!!」

まずい!!アレは流石にあいつらでも喰らったら死ぬ!!

「月牙・・・雷天衝!!」

ズガアアアン!!

何とか相殺できたか・・・しかし威力がでない・・・だが今のうちに仙人状態になって雷天装鎧を発動させて、万華鏡写輪眼にしておくか・・・

煙が晴れる・・・

「久しぶり」

「そうだな、黄巾以来か・・・あんたらは下がれ、適う相手じゃない」

「それはお前にも言えることだろう!」

「雷將軍だからって勝てる相手じゃないわよ!」

「追い越したくて・・・頑張った・・・」

「」「」「」「!」「」「」「」

「そうか・・・」

「・・・知ってる?」

「全部知ってる」

「なら・・・」

「だからこそ、だ・・・分かってくれ」

端から聞いていたら全くわかんない会話だが、優秀な奴だと俺が董卓のことを、その軍のことを、洛陽の事を良く分かっている内容だ・・・

「まあそんなことは抜きにして、俺はお前とはちょっと全力で遣り合ってみたい・・・」

「・・・ん、分かった・・・」

「なら・・・行くぞ!!」

「ん!!」

俺が左切り上げを出すと恋は逆方向から攻撃を繰り出し、つばぜり合いのような形になる・・・

「まだ行くぞ!!」

「負けない・・・」

俺達は互いの得物を振り合い、何度も視線と得物が交錯する・・・が・・・

「恋、勝つといった割りに、本気で来てないじゃないか」

「それは・・・龍鳳も・・・」

「おいおい、俺は十分に出してるぜ」

「まだ・・・上がある・・・ずっと・・・分かってた」

「ちっ・・・まあそれとやりたいんだったら、それを使わないと勝てないと俺に思わせなきゃ無理だぜ」

「なら・・・!!」

「っ!!」

恋の速さがあがった!!

「だが・・・」

対処できない速度じゃない!!

「ふっ!!」

「っ!!」

柄を掴んで何とか投げ飛ばした・・・って

「さらにはやくなった!?!」

万華鏡写輪眼と仙人状態の蛙組み手・・・危険感知が広くて早いのが特徴だから恋がどこから攻撃しようとしてきているのかはわかるが・・・

体が追いついてくれねえ!!

なんとか攻撃はさばいちゃいるが・・・いつかつかまる!!・・・なら!!

「月牙天衝!!」

「!!!!」

地面に向けて月牙天衝放ち、当たりの視界を悪くし・・・

「恋!!今から俺の本気を見せてやる!!」

あえて言う・・・これで恋も手出しはしてこないだろう・・・

「おおおおおおお！！！！」

気を込め・・・解き放ち、叫ぶ！！

「卍・解！！」

開放された気が爆発したかのように飛び、あたりの土煙を払い、出てきた俺の姿は・・・

「天鎖斬月・・・これが今の俺の一番強い状態だ」

漆黒の刀身を持った日本刀のような形状、鍔は卍型、柄のしりからは鎖が出ている

「それが・・・」

「そして気をつけろよ・・・この状態では力も早さもさっきの・・・

「ここで俺は一瞬で恋の懐まで潜り込む

「！！！！」

「最低でも・・・五倍だ」

そのまま斬月を振り、傷を負わせようとするもギリギリで距離をとられかわされる・・・

だが・・・

「おそい！！」

「！！」

その場所に既に俺はいる！！

恋が防御主体の体制になり俺はそれに気づくも構わず斬月をすばやく振っていく・・・

ギャンギャンギャンギャン！！！！！！

「まもんのも上手いな」

「っ・・・」

しゃべる余裕もないか・・・まあこれの早さには俺でもついていけないときがあるからな・・・まあそう落ち込む事でもない気がするし・・・

てか時間がないな・・・此処に着いたのが昨日で攻撃始めたのが昼の一刻（二時間）前だったからな・・・

恋が出てきたのは昼過ぎ・・・どんなものか様子を見てからの投入か・・・守る気満々だな

それと今俺の軍が援護に回って曹操軍も孫策軍も撤退してる・・・しかし・・・



かどっかに吹っ飛んでった

「邪魔が入ったから、仕切りなおしといこうか」

「（コクッ）」

そして互いに武器を構えて再開しようとしたそのときに・・・

『わあああつー!!』

虎牢関のほうで歓声上がる・・・気になったので恋と距離を置き、虎牢関の方を見ると

「俺達の旗？」

「落とされた・・・」

それで恋は俺達へ降伏し、部下全員を連れて俺達の天幕に来た・・・

今はその報告を聞いている・・・なおこれで袁紹達（曹操、孫策含め）筆頭とした連中にちょっと白い眼で見られるだろうが、友の命と天秤にかけたらそんなの些細な問題だ

聞くと俺と恋の戦いの間に落とそうと決め、向かったら曹操軍と孫策軍の猛攻で今日の分の矢を使っていたらしく、殆どこず、更に愛紗、鈴々、翠、星、凧、沙和、真桜、桃香の七連撃で虎牢関の城門破壊し、そのまま関内に流れ込んだとか・・・褒めるべきか呆れるべきかで真剣に悩んだのは内緒だ

そのときの詠とねねはなぜか抵抗しようとしたらしいが、朱里と雛里の風遁の風に吹っ飛ばされて桂花の土遁で捕らえたそうだ・・・

「だから汚れてんのね」

詠とねねをみた第一声がそうなる・・・しかし、月第一の詠がなぜ・・・

「あんたらに抵抗もせず降伏したら・・・」

「そうか・・・なら、仕方ないな」

「うちら抵抗したよな？」

「ああ、攻め込まれて取り囲まれて降伏した気がするが・・・」

「張讓の下には捻じ曲がって伝わったんだろう・・・隠密のほうに期待するしかないか・・・」

「月の場所を探させてるの？」

「ああ、宮殿の構造は大体覚えてる・・・隠し場所に適した場所もな・・・そこを重点的洗わせつつ、張讓を見張らせてる」

「なら・・・」

「月は助け出す・・・あいつを死なせてたまるかよ」

「ありがとう・・・」

「当然のことだ。礼は良いぜ」

「素直に・・・受け取る」

「そうですぞー!!」

「そうか？」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

「なら、素直に受け取っておくか・・・」

「それで、この後はどうするの？」

「洛陽についたら俺達が偵察する事になっている、そこで月を安全無事に確保して、恋の家族を救い出す」

「ほんと？」

「ああ」

「なら・・・一緒に・・・行く」

「分かった、偵察に出るのは俺と恋、詠、霞、桃香、桂花、ねねで、恋、ねね、桃香は恋の家族を、残りで月、董卓を救い出し、残りはそれを悟られないような陣立てを」

『わかった  
御意』

こうして虎牢関戦も終了した・・・が、？水関に続いてここも俺

達が落とした事になる・・・世論的には凄く良いのだが・・・他の諸侯からの風当たりが強そうだな・・・

てか攻城戦の訓練とか・・・あ、俺達出来るのは気を変える術、『変気術』を俺がほぼ会得しているからか・・・孫呉対策の船での戦も雛里を中心に行ってる、雛里は水・風の資質変換持つてて本人も舟に強かったからな・・・船団できたら雛里を大都督にするか

ちなみに攻城戦は俺と桂花が城門に見立てたものを土遁で作り上げ、有効的な攻め方を將軍をはじめ兵たちにも教えてる・・・あ、良い方法思いついた

今度からそれで簡単な山作って準備運動の走りこみはそこを走らせよう！うん、兵達の命を守るためなら作るのなんて苦じゃないぜ！！

「兄上、本当にいい加減にしてください、そんなに一心不乱に書簡を作っても言い訳には出来ませんよ」

「行きたくないでござるー」

「気持ちはこちらから、私達もちよつとやっちゃったかな」とは思いましたけどさっさと洛陽に行きたい袁紹達からは特に何も言われないでしょう」

「曹操と孫策んとこの漁夫の利になってんだぞ・・・これ盾に同盟とか迫られたらどうすんだよ」

「もともと苦戦していた彼らの援護ついでに落としたのです・・・まあ彼らではなく私達が先鋒でしたらここまでの被害は出ませんで

したが

「最初っから恋対俺でその隙に落としゃ良かったもんな」

「ええ」

「はあく・・・とにかく、逝ってくつか・・・」

「何でしょうね、間違っているはずなのにあってるようにしか思えないのは・・・」

そんなこんなで軍議に出たのだが・・・次の洛陽の偵察のために翌朝さつさと進発するように言われたのを良い事に準備があるからと話もそこそこに軍議を抜け出した

最後の洛陽か・・・偵察で潜入して月さえ救い出せば俺達の勝ち、出来なければ負けだ・・・

・・・分の悪い賭けだが・・・負けるかよ!! やってやるぜ!!

第十七話 龍鳳、呂布と雌雄を決せん（後書き）

作：邪魔者でしかなかった種馬

鳳：弱いんだな

龍：ちゃんと修行していれば強かったんじゃないか？

作：うん、真面目に訓練とかしてれば強くなれる強い肉体もらってるんだけどそれにかまけてしてなかったから一般人と同じ

鳳：だからぶっ倒れるのか

龍：空気ってどうなるの？

作：加速するとおもう・・・まあ原作プレイクはするけどな

鳳：どんなの？

龍：ある意味予想はつくから言わないでおこう

桂：誤字脱字報告に意見・感想とか色々待ってるわよ

第十八話 龍鳳、復興を行うのこと（前書き）

作：一度書いたのが消えたorz

鳳：これで何回目だよ

龍：通産二度目じゃないか？

作：なんでだ〜！！

## 第十八話 龍鳳、復興を行うのこと

俺達は現在洛陽の復興を行っている

董卓の名を使って張讓の奴の悪政のせいで洛陽ははっきり行って袁紹のお膝元バカのほうがましなんじゃないかって言うぐらいに荒れ果てていた・・・

ちなみにその張讓は『董卓』として袁紹に殺されている

そうなった原因は俺なんだけどな・・・

なにがあつたのかを簡潔にまとめると

・ 偵察という名目で潜入、面子は俺と桃香、桂花、恋、霞、幸、ねね、詠

・ 俺と霞、幸、詠は月の救出に、残りは恋の家族の下へ

・ 途中で陰と合流、月のいる場所に行くのが難しい・・・

・ ならば張讓を利用しようと奴の元へ向かい、写輪眼の催眠で案内させる

・ 月を救出、その後案内させた時と同じく催眠で董卓は自分だと思わせる

・ その後自軍に合流、そこで一部諸侯に何かいわれた気がするが適当にあしらったから覚えていない

それで今は炊き出しと復興とに大忙しだ・・・

最も隊はちょっと細かく分けてある

・警備隊（凧・沙和・真桜）は洛陽の治安回復のために場違いな奴ら（連合軍の諸侯の手勢含む）の捕縛

・愛紗と翠は今回の騒動のきっかけの動乱の最中になくなった『玉

璽』の回収

・桂花、朱里、雛里、月、詠、桃香、紫苑は炊き出し

・鈴々、星、恋、霞、幸は復興用資材の運搬

俺はその総指揮だから特に決まった事はない・・・まあ基本的に炊き出しの近くで子供達の相手をしたりしているわけだが・・・

天和達は炊き出しの近くで簡単に歌ってもらっている。子供達だけでなく大人もたくさん聞きに来てくれている・・・一部黄色いはずびを着てた気がするが気にしたら負けだと俺は思う

そして太平要術を封印するためについてきた華佗だが流石に場所が分からなかったが、張譲が持っている可能性が高いため奴がいた場所を隠してありそうな場所を全て教えておいた

「あら、あなたは護衛も無しでこんなところにいるのね」

「曹操・・・」

「にしてもあなたの軍の連中、凄く頑張ってるわね」

「孫策・・・周瑜も一緒か・・・それと・・・孫権か？」

「久しいな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

孫権の奴は睨んでるな・・・まあ活躍の場を奪ったわけだし、しようがないか

「で、何のようだ？」

「ちよつと様子を見に来ただけよ」

「私達もよ〜」

「ならそういうことにしておこう・・・俺達の炊き出しのものでも食べていくか？」

「そうね、ありがたくいただくわ」

「へえ、おいしそうじゃない」

「凄いな・・・」

「・・・・・・」

ちなみに炊き出しで作っているのは前世の日本では定番だった豚汁とそれにうどんを入れたものに塩おむすびだ。ちなみにうどんは小麦粉があつたからためしに作ってみたら出来た・・・てか小麦粉ってこの時期中国なかったよな・・・それに味噌も・・・てか作るのに塩が必要だったよな・・・まあここは『外史』だからというなのご都合主義で済ませられるんだろうな・・・

「あら、美味しいわね」

「ほんと、美味しい〜」

「珀武、この汁は味噌というのは分かるがその中に入っている白のは何だ？」

「ああ、それは『うどん』って言ってな、小麦粉から作った」

「最近涼州の『絹の道』の先の羅馬のほうから来た粉よね・・・食材だったの？」

「向こうの方の人達はそれを使って食事をしているそうだな」

「流石、擁・涼州を治めているだけあって情報が早いわね」

「まあな」

「あ、あなた涼州も治めているの!？」

「ああ、つい三ヶ月ほど前からな」

「っ!?!」

「蓮華、あなた知らなかったの？」

「実際は馬騰殿が治めているようでしたけど実際の施政者は珀武だ。長安の治安体制と同じだからな」

「まあ今回の褒美で正式に認めてもらうつもりだがな」

「そう、それ以上のものをもらっても良いのに、その程度にするのね」

「元々俺は董卓のとき武将と軍師を救いたかったから参加しただけだ」

「どづいつこと？」

「実際に悪政をしていたのは董卓ではないという事よ」

「えっ!？」

「耳が早いというか、その情報は流石に持つてるか・・・まあそう  
だ。とは言っても、本人は既に物言わぬ骸だがな」

「そうね・・・」

「ま、しかしマジで外道だったな・・・」

「そういえばあなたは偵察で入ったのよね」

「ああ、それで聞いたのがよ、あいつ等を使うために、あいつらと  
仲の良い町の娘を人質にとったそうだ」

「そんな!！」

「で、それもあなたは掴んでたから偵察に出たのね」

「正解だ。まあその子はさっき聞いたが涼州の出身らしい、だから  
俺が責任もって送り届ける」

「まあ確かにそこはあなたの領地ですからね」

「で、これからはどうするの？」

「大陸を平定する」

「正気か？」

「ああ」

「ふふっ、ではこれからは敵ね、珀武」

「そうなるな、曹操・・・必ずお前を下してやる」

「それはこちらの言葉よ」

「ふふふふふ（ははははは）」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

俺と曹操の覇気がぶつかり合う・・・その余波で孫策達が身構える・・・

「しかし、今回の活躍できなかつたくせに、大丈夫なのか？」

「あら、相手はあれよ、負けるとでも？」

「天とやらは余りなめないほうが良い・・・たぶんな」

「そうね・・・多少は警戒しておくわ」

「で、孫策達はどつするつもりだ？」

「・・・母様の治めていた土地を取り返して、劉表を滅ぼすわ」

「前半は可能だろうが、後半は無理だな、俺のほつが早いだろう・・・」

「それはどうかしら？」

「事実だ。俺の軍をなめているといずれ後悔するぞ」

「あら、そんなに自信があるのね」

「お前達が苦戦していた呂布隊を押さえ込んだ時点で分かるものだと思うがな」

「お前の軍の情報は殆ど入ってこない・・・規模やどんな部隊があるかぐらいだ・・・」

「そりゃ徹底的に潰させてるからな・・・それで本当に出来ると思っつか？」

「やってみせるわ」

「ええ、度肝を抜かせてやるわよ」

「そっか・・・ならば賭けをしようか」

「」「賭け？」

「そつだ・・・曹操にはこの二つの剣、炎骨刃えんこつじん、七星剣しちせいけんの所有権を  
かけよう」

「真の理想を持つものに力を与える剣・・・あなたが持ってたのね」

「これをお前に渡しておく、俺を打ち破った時、正式に所有者とな  
れ」

「逆にあなたが私を打ち破ったらそれはあなたに返還、そういうこ  
とね」

「ああ、孫策達にはこの刀、虎錠刀こていとうの所有権だ」

「真の勇氣を持つものに力をかす刀・・・お前が持っていたのか」

「これをお前達に貸してやる・・・孫文台が治めていた土地を取り  
返し、劉表を滅ぼしたらくれてやる」

「逆にどっちか一つでも出来なかったら私達の負け、それを返すと  
いう事ね」

「そつだ・・・まあ両方とも無理だろうが」

「勝つのは自分・・・やはり自信があるよつだな」

「ああ」

「負けないわよ」

「ほえ面かかせてやるわ」

「言ってる。・・・楽しみにしているぞ」

「ええ」

「まってなさいよ」

そういつて曹操も孫策も去っていく・・・さて、これで本来持つべきものに武器を渡す事は成功したな

それからすこしして愛紗達が戻ってきた

「ただいま戻りました・・・」

「ああ・・・って何でそんなに落ち込んでるだ」

「落ち込みもするさ・・・実はな」

舞斗から聞いた内容はどちらも驚愕の内容だった

「そうか、玉璽も、太平要術も・・・」

「はい・・・」

「すまない・・・」

「いや、非はこちらにもある。偵察の時に探しておけばよかったんだ」

「でもよ。張じ「董卓」「ごめん、董卓が持ってなかったのならどこ」

にあるっていつのさ」

「一番乗りを頑なに狙っていた袁紹、そして御遣いがもっている可能性が高いな」

「ではすぐに」

「ああ」

「待て!！」

「どうしてですか」

「そうだ、封印しないと危険なんだぞ」

「俺のさっきのは「推測」だ・・・確たる証拠もないのに問い詰めても知らぬ存ぜぬで通る・・・」

「でもよ、御使いはなにが目的でもってつたんだ?」

「太平要術の方は俺よりも華佗の方が予想つくだろう・・・玉璽は恐らく袁の王朝を作るためだ」

「あやつらの・・・ですか?しかし、意味がないように思えますが」

「そうだ、意味がない・・・しかし、その事を奴らは分かってないのさ」

「?なんでなんだ?」

「今支配しているのは「漢王朝」だ・・・俺達は皆そこに許可されて土地を治めている・・・馬騰が俺の治世下に入ったのもそういう裏側があつたのさ」

「なるほど・・・つまり勝手に王朝を立てた場合は『反逆』になるってことか」

「そういうことさ・・・華佗、そっちのほうは分かるか」

「いや・・・申し訳ないが全く予想がつかない・・・」

「ためるだけじゃないだろう？」

「ああ、だが、どんな効力を持っているのか、良く分かっていないんだ」

「天和達のようなものじゃないのか？」

「あれは望む者の望む物を写すと言われている」

「つまり、人によって見えるものは違うという事か・・・」

「ああ」

「奴らはそれを使ってなにをするつもりなのでしょうか・・・」

「御遣いはそれで足りぬ己の実力を埋めるんだろう・・・付け焼け刃な上要力がなくなったらその効力も切れる・・・無駄な事だ」

「じゃあ、ほうっておくのか？」

「ああ・・・まあただこのままなら曹操は負けるな」

「確かにな・・・その力があると勝てるとは思えない」

「ですが曹操殿の軍の強さは我が軍に劣るものではありませんが、袁紹如きに負けることはないと思います・・・」

「その強さを太平要術で補うのさ、そうすれば数の戦いになる」

「そうなるに確かに勝ち目ないな・・・あそこ数だけはあるから」

「・・・まるで曹操殿が負けるのを望んでいるようですね」

「そういうわけじゃないが・・・ま、勝敗は時の運だ・・・情報収集だけは怠らなければ良いだろう」

「では、俺は失礼する」

「行くのか」

「ああ、この軍にいたら袁紹達が持っているとおわかってもらえないだろうからな」

「そうか・・・また会えるか？」

「たぶんな・・・じゃあな」

「ああ、世話になった」

「それはこつちの言葉さ」

そうして華佗が去っていく・・・

「行かれてしまいましたね」

「また会えるさ・・・」

「で、これからはどうなると思うんだ？」

「俺の予想ではまず各軍 俺達も含めてな 内政を整えるだろう・・・  
それから、戦が起こる」

「まずはどことどこですか？」

「袁紹と白蓮・公孫讃と徐州の陶謙と袁術だな」

「白蓮殿が・・・どうなると思いますか？」

「まあ白蓮も陶謙も負けるな。質が良くても数には勝てんだろう・・・  
陶謙は純粹に潰される」

「そうか・・・」

「まあ、生き残るだろうから大丈夫だと思うぞ、それに袁術の方も  
あまり良くないぞ」

「なんでだ？」

「小猿では虎を飼うのは不可能という事さ」

「造反ですか・・・確かに・・・ですが、徐州を盗って生き残るのでは？」

「いや・・・曹操がそれで期を見て攻め込むさ・・・それで徐州は曹操が、呉は孫家が、河北は袁紹が治めるだろう・・・」

「そこからは？」

「袁紹と曹操が争う。俺に予想できるのはそこまでさ」

「確かに、これ以上はないでしょうね・・・」

「まあ袁紹と曹操のどっちが勝つかで変わる、か・・・あたしらはどうするんだ？」

「荊州と益州の統治が悪いというのがあがってきている・・・皇族といえどこれ以上統治が悪い場合は領地の召し上げ、反抗した場合は逆賊になって俺達に討伐命令が来るだろう・・・というか既に統治を改めるよう勅命が出ているはずだ」

「従わなかった場合は我々が二面作戦で攻略ですか」

「その配置ももう考えてある・・・そのためにお前達に知もつけさせただからな」

「そこまで考えて・・・」

「本当に凄いな・・・」

「いや、俺も凄いが女性に勝てるとは思えない」

「?なんでだよ」

「女性がいなくては子がなせないからな」

「くっくくくくくくくくくく」

「だから、お前達には死んで欲しくないのさ」

「本当に・・・」

「ん?」

「私達と・・・子をなしてもらえるのですか?」

「ああ、だって俺はお前達・・・今回連れてきているだけでなく置いてきちまった連中も、恋も月も好きだから・・・女性と愛しているからな」

「くっくくくくくくくくくく」

「それに、これが終わったらもう気にする必要もないしな・・・」

「くくくくくくくくくくく」

顔を真っ赤にして凍った愛紗と翠を置いていく・・・復興資材も順調に配り終わったようだ

兵糧の量から一週間といったところか・・・その間にやれるだけ

やっ  
てお  
くか

第十八話 龍鳳、復興を行うのこと（後書き）

作：反董卓連合編、終了！！

鳳：準備、？水関、虎牢関、洛陽と四話か

龍：更新・・・（泣）

作：あははは

鳳：ごまかすなよ・・・まあ頑張れ

龍：これからはどうなるんだ？

作：荊・益州攻略編と幕間だな。拠点とも言うが

鳳：目指せ、童貞卒業！！

龍・作：死ねば良いよ、お前

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5111x/>

---

真・恋姫†無双～伝説を継ぐ物と愚者～

2011年11月26日21時45分発行